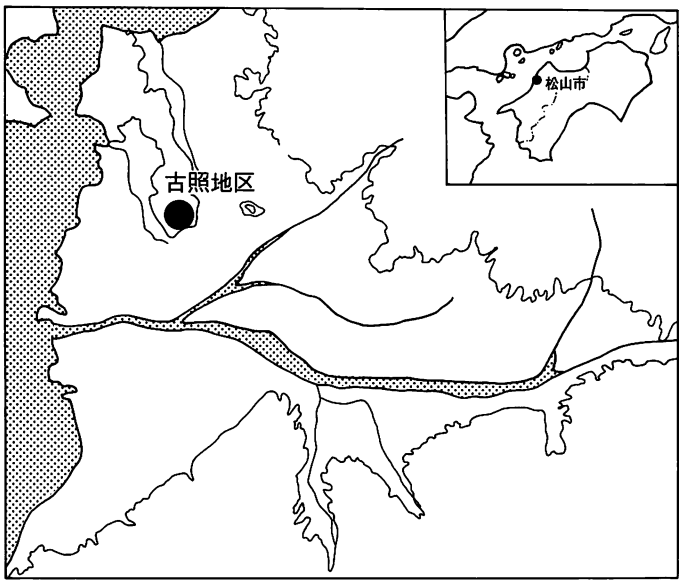
松山市文化財調査報告書29

朝美澤遺跡
辻町遺跡

1992
(財)松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

松山市文化財調査報告書29

朝美澤遺跡
辻町遺跡



1992

(財)松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版１　辻町遺跡　ＳＸＩ出土遺物

序

本書は、1991年度に宅地開発に伴って事前に緊急調査いたしました、朝美澤及び辻町遺跡の発掘調査報告書であります。

両遺跡は、松山平野の西地域にあります大峰ケ台丘陵及びその周縁地にあたる遺跡であり、付近には生産遺跡を代表する古照遺跡をはじめ、出現期にかかる有力首長級の墓、朝日谷古墳など著名な遺跡が所在致しております。

近年の調査では、大峰ケ台山頂から弥生中期の集落形態や古照遺跡５・６次調査での古墳時代の堰周辺環境、さらにはその上層にあたる南江戸鬮目遺跡での13世紀代の一括遺物や集落存在などが解り始めております。

今回調査の大峰ケ台東緩斜面に立地する朝美澤遺跡からは、古代～中世に比定される掘立柱建物を検出した外、弥生前期前半の包含層を検出し、それより一括的様相をもつ土器類の出土がみられ、瀬戸内地方の前期土器研究において貴重な資料になると思われます。

一方、辻町遺跡の調査で検出いたしました古墳期の祭祀的要素をもつ遺構からの一括須恵器類の出土は５世紀代の土器編年等に有効な資料であると思われます。

これら両遺跡の調査は、古照遺跡に関係する宮前川中流域の遺跡様相を知るうえでも貴重な成果を得たものであり、今後一層の調査研究が期待されるところであります。

本報告書が、多方面にわたって広くご活用していただけることを心から願っております。最後になりましたが、調査にあたって多大のご協力、ご理解をいただきました事業者及び地権関係者のほか関係各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成４年８月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団

理事長　田　中　誠　一

例　言

1．本書は、松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センターが平成３年に松山市朝美町２丁目1141番地１他、辻町39番地１で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．遺物の実測・挿図の製図は、調査担当者の責任のもと、水口あをいを中心に関正子、多知川富美子、萩野ちよみ、矢野久子、吉井信枝、白石聖子、瀬戸恭子、藤井宏枝、藤沢真美、森田晶子、山下満佐子、松山桂子、三木和代、兵頭千恵、好光明日香、大西陽子があたった。

3．遺構は呼称を略号で記述する場合がある。溝：ＳＤ、土壙：ＳＫ、柵列：ＳＡ、柱穴：ＳＰ、掘立柱建物：掘立、性格不明遺構：ＳＸである。

4．遺構図・遺物図等の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

5．本書に使用した方位はすべて磁北である。

6．本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

7．本書の執筆は、梅木謙一、宮内慎一、真木潔、水口あをいが分担し行った。浄書は、高橋恒が行った。

8．写真図版では、遺構写真は宮内慎一、真木潔、大西朋子が行い、遺物写真、写真図版作成は担当者と協議のうえ大西朋子が行った。

9．調査報告においては、愛媛大学法文学部下條信行先生、㈶京都府文化博物館定森秀夫先生に御指導・御教示を頂いた。記して感謝申し上げます。

10．編集は、調査担当者が協議の上、梅木謙一、宮内慎一が行った。校正においては、田城武志、水口あをいの協力を得た。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに

1　調査に至る経過 ……〔梅　木〕…… 1

2　調査組織 ……〔梅　木〕…… 2

3　環　境 ……〔宮　内〕…… 3

第Ⅱ章　朝美澤遺跡２次調査

1　調査の経過 ……〔宮　内〕…… 11

2　層　位 ……〔宮　内〕…… 14

3　調査の概要 ……〔宮　内・水　口〕…… 18

4　小　結 ……〔宮　内〕…… 41

第Ⅲ章　辻町遺跡

1　調査の経過 ……〔真　木〕…… 55

2　層　位 ……〔真　木〕…… 58

3　調査の概要 ……〔真　木〕…… 60

4　小　結 ……〔梅　木・真　木〕…… 77

第Ⅳ章　朝美澤遺跡２次調査出土の弥生前期土器 ……〔梅　木・水　口〕… 87

第Ⅴ章　朝美澤(２次)・辻町遺跡調査の成果と課題 ……〔梅　木〕…… 90

挿図目次

第1図　古照地区の地質図 …… 3
第2図　松山平野の主要遺跡分布図（縮尺1／50,000） …… 5
第3図　古照地区の遺跡分布（縮尺1／25,000） …… 7

朝美澤遺跡2次調査

第4図　調査地位置図（縮尺1／5,000） ……11
第5図　調査地測量図（縮尺1／600） ……12
第6図　北壁土層図（縮尺1／40） ……14
第7図　遺構配置図（縮尺1／100） ……15
第8図　調査地区割図（縮尺1／200） ……17
第9図　1号掘立柱建物測量図（縮尺1／80） ……18
第10図　2号掘立柱建物測量図（縮尺1／80） ……19
第11図　3号掘立柱建物測量図（縮尺1／80） ……20
第12図　SK1測量図（縮尺1／30） ……21
第13図　第Ⅱ層出土遺物実測図(1)（縮尺1／3） ……23
第14図　第Ⅱ層出土遺物実測図(2)（縮尺1／3） ……24
第15図　第Ⅱ層出土遺物実測図(3)（縮尺1／3） ……25
第16図　第Ⅱ層出土遺物実測図(4)（縮尺1／4） ……26
第17図　第Ⅲ層出土遺物実測図(1)（縮尺1／4） ……28
第18図　第Ⅲ層出土遺物実測図(2)（縮尺2／3・1／2） ……29
第19図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(1)（縮尺1／3） ……31
第20図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(2)（縮尺1／3） ……32
第21図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(3)（縮尺1／3） ……33
第22図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(4)（縮尺1／3） ……34
第23図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(5)（縮尺1／3） ……35
第24図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(6)（縮尺1／3） ……36
第25図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(7)（縮尺1／3） ……38
第26図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(8)（縮尺1／3） ……39
第27図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(9)（縮尺1／3） ……40

辻町遺跡

第28図　調査地位置図（縮尺1／2,500） ……57
第29図　調査地区割図（縮尺1／400）

第30図　西壁土層図（縮尺１／40）……59
第31図　第Ⅴ層出土遺物実測図（縮尺１／３）……61
第32図　第Ⅶ層遺構配置図（縮尺１／250）……63
第33図　第Ⅶ層出土遺物実測図（縮尺１／３）
第34図　第Ⅷ層上面遺構配置図（縮尺１／250）
第35図　第Ⅷ層中位部遺構配置図（縮尺１／250）
第36図　第Ⅷ層出土土師器実測図（縮尺１／３）……65
第37図　第Ⅷ層出土須恵器実測図(1)（縮尺１／３）……67
第38図　第Ⅷ層出土須恵器実測図(2)（縮尺１／３）……69
第39図　ＳＸ１測量図（縮尺１／30）……71
第40図　ＳＸ１出土土師器実測図（縮尺１／３）……73
第41図　ＳＸ１出土須恵器実測図（縮尺１／３）……75
第42図　ＳＸ１出土臼玉実測図（縮尺１／１）……76
第43図　第Ⅸ層遺構配置図（縮尺１／250）……77
第44図　器種構成と施文分類図（縮尺１／６・１／４）……89

図 版 目 次

巻頭図版１　辻町遺跡ＳＸ１出土遺物
朝美澤遺跡２次調査
図版１　１　調査地遠景（南西より）　２　遺構検出状況①（南より）
図版２　１　遺構検出状況②（西より）　２　北東隅壁土層（南より）
図版３　１　掘立１①（西より）　２　掘立１②（南より）
図版４　１　掘立２（南より）　２　掘立３（南より）
図版５　１　遺物出土状況①（西より）　２　遺物出土状況②（西より）
図版６　１　第Ⅱ層出土遺物①　〔上〕：外面，〔下〕：内面
図版７　１　第Ⅱ層出土遺物②　〔上〕：外面，〔下〕：内面
図版８　１　第Ⅱ層出土遺物③　〔上〕：外面，〔下〕：内面
図版９　１　第Ⅱ層出土遺物④
図版10　１　第Ⅱ層出土遺物（36･38･42･43）、第Ⅲ層出土遺物（44･46･50～52）
図版11　１　第Ⅲ層出土遺物　２　第Ⅲ層出土遺物石製品
図版12　１　第Ⅲ層下層部出土遺物①　〔上〕：外面，〔下〕：内面
図版13　１　第Ⅲ層下層部出土遺物②　〔上〕：外面，〔下〕：内面

図版14　1　第Ⅲ層下層部出土遺物③　〔上〕：外面，〔下〕：内面
図版15　1　第Ⅲ層下層部出土遺物④　〔上〕：外面，〔下〕：内面
図版16　1　第Ⅲ層下層部出土遺物⑤　〔上〕：外面，〔下〕：内面
図版17　1　第Ⅲ層下層部出土遺物⑥　〔上〕：外面，〔下〕：内面
図版18　1　第Ⅲ層下層部出土遺物⑦

辻町遺跡

図版19　1　辻町遺跡遠景（西より）　2　調査区全景（北より）
図版20　1　西壁土層（東より）　2　第Ⅶ層遺構検出状況（北より）
図版21　1　第Ⅶ層遺構検出状況（北より）　2　第Ⅷ層中位部遺構検出状況（北より）
図版22　1　ＳＸ１出土状況（西より）　2　ＳＸ１出土遺物②（北より）
図版23　1　第Ⅴ層出土遺物（西より）　2　第Ⅶ層出土遺物
図版24　1　第Ⅷ層出土遺物①
図版25　1　第Ⅷ層出土遺物②
図版26　1　ＳＸ１出土遺物①
図版27　1　ＳＸ１出土遺物②
図版28　1　ＳＸ１出土遺物③

表　目　次

表１　調査地一覧……1

朝美澤遺跡２次調査

表２　掘立柱建物址一覧……42
表３　土壙一覧
表４　溝一覧
表５　第Ⅱ層出土遺物観察表　土製品……43
表６　第Ⅲ層出土遺物観察表　土製品……45
表７　第Ⅲ層出土遺物観察表　石製品……46
表８　第Ⅲ層下層部出土遺物観察表　土製品……47

辻町遺跡

表９　第Ⅴ層出土遺物観察表　土製品……79
表10　第Ⅶ層出土遺物観察表　土製品……80
表11　第Ⅷ層出土遺物観察表　土製品
表12　ＳＸ１出土遺物観察表　土製品……84
表13　ＳＸ１出土遺物観察表　石製品……85

第Ⅰ章　はじめに

1　調査に至る経過

平成２年５月、松山市朝美２丁目1141－１他と同辻町39－１の宅地開発にあたり、埋蔵文化財の確認願いが開発会社より松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に相次いで提出された。

確認願いが申請された二地点は、いずれも松山市の指定する埋蔵文化財包含地の「34朝美遺物包含地」内に当たり、周知の遺跡として知られている。包含地内では、これまでに弥生時代～古代の集落関連遺構が検出され、同時代の集落の存在が確認されている（辻遺跡・朝美澤遺跡）〔松山市教育委員会　1989〕。また、包含地は古照遺跡と南接しており、松山平野における古墳時代の重要な集落地帯の内に含まれる。

文化教育課では、確認願いが提出された二地点について埋蔵文化財の有無とさらには遺跡の範囲やその性格を確認するために、順次確認調査、試掘調査を実施した。

確認調査の結果を受け、文化教育課と申請者各位は発掘調査についての協議を行った。発掘調査は、特に朝美包含地内の弥生時代～古墳時代の集落構造解明と南接する古照遺跡の関連資料の調査を主目的とし、文化教育課及び松山市埋蔵文化財センターが主体となり、各申請者の協力のもと平成２年３月～同年７月の間に実施した。

以下、各調査の遺跡名、所在等を略記する。

表１　調査地一覧

遺跡名	所在	面積(㎡)	期間
朝美澤遺跡	松山市朝美２丁目1141－１他	1,298	平成２年３月18日～５月31日
辻町遺跡	松山市辻町39－１	654	平成２年４月16日～７月31日

なお、平成２年３月～平成３年９月30日の間は、松山市教育委員会文化教育課が主体となり野外調査及び室内調査を行い、平成３年10月１日以降は財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり室内調査及び刊行事業を実施した。

〔参考文献〕

古照遺跡……昭和48年に第１調査を開始以降、平成４年３月までに８次にわたる調査を実施している。
1974　『古照遺跡』　松山市教育委員会
1976　『古照遺跡Ⅱ』　松山市教育委員会
辻　遺跡……栗田　茂敏　1989　「辻遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
松山市教育委員会
澤　遺跡……松村淳・高尾和長　1989　「澤遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
松山市教育委員会

2　調査組織

〔平成２年度調査組織〕

調査主体／松山市教育委員会　教育長　池田　尚郷
参　事　古本　克
教育次長　井上　量公
教育次長　一色　正士
調査総括／松山市教育委員会　文化教育課　課長　渡部　忠平
松山市立埋蔵文化財センター　所長　森脇　将
調査係長　西尾　幸則
調査主任　田城　武志
調査主事　栗田　正芳

〔平成３年度調査組織〕（平成３年４月１日～同年９月30日）

調査主体／松山市教育委員会　教育長　池田　尚郷
参　事　古本　克（～５月19日）
参　事　池田　秀雄（５月20日～）
教育次長　西森　寛彦
教育次長　一色　正士（～５月19日）
教育次長　渡部　泰輔（５月20日～）
教育次長　日野　正寛（５月20日～）
調査総括／松山市教育委員会　文化教育課　課長　渡部　忠平（～５月19日）
課長　岩本　一夫（５月20日～）
松山市立埋蔵文化財センター　所長　和田祐三郎
次長　田所　延行
調査係長　西尾　幸則
調査主任　田城　武志
調査主事　栗田　正芳

〔平成４年度刊行組織〕

刊行主体／財団法人松山市生涯学習振興財団　理事長　田中　誠一
事務局長　渡辺　和彦
事務次長　鶴井　茂忠
埋蔵文化財センター　所長　和田祐三郎
次長　田所　延行
調査係長　西尾　幸則
調査主任　田城　武志
調査主事　栗田　正芳（文化教育課職員）

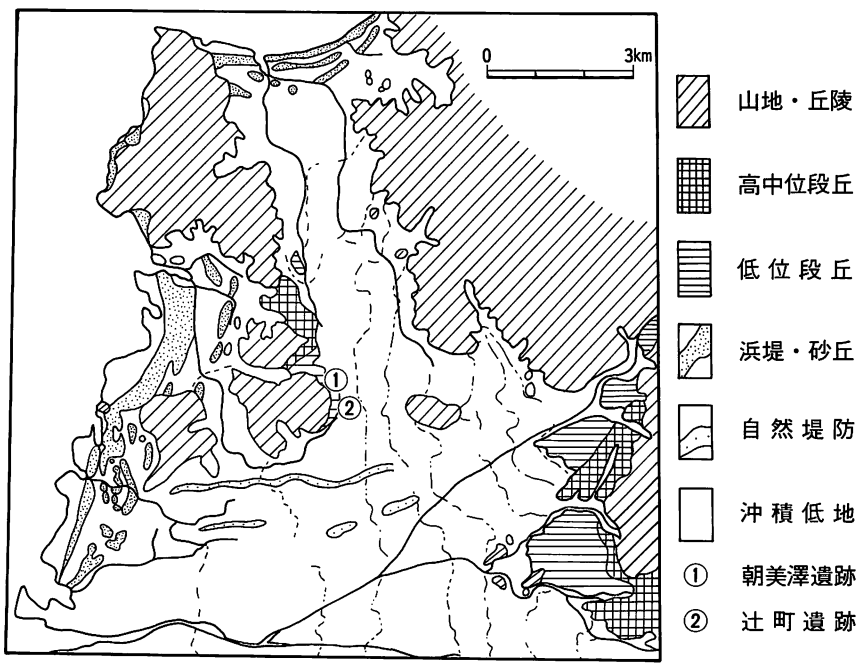
3　環　境

(1)　遺跡の立地

松山平野は、伊予灘と燧灘とを二分するように北に突き出た高縄半島のつけね部分にあたる。高縄半島の中央部には半島の最高峰、東三方ケ森をはじめとして、伊之子山、北三方ヶ森、高縄山からなる高縄山地が形成されている。この高縄山に源を発した河川が伊予灘に流れ出て形成した沖積平野が松山平野である。

古照地区は、この松山平野の西端、勝山（城山）と大峰ケ台・岩子山・弁天山といった独立丘陵とに挟まれた丘陵・平野部に立地する。

松山平野を流れる河川のうち、平野を東から西へ向かって流れる重信川と、北東から平野を斜めに横切って流れ込む石手川は、松山市の南端で合流し、伊予灘へ注いでいる。古照地区に関係の深い石手川は、高縄山にその水源を発し、湯山渓谷を経て岩堰で分岐した後、道後城北地区を流れて大宝寺川となり、朝美に達する。その後、宮前川となって大峰ヶ台丘陵の南麓を迂回し、さらに分岐して北・西の２条の流れとなって三津湾に注いでいる。これら、ふたつの河川は山地の浸触開析や、平野での土砂礫の堆積が急激なため、流域面積が非常に広く、その結果、扇状地を形成し海岸平野に粗粒の堆積物がもたらされることになる。これが現在の古照地区の土壌基盤となっている。



第１図　古照地区の地質図

(2) 歴史的環境（第3図）

古照地区は、古墳期の大規模な灌漑施設として有名な古照遺跡〔松山市 1974〕をはじめとして縄文時代から中世に至るまで多くの遺跡が立地している。古墳遺跡周辺においては、市道「千舟－高岡線」建設工事に伴いこれまでに5度にわたる発掘調査が行われているほか、大峰ヶ台丘陵では松山総合公園整備に伴い発掘調査・確認調査が継続的に行われている。それらのうち、近年発掘調査された遺跡を中心に時代別に述べていくことにする。

縄文時代

古照地区において、これまでに明確な縄文時代の遺構は検出されていない。わずかに、古照遺跡の調査で縄文後・晩期の遺物が堰を埋めた砂礫層から他の時代の遺物と共に数点出土している程度である。

弥生時代

弥生時代には、丘陵部・平野部を問わず遺跡の分布が広く認められる。弥生前期では、弁天山低丘陵の斉院烏山遺跡（1）〔松山市 1986〕より、前期末段階の濠を検出しており、甕形土器・壺形土器・蓋形土器などの出土がある。また、同丘陵中央東麓、宮前川左岸の後背湿地に立地する宮前川遺跡別府地区（2）〔西尾幸則 1986〕では、前期末から中期初頭の遺物が包含層中より多数出土している。

中期では、大峰ヶ台丘陵山頂部の大峰ヶ台遺跡（3）〔栗田茂敏 1989〕において、中期中葉段階の竪穴式住居址を含む集落関連遺構と遺物が検出されているほか、同丘陵東裾部、澤遺跡（4）〔松村淳 1989〕や辻遺跡（5）〔栗田茂敏 1989〕では、包含層中より中期中葉の遺物の出土が多数みられる。

後期になると、遺跡の分布がさらに広範囲にその広がりを見せている。前述の澤遺跡では壺棺墓3基が確認されているほか、津田烏越遺跡（津田中学校構内）1次調査（6）〔松山市 1986〕では、土錘9個を伴った火災住居址のほか数棟の住居址群が検出されており、各住居址からは、土錘・石錘などの魚撈具をはじめ、甕形土器・壺形土器・鉢形土器・支脚形土器などがセットになって出土している。また同2次調査〔西尾幸則 1975〕では大量の遺物が土器溜りより出土し、辻遺跡からは、後期の土器群が投棄された状況で集中出土している。他に大峰ヶ台丘陵東麓、朝美遺跡（7）〔松山市 1986〕においては、高床式倉庫に使用したと考えられる「ねずみ返し」や舟形状の盆（ヒノキ材）などの木製品が、後期後半の土器とともに出土している。

弥生時代の遺物として、松山平野で特徴的なものに分銅形土製品がある。愛媛県内で39点の出土があり、そのうち、古照地区出土のものは2点ある。大峰ヶ台遺跡および宮前川遺跡別府地区のもので、ともに包含層中からの出土である。

第２図　周辺の遺跡分布図

古墳時代

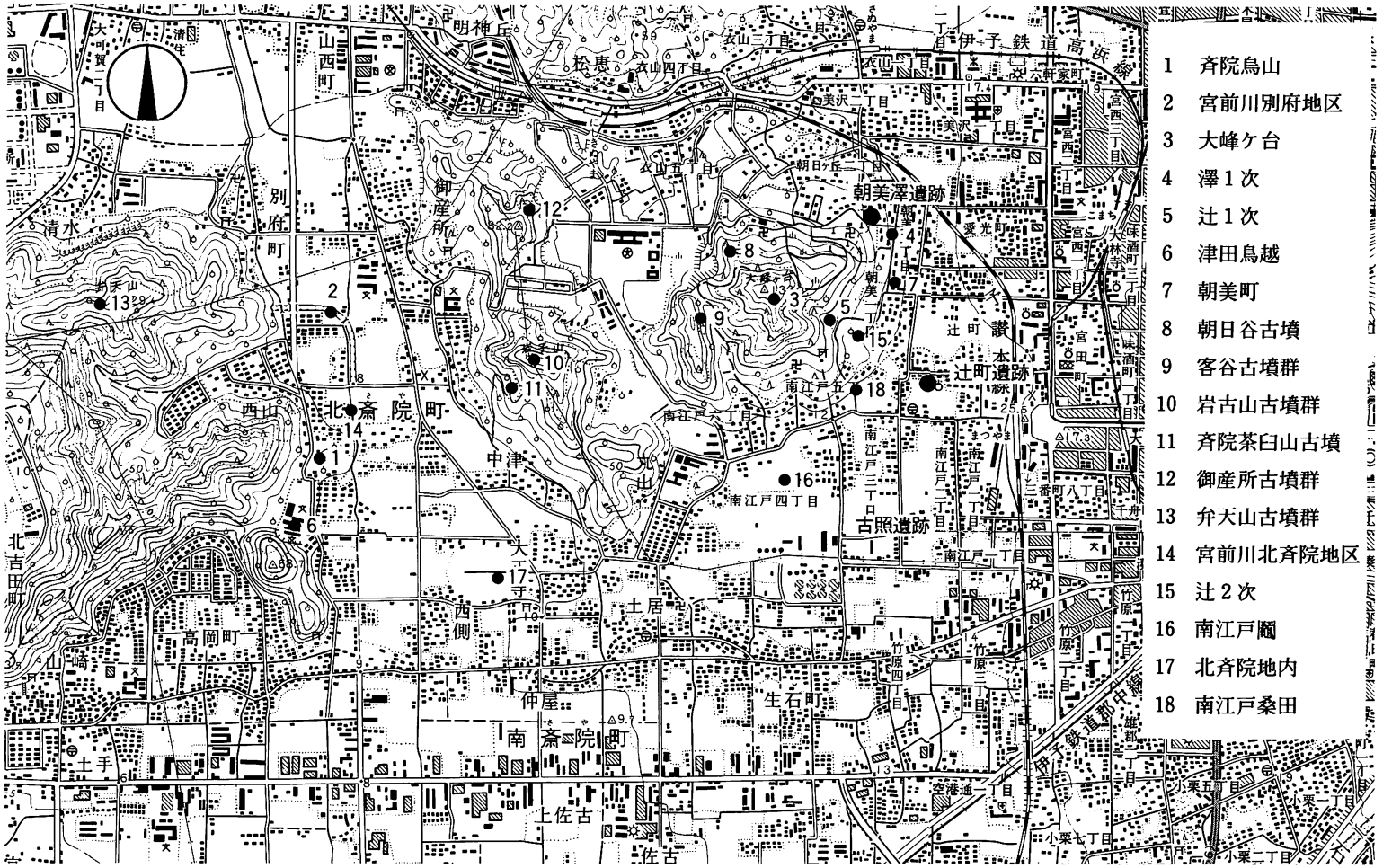
古墳時代になると、大峰ヶ台、岩子山、弁天山など各丘陵部に多数の古墳が確認されている。平野部においても古照遺跡をはじめとして、数多くの遺跡が検出されている。

古墳では、大峰ヶ台丘陵北西斜面に朝日谷古墳（8）があり、2号A主体部内より、2面の舶載鏡と40本を越える銅鏃・鉄鏃のほか、直刀・ガラス玉・朱などが出土している。また、同丘陵南西部にて、古墳後期の群集墳である客谷古墳群（9）〔栗田茂敏 1989〕が確認されている。他に、大峰ヶ台丘陵から西に派生する岩子山丘陵においては、頂上尾根部に岩子山古墳群（10）〔名本二六雄 1975〕があり、中期末から後期段階の須恵器とあわせて素環頭太刀や、円筒埴輪、人物・動物埴輪が出土している。また、同丘陵南西麓の斉院茶臼山古墳（11）〔西尾幸則 1983〕では、5世紀後半段階の須恵器に伴って、円筒埴輪や朝顔型埴輪などの出土があり、御産所古墳群（12）〔森光晴 1976〕11号墳からは人骨7体の重葬が確認されている。他に、岩子山丘陵に対岸する弁天山丘陵には、弁天山古墳群（13）〔松山市 1986〕があり、古墳前期から中期段階の古墳の築造がみられる。その他、注目すべきものとしては、伝岩子山出土とされているものに、五鈴鏡・乳文鏡などがある。

平野部においては、古墳時代前期の大規模な灌漑施設として名を馳せた古照遺跡がある。同2次調査では、堰と取水口が検出され、堰を埋める砂礫層の中から、古墳前・中期の遺物を中心にその出土がみられる。他に、宮前川遺跡北斉院地区（14）〔松山市 1986〕では古墳前期の消失住居のほか、自然堤防状遺構や堰提状遺構などが検出されている。出土遺物のうち、特殊なものとしては、鶏をかたどった注口土器や乳房をもった犬・鹿・馬などの動物型土製品がある。他に、甑形土器・鼓形土器などの山陰系土器や畿内系土器など、当時の交流・交易の一端をうかがわせる土器類の出土もみられる。そのほか、大峰ヶ台丘陵東麓辻遺跡2次調査（15）〔栗田正芳 1991〕では古墳期の掘立柱建物址が検出されている。

中　世

中世の遺跡は比較的多く、古照遺跡及び同2～5次調査では包含層中より多数の中世土器の出土がある。澤遺跡では平安時代の掘立柱建物跡が検出され、古照遺跡の北、南江戸鬮目遺跡（16）〔上田真 1991〕からは、平安時代から鎌倉時代の集落関連遺構と大量の土師器類が出土している。また、北斉院地内遺跡（17）〔宮崎泰好 1989〕では、室町時代から江戸時代にかけての掘立柱建物址や土壙墓を、南江戸桑田遺跡（18）〔重松佳久 1989〕では江戸時代の桶棺墓が多数検出されている。



第３図　古照地区の遺跡分布図　縮尺 1／25,000

〔参考文献〕

松山市　1974「古照遺跡」『松山市文化財調査報告書Ⅳ』
松山市　1986『松山市史料集第2巻　考古編Ⅱ』
西尾幸則　1986「宮前川遺跡調査報告書」『松山市文化財調査報告書18』
栗田茂敏　1989「大峰ヶ台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
松村　淳　1989「澤遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
西尾幸則　1975「津田鳥越遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』
栗田茂敏　1989「客谷古墳群」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
名本二六雄　1975「岩子山古墳」『松山市文化財調査報告書Ⅷ』
西尾幸則　1983「斉院茶臼山古墳」『松山市文化財調査報告書16』
森　光晴　1976「御産所11号墳」『松山市文化財調査報告書9』
栗田正芳　1991「辻遺跡2次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』
上田　真　1991「南江戸飜目遺跡」『松山市文化財調査報告書22』
宮崎泰好　1989「北斉院地内遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
愛媛県　1986『愛媛県史資料編考古』
重松佳久　1989「南江戸桑田遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』

第Ⅱ章

朝美澤（アサミサオ）遺跡

―2次調査―

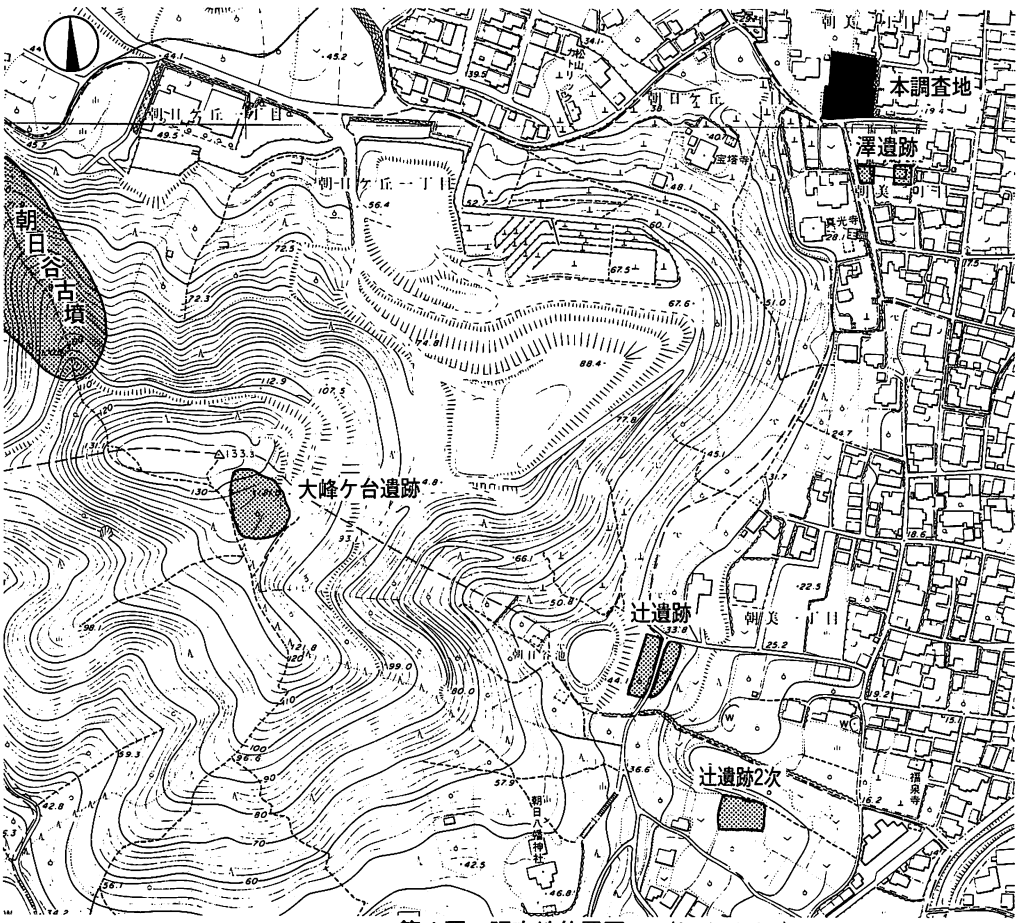
第Ⅱ章　朝美澤遺跡２次調査

1　調査の経過

(1)　調査に至る経緯

1990（平成２）年５月22日、株式会社　県都住宅より、松山市朝美２丁目1141－１地他内における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課・松山市立埋蔵文化財センター（以下、市教委・埋文センター）に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『34朝美遺物包含地』内にあたり、周知の遺跡として知られている。同包含地内ではこれまでに、弥生時代後期の壺棺墓や掘立柱建物址を検出している澤遺跡〔松村淳　1899〕や、弥生時代後期後葉の遺物が出土している辻遺跡〔栗田茂敏　1899〕などがある。周辺地域においては、松山市総合公園建設に伴い数多くの調査が行われている。

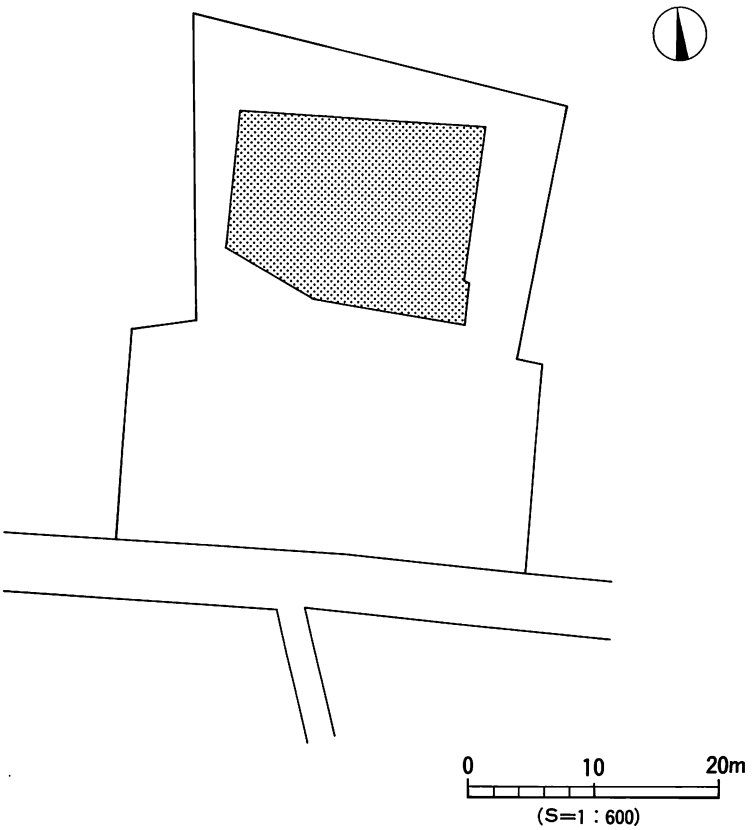


第４図　調査地位置図　(S=1：5,000)

これらのことから、市教委・埋文センターは、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するために、1990（平成２）年８月17日に試掘調査を実施した。試掘の結果、柱穴５基と遺物包含層２層を確認した。この結果を受け、市教委・埋文センターと県都住宅の両者は遺跡の取扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は当地域の弥生時代～中世における集落構造解明を主目的とし、埋文センターが主体となり、県都住宅の協力のもと1991（平成３）年３月18日に調査を開始した。

(2) 調査の経緯

1991（平成３）年３月13日より重機により表土剝ぎ取り作業を開始した。調査地は以前、宅地であったためコンクリート基礎や配管跡などがあり、それらの除去等を行ったため、掘削に４日間を費した。



第５図　調査地測量図

3月18日より作業員を増員し本格的な発掘調査を開始した。初めに調査区内に東西・南北に各1本ずつのベルトを設定した。その後、試掘結果及び深掘りによる土層確認の結果、3層の遺物包含層を確認した。そのうえで、各層ごとに掘り下げをし、遺構検出を行った。

4月16日、第Ⅴ層上面にて遺構検出を行い、4月25日、完掘状況の写真撮影をする。

4月27日～4月30日、出土遺物・調査用具等を撤去する（野外調査終了）。

5月1日～5月31日、松山市立埋蔵文化財センターにて整理作業を行う。

(3) 調査組織

調 査 地　松山市朝美2丁目1141－1、同1145、1145－2、1146、1147、1148、1149

遺 跡 名　朝美澤遺跡2次調査

調査期間　野外調査　1991（平成3）年3月18日～4月30日

室内整理　1991（平成3）年5月1日～5月31日

調査面積　1,330.95㎡

調査委託　県都住宅株式会社　代表取締役　兵頭作一

調査担当　梅木謙一　　宮内慎一

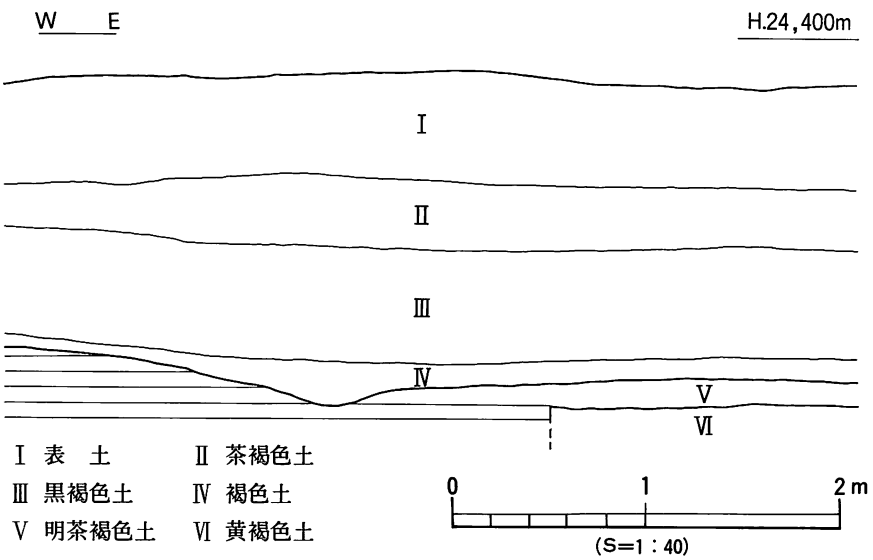
作 業 員　高橋　恒、亀山　健一、志賀　夏行、原田　英則、池ノ上　昇、大久保英昭、中島　宏、西原　聖二、富山　寛之、相原　宏淳、政本　和人、浅海　誠、渡辺　秀一、兼久　一郎、川井　正、是沢　嘉昭、田中　茂樹、波多野禎彦、藤家　厚美、松本　正義、三江　元則、稲葉　靖司、岡宮　慶也、白石　憲征、仙波享一郎、中矢　正明、浜本　司、町田　仁司、山本　武敏、渡辺　誠興、水口あをい、大西　朋子、岡根なおみ、白玉　典子、新出寿美子、関　正子、萩野ちよみ、矢野　久子、吉井　信枝、森田　利恵、松本美知子、黒田　令子、多知川富美子

2　層　位（第６図、図版２－２）

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層茶褐色土、第Ⅲ層黒褐色土、第Ⅳ層褐色土、第Ⅴ層明茶褐色土、第Ⅵ層黄褐色土である。

第Ⅰ層は近現代の造成工事による客土で、地表下60～80cmまで開発が行なわれている。調査区西半では、開発による削平等のため、第Ⅰ層はなく、Ⅱ層以下の層が既に現われている。第Ⅱ層は調査区西端部を除く全域でみられ、北西から南東に向けて緩傾斜をなす。北半部は厚さ20cm程度であるが、南に行くにつれ、厚さを増し、南東隅では約60cmの堆積である。第Ⅱ層中より土師器・須恵器等が出土している。第Ⅲ層は、調査区南西部には見られず、第Ⅳ層上に第Ⅱ層が堆積している。第Ⅱ層と同様、北西から南東に向けて傾斜堆積をなし、北西部で厚さ50cm、南東部で厚さ80cmを測る。遺物は弥生土器・土師器・須恵器他が出土している。第Ⅳ層は、調査区東半部のみにみられ、厚さ10～20cmの堆積で、弥生土器片が数点出土している。第Ⅴ・Ⅵ層は無遺物層である。第Ⅵ層については、表土剝ぎ取り段階で、調査区南西部において既に露出していたところがある。

遺構は主に第Ⅲ層及び第Ⅴ・Ⅵ層上面での検出である（第７図）。第Ⅲ層中より掘立柱建物址１棟、第Ⅴ層上面では土壙１基、柱穴35基、第Ⅵ層上面では、掘立柱建物址２棟、溝状遺構３条、柱穴51基（掘立柱建物柱穴を含む）他である。ただし、第Ⅵ層上面検出の掘立柱建物址については、土層観察により、本来は第Ⅱ層中から掘り込まれたものである。



第６図　北壁土層図

SD3
掘立 1
試掘トレンチ
掘立 2
SD2
SD1
攪 乱
掘立 3
SK1
攪 乱
23,500m
22,500m
0
5
10m
(S＝1 : 100)

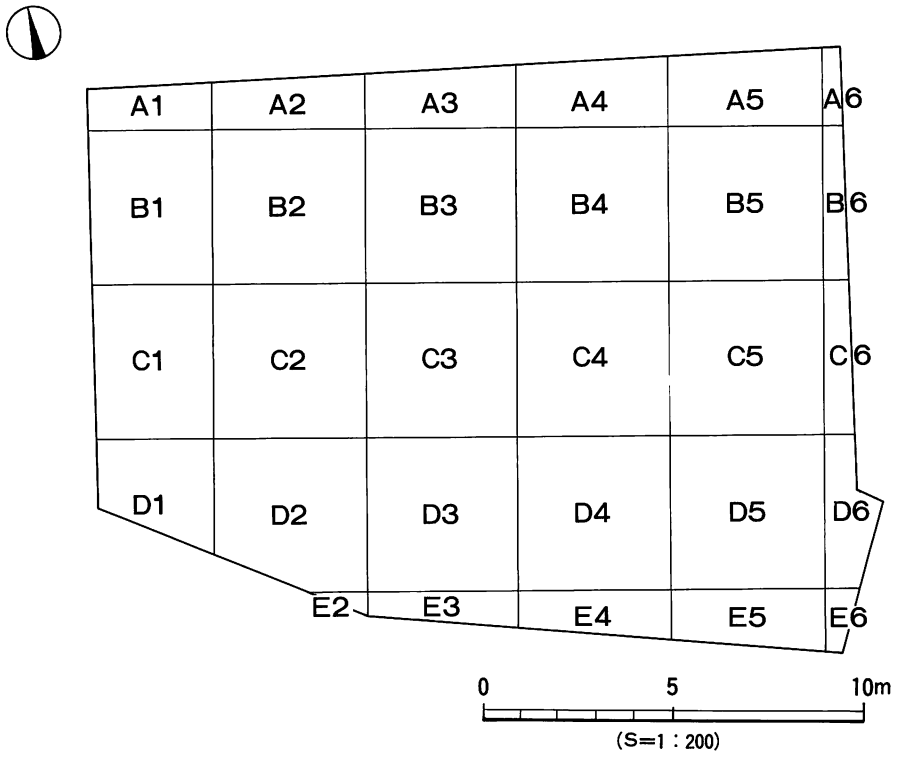
第 7 図　　遺 構 配 置 図

遺物は遺構及び包含層からの出土であり、特に第Ⅲ層下層部からは、弥生時代前期の土器が多量に出土している。土製品としては、第Ⅲ層中より紡錘車が１点出土しており、石製品は、石斧等が出土している。

これらのことから、各層は出土遺物、検出遺構から判断すると、第Ⅱ層は中世以後、第Ⅲ層は古墳時代～古代、第Ⅳ層は弥生時代～古墳時代までに堆積したものと判断される。

第Ⅴ層上面の標高を測量すると、調査区西から東に向けて傾斜をなしており、その比高差は最大で約150cmを測る。

なお、調査にあたり調査区内を４ｍ四方のグリットに分けた。４ｍグリットは、北から南へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ、西から東へ１・２・３・４・５・６として、Ａ１・Ａ２…Ｅ６といったグリット名を符した（第８図）。



第８図　調査地区割図

3　調査の概要（遺構と遺物）

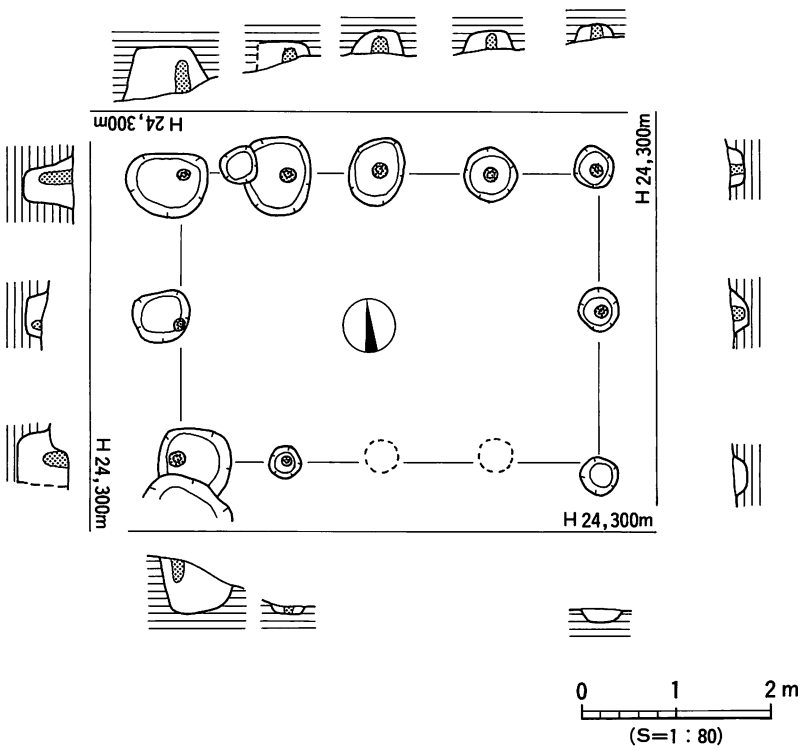
今回の調査において確認した遺構は、掘立柱建物址３棟、土壙１基、溝状遺構３条、柱穴91基（掘立柱建物址柱穴24基を含む）他である。

(1)　古代～中世

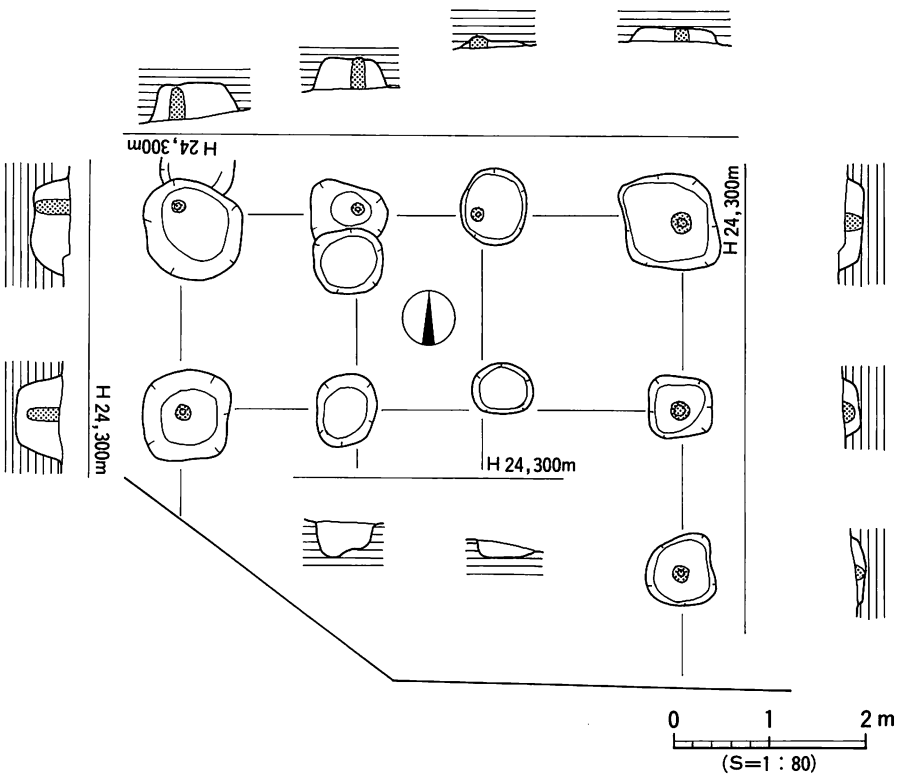
古代～中世の遺構は掘立柱建物址３棟を検出した。第Ⅲ層及び第Ⅵ層上面での検出であるが、第Ⅵ層上面検出のものは本来は第Ⅱ層中から掘り込まれたものである。

１号掘立柱建物址（第９図、図版３）

調査区中央部西寄りＣ２～Ｃ３区に位置する。第Ⅵ層上面での検出である。南側は試掘トレンチによる削平のため未検出であるが、２×４間の建物址と考える。梁行長3.0ｍ、桁行長4.4ｍを測る東西棟で、ほぼ東西に主軸をとる。平均柱間は、東西１ｍ、南北1.5ｍである。各柱穴は円または楕円形を呈し、径40～90㎝を測る。深さについては、検出面が西から東に向けて傾斜をなしているため、西隅で60㎝、東隅で20㎝である。柱痕径は18～20㎝であり、深さ15～40㎝を測る。柱穴埋土は第Ⅱ層と同様の茶褐色土である。柱穴内からは須恵器・土師器小片が数点出土している。



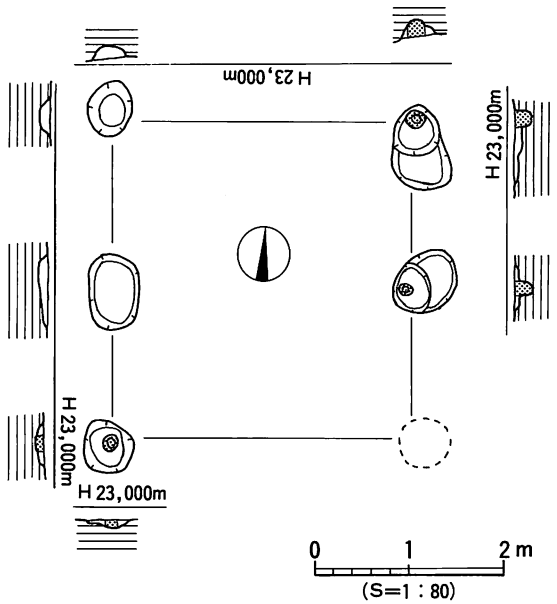
第９図　１号掘立柱建物測量図



第10図　2号掘立柱建物測量図

2号掘立柱建物址（第10図、図版4－1）

調査区南西D2～D3区に位置する。第Ⅵ層上面での検出であるが、土層観察により、本来は第Ⅱ層中から掘り込まれたものである。南隅は調査区外のため未検出であるが、3×2間以上の総柱建物址と考えられる。梁行長3.6m、桁行長5.4mを測る東西棟で、主軸は1号掘立柱建物址に較べてやや南に偏している。平均柱間は東西1.6m、南北1.8mである。柱痕径は15～20cmであり深さ40cm前後である。柱穴埋土は1号掘立柱建物址に較べやや砂質を帯びた茶褐色土である。一部、1号掘立柱建物址と柱穴が重複しており2号建物址が1号建物址に先行する。柱穴内から弥生土器・土師器・須恵器が出土している。



第11図　３号掘立柱建物測量図

３号掘立柱建物址（第11図、図版４－２）

調査区南東Ｃ４～Ｄ５区に位置する。南東隅は攪乱により削平されているが、１×２間の建物址と考えられ、ほぼ磁北に等しい主軸方位をとる。第Ⅲ層上面での検出であり、梁行長3.4ｍ、桁行長3.5ｍを測る南北棟である。各柱穴は円または楕円形を呈し、径50～80㎝、深さ10～20㎝を測る。ただし、柱穴の深さなどから判断すると、第Ⅱ層以上の層から掘り込まれた可能性が高い。柱穴埋土は第Ⅱ層と同様の茶褐色土である。柱穴内からは須恵器・土師器の小片が僅かに出土している。

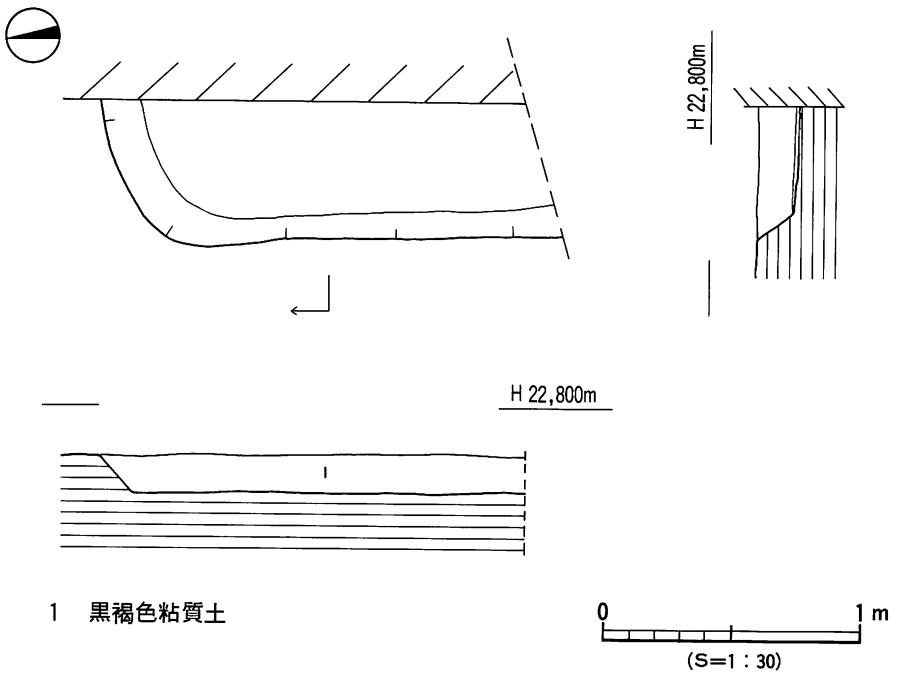
以上の掘立柱建物址については、柱穴内からの遺物が僅かであり詳細な年代付けは難しいが、層位関係等から、古代～中世段階の建物址と考える。

(2)　古墳時代

古墳時代の遺構は溝状遺構３条を確認した。すべて第Ⅵ層上面での検出である。

ＳＤ１　　調査区南側Ｄ２～Ｄ３区に位置する。東隅は２号掘立柱建物柱穴に切られ、西隅は消失している。断面「Ｕ」字状で、規模は幅0.3ｍ、検出長5.0ｍを測る。北西から南東に向けて傾斜をなし、深さは北西隅で５㎝、南東隅で17㎝である。溝底は平坦で、埋土は褐色土一層であり、第Ⅲ層が覆う。遺物は須恵器片が少量出土している。

ＳＤ２　　調査区南西Ｄ２区に位置する。北側で、東に曲がり、２号掘立柱建物柱穴に切られており、南側は調査区外へ続く。断面「Ｕ」字状で、規模は幅0.3ｍ、検出長2.8ｍ、深さ12㎝を測る。北東から南西に向けて緩傾斜をなしている（比高差約３㎝）。溝底は凹凸がみられ、



第12図　ＳＫＩ測量図

平坦ではない。埋土は茶褐色土一層であり、第Ⅱ層が覆う。遺物は土師器・須恵器片が出土している。

ＳＤ３　　調査区中央やや西寄りＣ３～Ｄ３区に位置する。溝中央部は試掘トレンチにより削平され、なおかつ２号掘立柱建物柱穴に切られており、北隅は消失している。断面「Ｖ」字状で、規模は幅0.3m、検出長8.2m、深さ10cmを測る。北から南に向けて緩傾斜をなし、比高差は約５cmである。溝底は比較的平坦で、埋土は茶褐色土一層である。溝北半部では第Ⅱ層が覆い、南半部では第Ⅲ層が覆う。遺物は土師器高坏片が出土している。

以上の溝状遺構については、検出面の層位関係や出土遺物から古墳時代の遺構と考えられる。

(3)　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は土壙ＳＫ１があげられる（第12図）。調査区南東隅Ｄ５区に位置する。第Ⅴ層上面での検出であり、第Ⅳ層が覆う。南半部は攪乱により削平され、東半部は調査区外に続く。平面形は不整楕円形を呈すると考えられ、規模は南北1.6m、東西検出長0.7m、深さ12cmを測る。断面逆台形状で、床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土一層である。遺物は弥生土器片が数点出土している。

(4)　その他の遺構と遺物

本調査において確認された柱穴は91基である。第Ⅲ層及び第Ⅴ・Ⅵ層上面での検出である。第Ⅲ層上面検出の柱穴埋土は茶褐色土であり、第Ⅴ・Ⅵ層上面検出のそれは茶褐色土、褐色土、

黒褐色土に分けられる。少なからず三時期に区別されるものと考えられるが、出土遺物が僅かであるため、詳細な年代は判断しがたい。

第Ⅱ層出土遺物（第13～16、図版6～10）

〔須恵器〕

坏蓋（第13図1～10）　1～3は身受けのかえりを有する坏蓋。1は口径12㎝を測る大型品で、かえりは口縁端部より下方へ下がる。2・3は口径9～10㎝前後のもので、笠形の天井部をもつ。かえりは口縁端部よりは下がらない。4は擬宝珠様つまみの付く坏蓋、5～10は身受けのかえりを有さない坏蓋である。天井部の形態は、まるく笠形を呈するもの（5～8）と、ほぼ平坦なもの（9・10）とがあり、天井部と口縁部の境界が段をなすものは10のみである。口縁部は下方へ屈曲するものがほとんどであり、5のみ、やや下内方へ屈曲する。口縁端部はすべて丸く仕上げられている。天井部外面には、回転ヘラ削り調整を行ったのち、回転ナデ調整を施す。

坏身（第13図11～18・第14図19～24）　11～18は高台の付く坏身。底部と体部の境界は丸みをもつものがほとんどで、13のみ、わずかに稜をもつ。高台は底部と体部の境界から内側に入ったところに付き、内端面で接地するもの（11～15）、平坦に接地するもの（16～18）とがある。底部は回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整を施すもの（15）、回転ナデ調整のみを施すもの（11・12・14・16～18）、不整方向のナデ調整を施すもの（13）がある。11は斜め上方にたちあがる体部をもち、口縁部は外反する。高台は「ハ」の字状に付き、高台端部には、沈線状の凹みが認められる。19～24は内傾するたちあがりをもつ坏身。口径は19・20が12～13㎝、21～24は9～10㎝前後である。たちあがり端部は尖り気味なものと丸いもの（34）とがあり、受部は上外方にのび、受部端部が丸くつまみ上げているもの（22～24）がある。23は平底風の底部をもち、底部外面に回転ヘラ切り痕が残る。底部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整を施す。

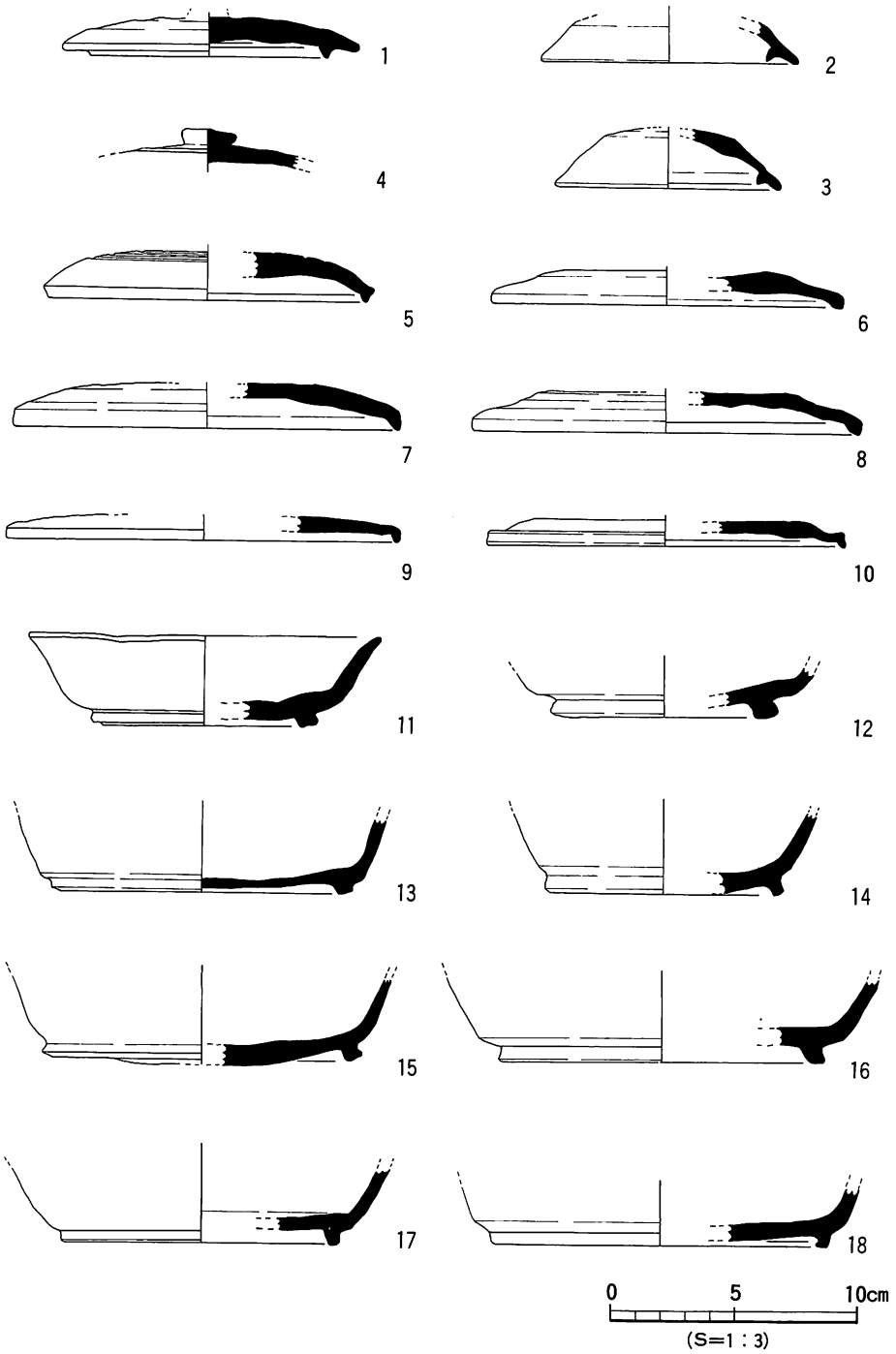
1～10の坏蓋、11～18の坏身は7世紀～8世紀中頃、19～24の坏身は6世紀後半～7世紀前半頃のものと思われる。

高坏（第14図25～28）　25・26は無蓋高坏の坏部。やや内湾気味に立ち上がる体部をもち、中央付近に稜をもつ。25は口縁部がやや外反し端部は丸く仕上げられている。内外面ともに回転ナデ調整を施す。27・28は高坏脚部。27は「ハ」の字状に開く脚部に透かしがみられる。28は比較的細い脚基部をもち、脚中位付近に2条の沈線が巡る。内外面ともに回転ナデ調整を施す。

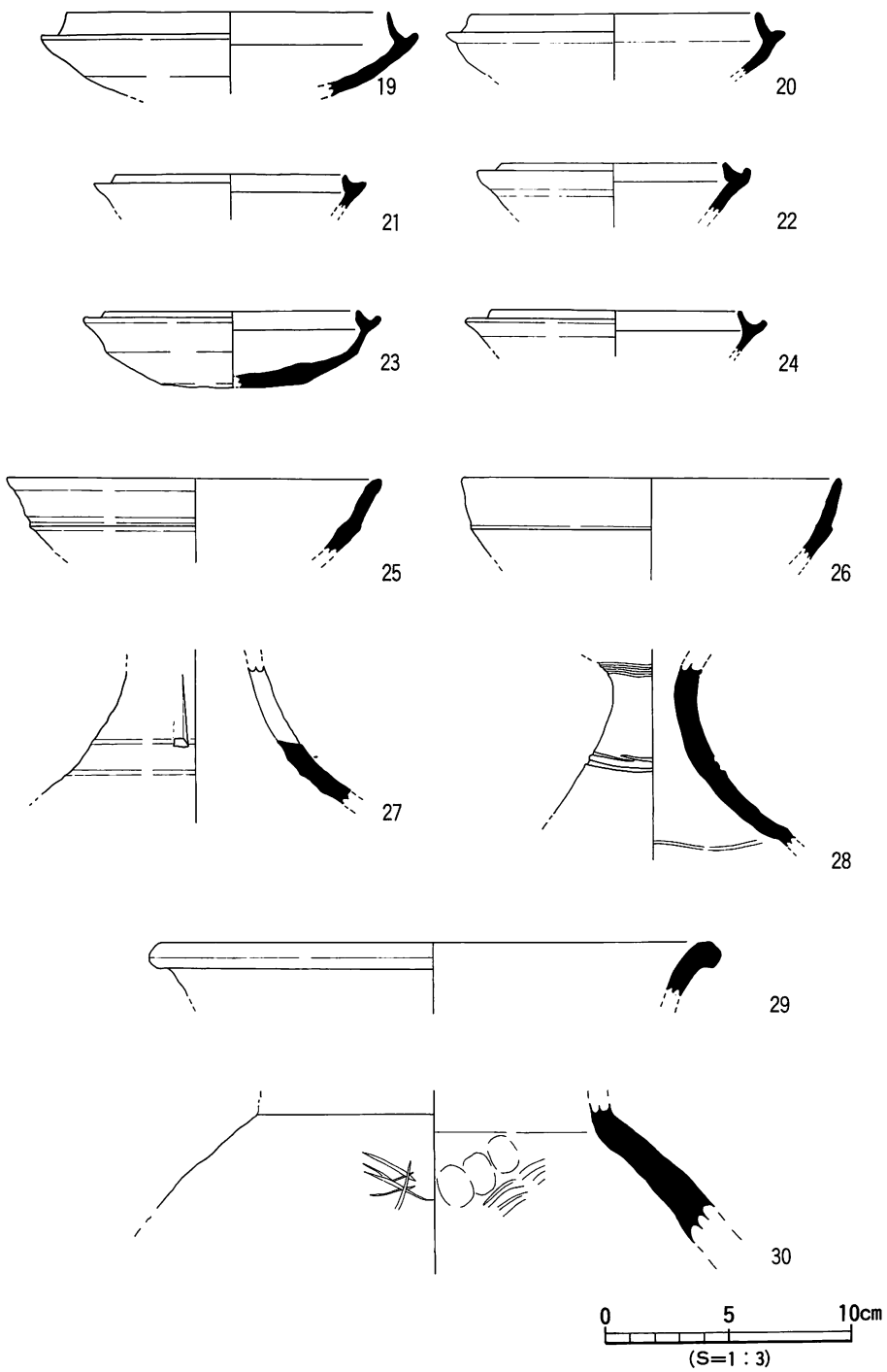
これら高坏は、25・27は6世紀後半、26・28は7世紀前半代に比定されよう。

甕（第14図29・30）　29は口径25㎝を測るやや大型の甕である。口縁端部は下外方へ肥厚し端部は丸く仕上げられている。30は甕の肩部片。内面には円弧叩きを施す。外面はナデ調整を施し、頸部にヘラ記号が認められる。

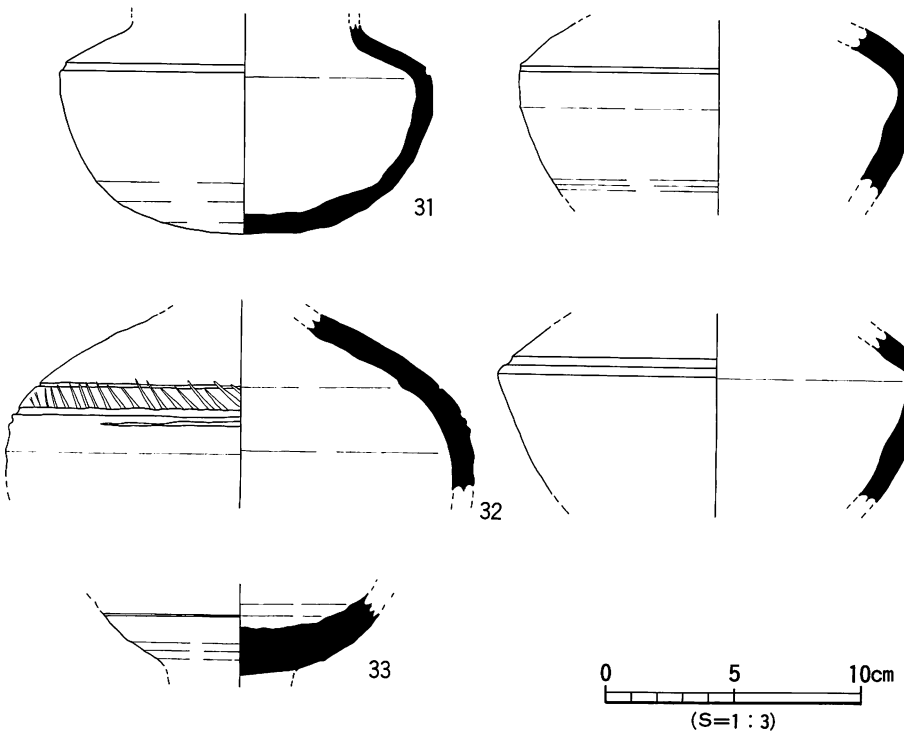
壺（第15図31～35）



第13図　第Ⅱ層出土遺物実測図(1)



第14図　第Ⅱ層出土遺物実測図(2)



第15図　第Ⅱ層出土遺物実測図(3)

短頸壺（31）　口縁部は欠損している。扁球形の体部から鋭く屈曲する肩部には1条の凹線が巡る。体部下半部には回転ヘラ削り調整が施され、その他は内外面ともに回転ナデ調整を施す。

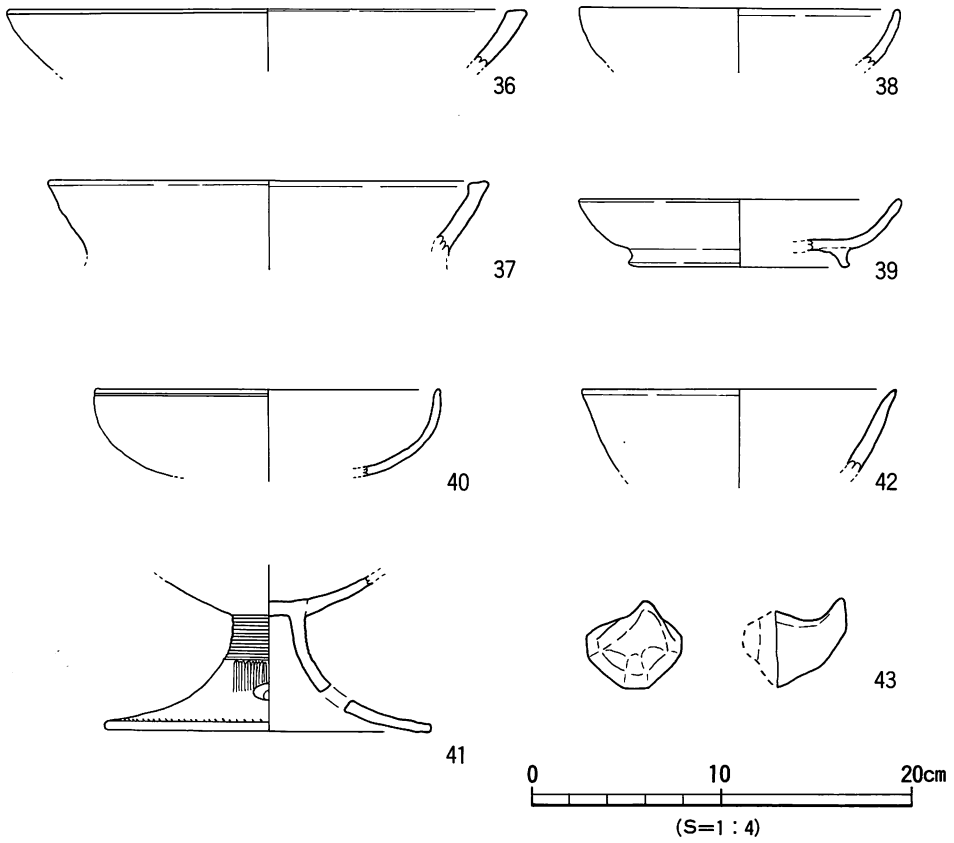
長頸壺（32～35）　32は体部から鈍く屈曲する肩部に2条の凹線が巡り、凹線間に左上がりの列点文を施す。33は台付き長頸壺と思われ、底部に台部貼り付けによる接合痕が認められる。34は半球形の体部から稜をもって屈曲する肩部には1条の凹線が巡る。外面体部下半には回転ヘラ削り調整を施す。その他は内外面ともに回転ナデ調整を施す。35は半球形の体部から稜をもって屈曲し、肩部は「ハ」の字状に強く内傾する。屈曲部には段状の凹線が1条巡る。内外面ともに回転ナデ調整を施す。

これらの壺については、31・32は6世紀後半に、33～35は7世紀代に比定されよう。

〔土師器〕（第16図36～43）

甕形土器（36・37）　口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は内傾する不明瞭な段をなす。37は、わずかに内端部が肥厚する。

椀形土器（38）　やや内湾気味に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は丸く仕上げる。端部内面に不明瞭な稜をなす。内外面ともに丁寧なヨコナデを施す。



第16図　第Ⅱ層出土遺物実測図(4)

有台坏（39）　高台の付く坏。外上方にやや内湾しつつのびる口縁部をもち、端部は丸い。高台は「ハ」の字状に付き、平坦面で接地する。

高坏（40～42）　40は高坏の坏部で内湾気味に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部はわずかながら面取り調整がみられる。口縁部外面に１条の沈線が巡る。内外面共にミガキ調整を施す。41は直立気味な柱部と、大きくラッパ状に開く裾部とからなる。柱部には14条の沈線が巡り、裾部中位には、３方向の円孔を穿ち、裾端部外面には半截竹管文が巡る。外面は縦方向のミガキを施す。40・41は出土状況から同一個体と考えている。42は内湾気味に立ち上がる口縁部をもち、端部付近でわずかに外反する。端部は尖り気味に丸い。内外面ともにヨコナデを施す。

甑（43）　甑の把手と思われる。

これらの土師器は５～６世紀代のものと考えられる。

第Ⅲ層出土遺物（第17・18図、図版10・11）

甕形土器（44～46）　44・45は口縁が断面逆「L」字状の甕形土器。いずれも、口縁部内面がわずかに突出している。口縁端部は44が、やや丸みを帯びた面をなすのに対し、45は丸く収めている。内面は、いずれも横方向のヘラミガキを施す。46は口縁が「く」字状の甕形土器。口縁端部は丸い。内外面ともにヨコナデを施す。44・45は弥生中期中葉、46は後期のものであろう。

壺形土器（47～52）　47は壺の頸部に凸帯を貼り付け、その上下に各1条の沈線を施す。凸帯上に刷毛状工具による刻目がみられる。48・49は広口壺である。48は口縁部が直線的に大きく外方に開き、内面には円形浮文（径2㎝）を貼付している。口縁部は下方に肥厚し、端面は外傾する。49は口縁部が上下に肥厚し、口縁端面は、わずかに内傾する凹面を呈している。口縁内部に粘土紐の貼付を施す。50は複合口縁壺。口縁の接合部は「く」字状を呈し口縁拡張部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げる。口縁拡張部外面に波状文を施す。51・52は凹線文壺である。51は口縁端部が下方に肥厚し、2条の凹線が巡る。頸部外面には縦方向、内面は横方向の刷毛目調整を施す。52は口縁端部が上下方に肥厚し、6条の凹線が巡る。内外面共に刷毛目調整の後、ナデ調整を施す。以上の壺形土器については、47・50が弥生後期後半、51・52が中期末～後期初頭、48・49が中期中葉段階のものであろう。

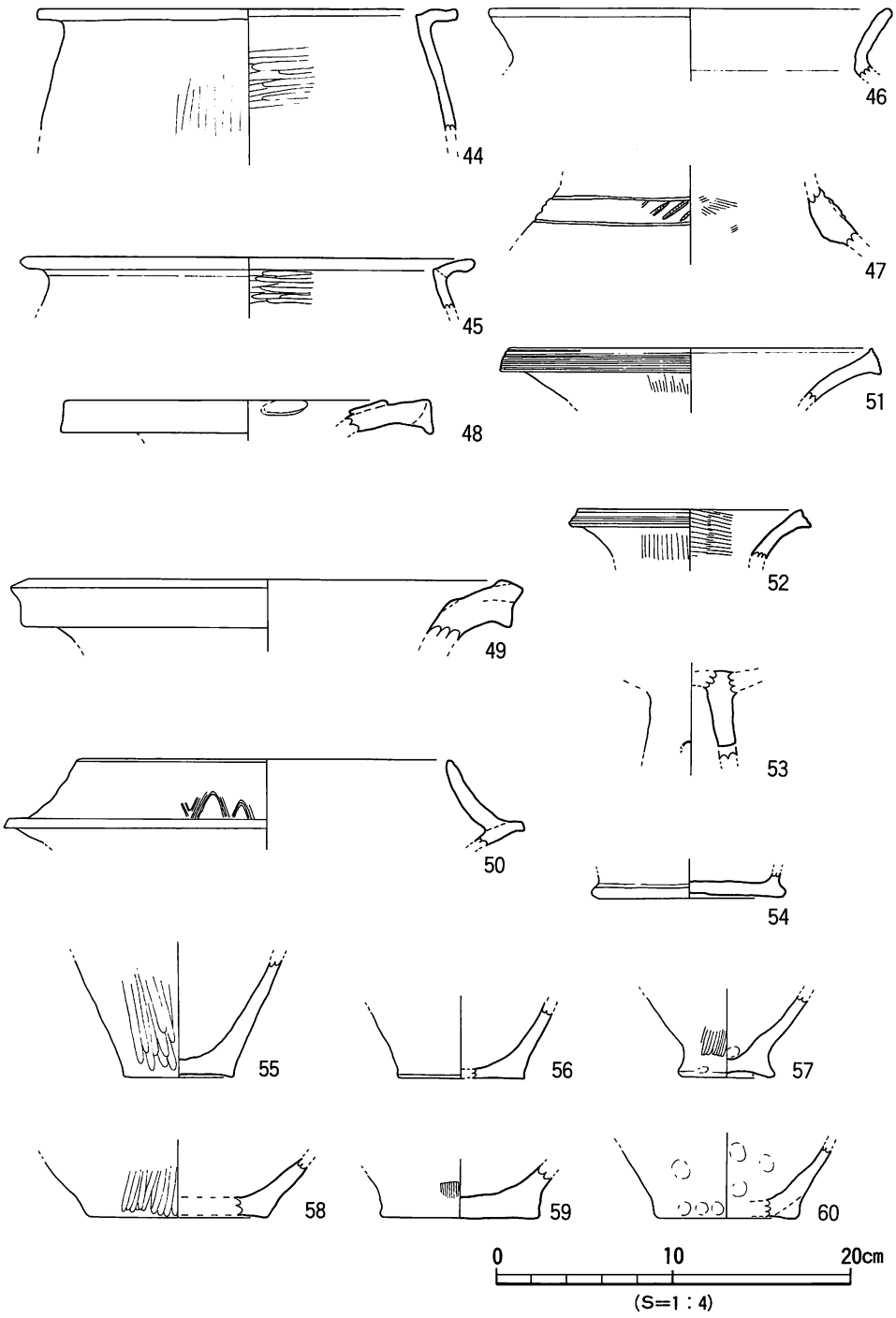
高坏形土器（53）　脚部片。小片のため器形ははっきりしないが、わずかに円形の透かしあとが看取される。手法的には、内面はナデ調整を施す。弥生後期後半のものであろう。

ジョッキ形土器（54）　ジョッキ形土器の底部片。上げ底で突出部をもつ。内外面共にナデ調整を施す。弥生中期中葉段階のものであろう。

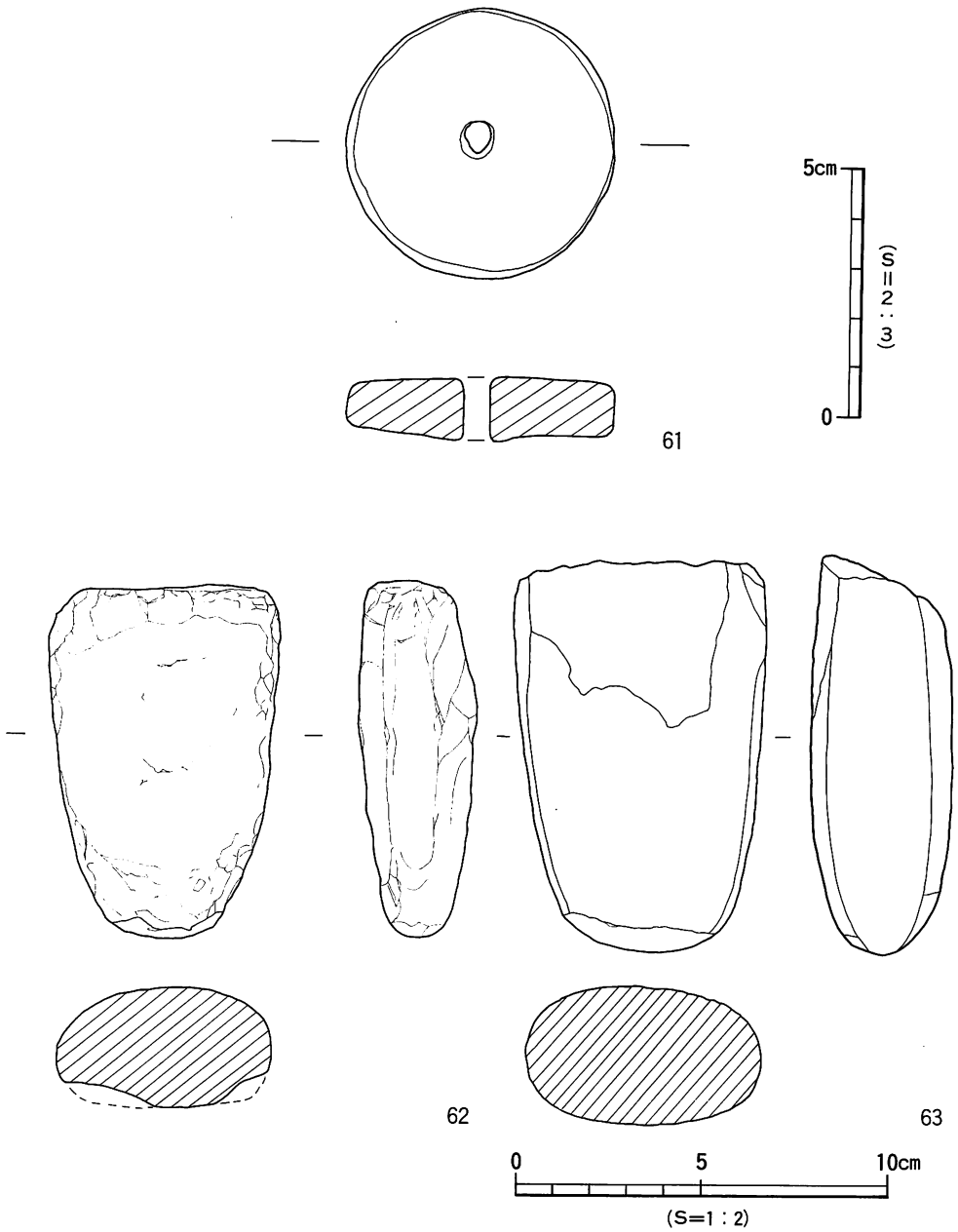
底部（55～60）　55～57は甕形土器、58～60は壺形土器の底部である。55はやや上げ底で、底部より直立気味に上外方に立ち上がる。胴部外面にヘラミガキ、底部外面はナデ調整を施す。56はやや突出した平底の底部片。内面に指頭圧痕が確認でき、外面はナデ調整である。57はくびれのやや上げ底の底部。内湾気味に立ち上がる胴部をもち、胴部外面は刷毛目調整、底部内外面には指頭圧痕が認められる。58は推定底径10㎝を測るやや上げ底の壺の底部。外面はヘラミガキ、内面はヨコナデ調整を施す。59はやや突出した平底の底部片。胴部外面はわずかに刷毛目調整がみられ、底部内外面は、ナデ調整を施す。60は断面三角形の突出部を貼付した壺の底部。わずかに上げ底で、底部より内湾気味に立ち上がる。胴部内外面に、指頭圧痕が顕著にみられる。底部外面はヨコナデ、内面はナデ調整を施す。以上の底部については、弥生中期中葉から後期のものである。

紡錘車（61）　61は土製紡錘車である。法量は、直径5.2～5.3㎝、厚さ1.2～1.3㎝、重さ45.6ｇである。円孔は焼成前穿孔で、径6～7㎜を測る。

石斧（62・63）　蛤刃石斧である。63は仕上げの研磨は丁寧である。



第17図　第Ⅲ層出土遺物実測図(1)



第18図　第Ⅲ層出土遺物実測図(2)

第Ⅲ層出土遺物（第19～27図、図版12～18）

甕形土器（64～88）　64～79は如意形の口縁部で、口唇部に刻目を施すものである。刻目は、口唇部全面に施すもの（64・70～73・77・78）と、下端に施すもの（65～69・76～79）がある。

肩部の張りは64にはみられず、66～68は若干の弱い張りをもつものである。70と75は、口縁部の折り曲げが強く75の外面には横方向の刷毛目調整が顕著にみられる。金ウンモを多く含む。80～84は、肩・胴部片でいずれも有段で刻目を施す。80は、肩部片で、成形の際の粘土接合痕が顕著にみられる。81～84は胴部片である。また、刻目は、浅くて小さいもの（80～83）と、深く刻み込むもの（84）とがある。85～88は、縄文晩期の凸帯文系の系譜をひくものである。85は、口唇部が尖り、口縁直下に貼り付け凸帯を巡らせ、刻目を施す。内外面共にナデ調整が看取できる。小片である。86は、口縁端部にわずかに凸帯を巡らせ刻目を施す。外面は、縦方向の刷毛目調整が施されており、弥生化した凸帯文系土器とみなすことができる。小片である。87は、口縁部が部分的なつまみ出しにより緩やかに波うつ。口縁直下に凸帯を巡らせ刻目を施す。内面は、丁寧なヘラミガキ調整が看取できる。松山平野において他に出土例をみない。88は口縁内側に刺突文を施す。92～97は甕形土器の底部で、92～95は上げ底で、96・97は平底である。

89～91は縄文後期の遺物である。89は、内湾気味に緩やかに立ち上がる口縁をもち、口唇部がわずかに先細りする。90は、緩やかに外反しながら立ち上がる口縁部である。いずれも、口縁部外面に縄目文を施す。91は磨滅のため調整は明確ではない（条痕か）。

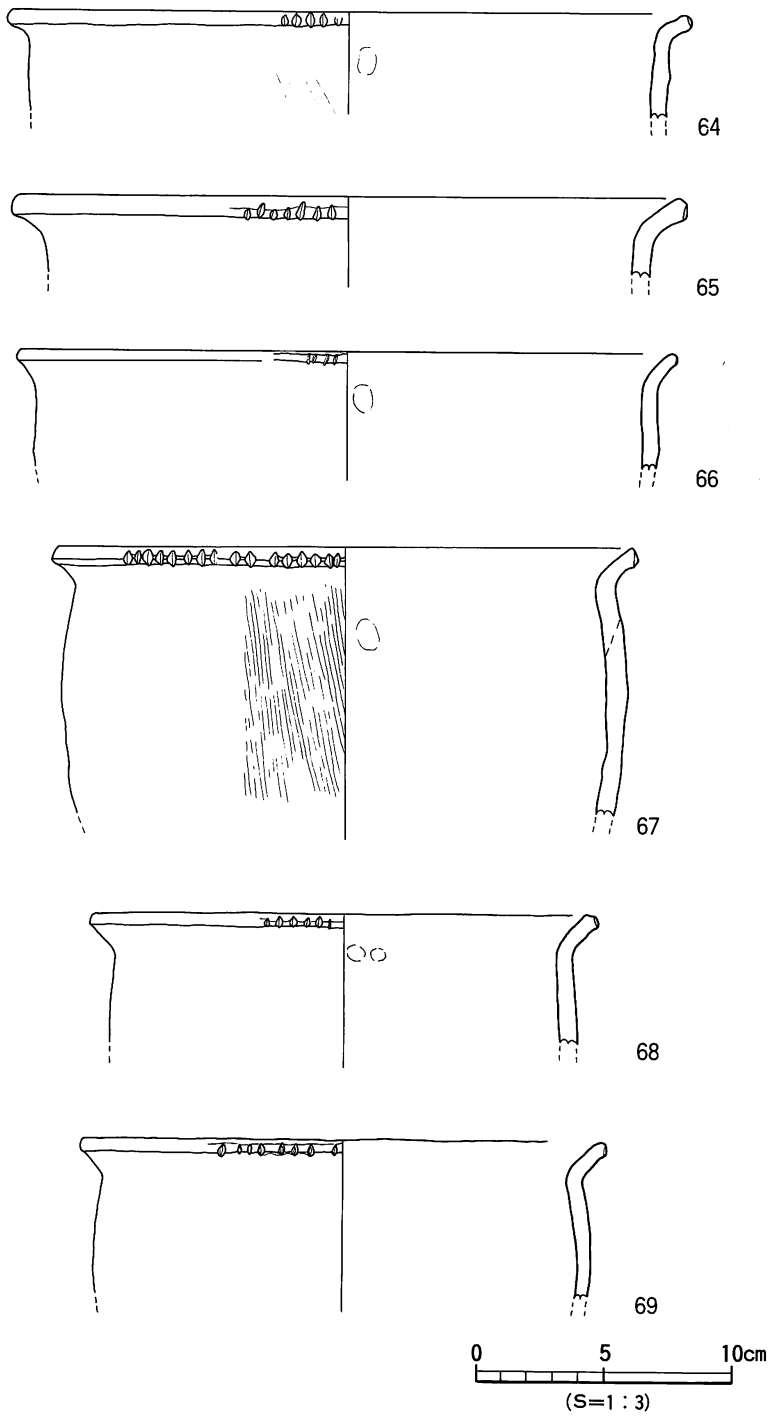
壺形土器（98～148）　口縁部の法量（推定）より、大型品（30㎝以上）、中型品（15～30㎝未満）、小型品（15㎝未満）の三つに分類できる。

大型品（98～108）　98～100は緩やかに外反し、口縁下には不明瞭な段をもつ。器壁は厚く、口縁端面は「コ」字状を呈する。98は成形時の粘土接合痕が顕著にみられる。101～103は大きく屈曲する口縁で、口縁下には不明瞭な段をもつ。103は口縁直下に指頭痕を顕著に残す。104～108は緩やかに外反し、口縁下には不明瞭な段をもつ。107は小片にて段の有無は不明である。口縁端面には1条の沈線文を巡らす。器壁は厚く口縁端面は「コ」字状を呈する。108は、緩やかに外反する口縁で、口縁部下端に刻目を施す。口縁下には不明瞭な段をもつ。他の土器と様相を異にする。

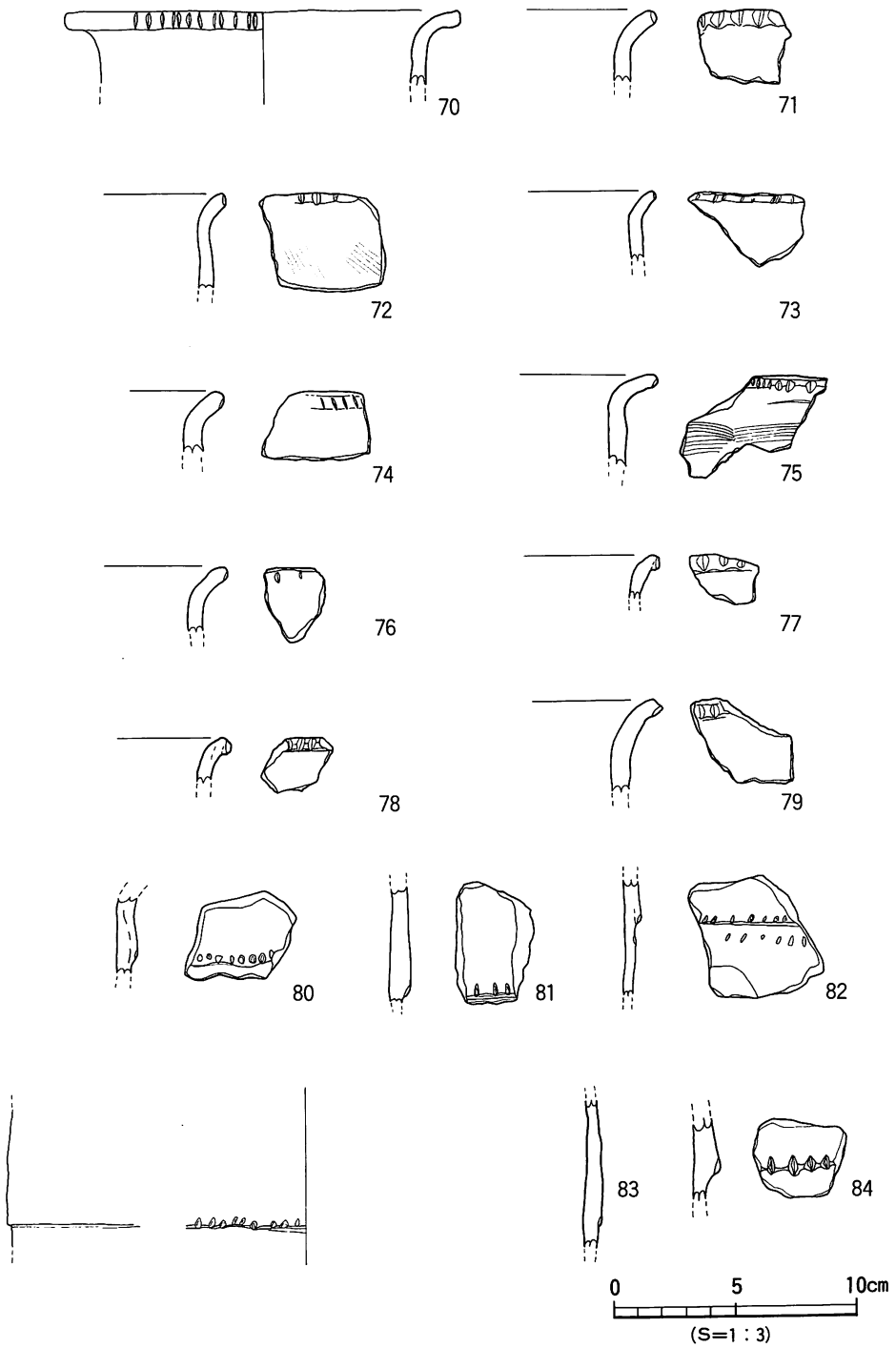
中型品（109～120）　109～112は、緩やかに外反し、口縁下には不明瞭な段をもつ。113～120は大きく屈曲し、口縁下には不明瞭な段（117～120、小片にて不明）をもつ。また、口縁端部は「コ」字状を呈するもの（109～111・113・115）と、丸く仕上げるもの（112・114・116～120）がある。115・116・119は、成形時の粘土接合痕が顕著にみられる。

小型品（121～123）　121は、口縁が「く」字状に屈曲し、口縁下には、不明瞭な段をもつ。内外面共に、横方向のヘラミガキが施され焼成も極めて良いものである。122は、緩やかに屈曲する口縁で、頸部には凸帯を巡らせ凸帯上に刻目を施すもので、他の土器とは異なった様相を示す。123は、緩やかに外反する口縁で、口縁下に段（沈線の可能性もある）をもつ。

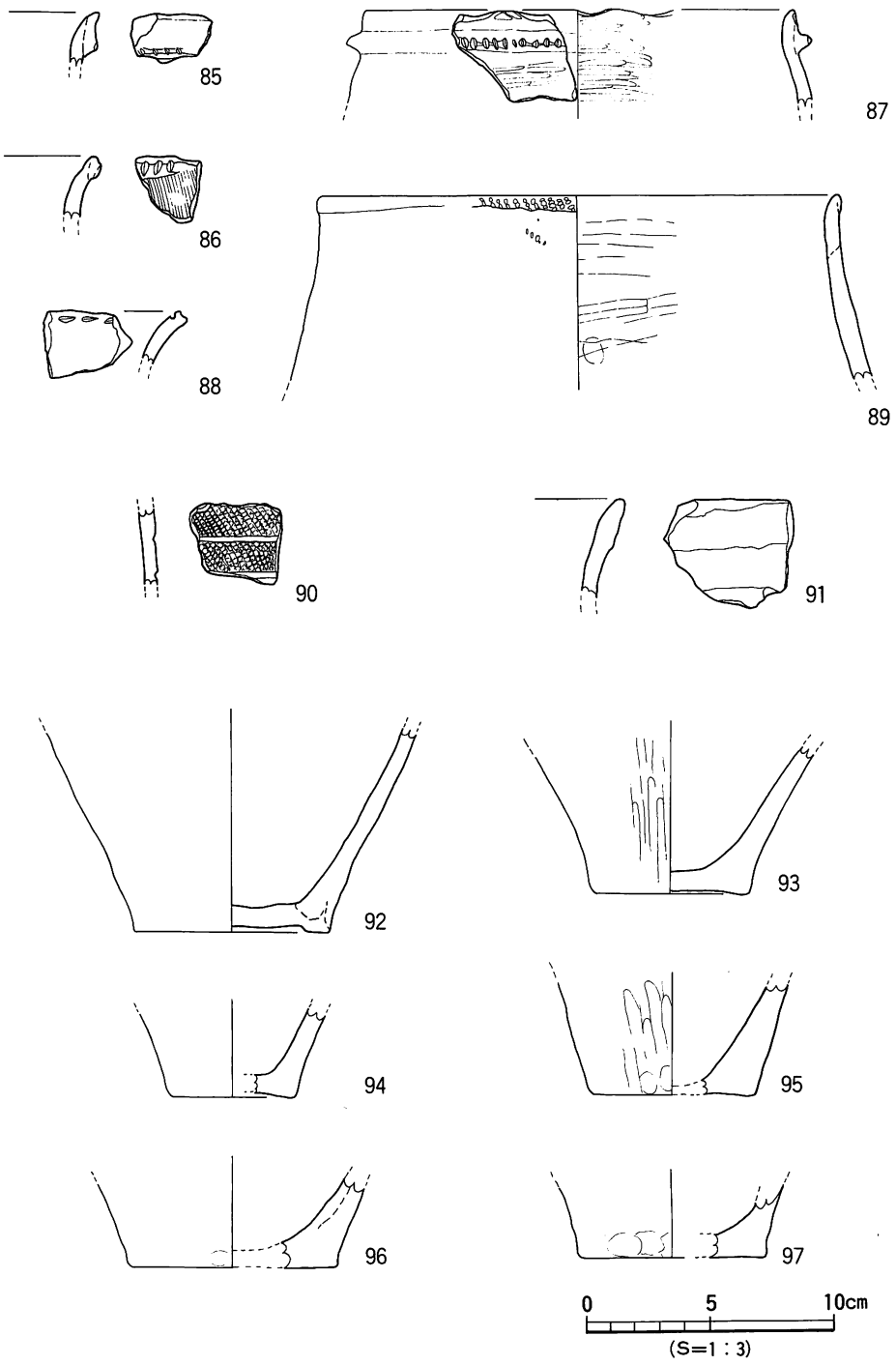
頸・胴部片（124～143）　施文で分類すると、横沈線文・木葉文・弧文・山形文・刺突文・竹管文・縦方向の区割と7つに分類できる。



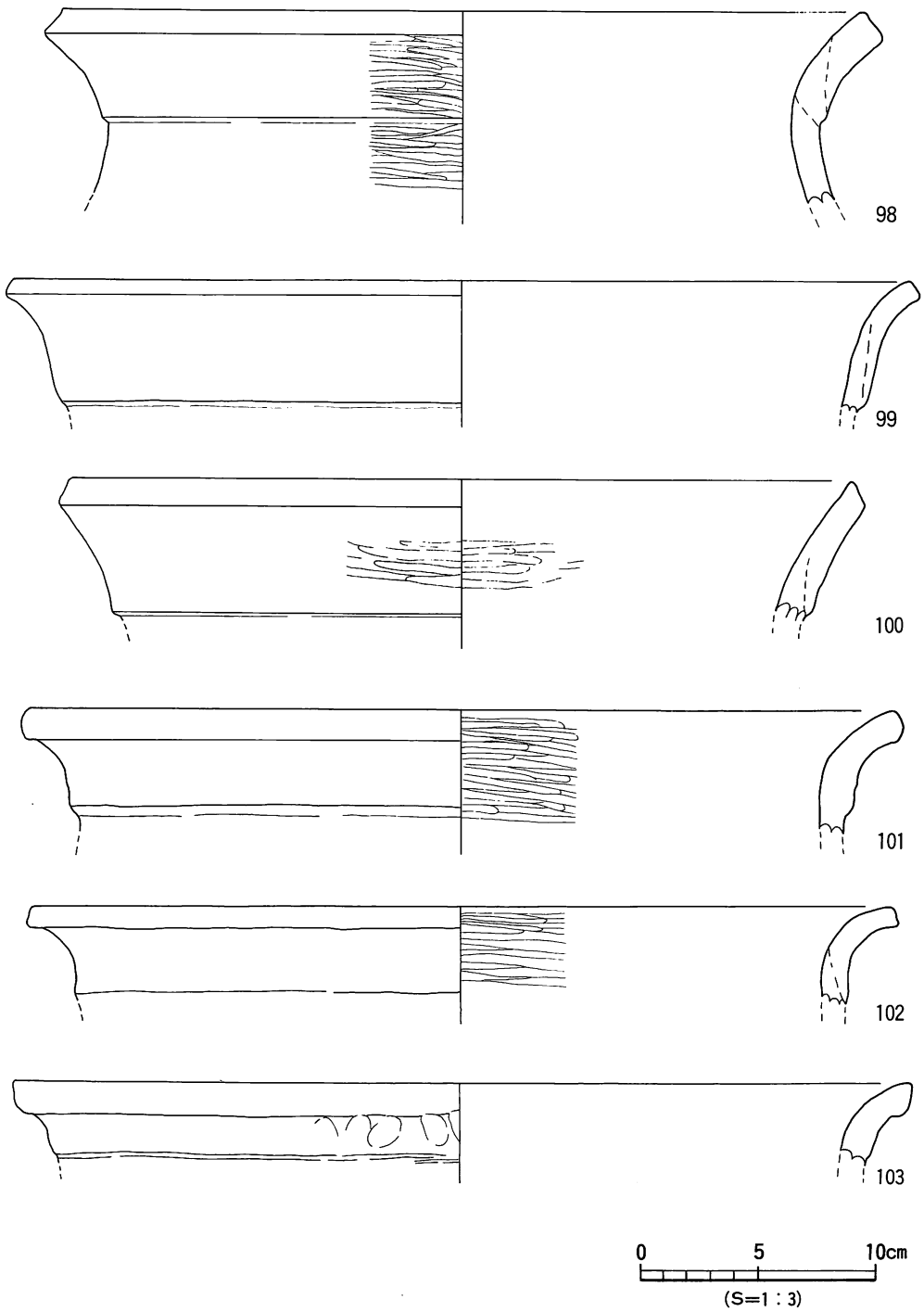
第19図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(1)



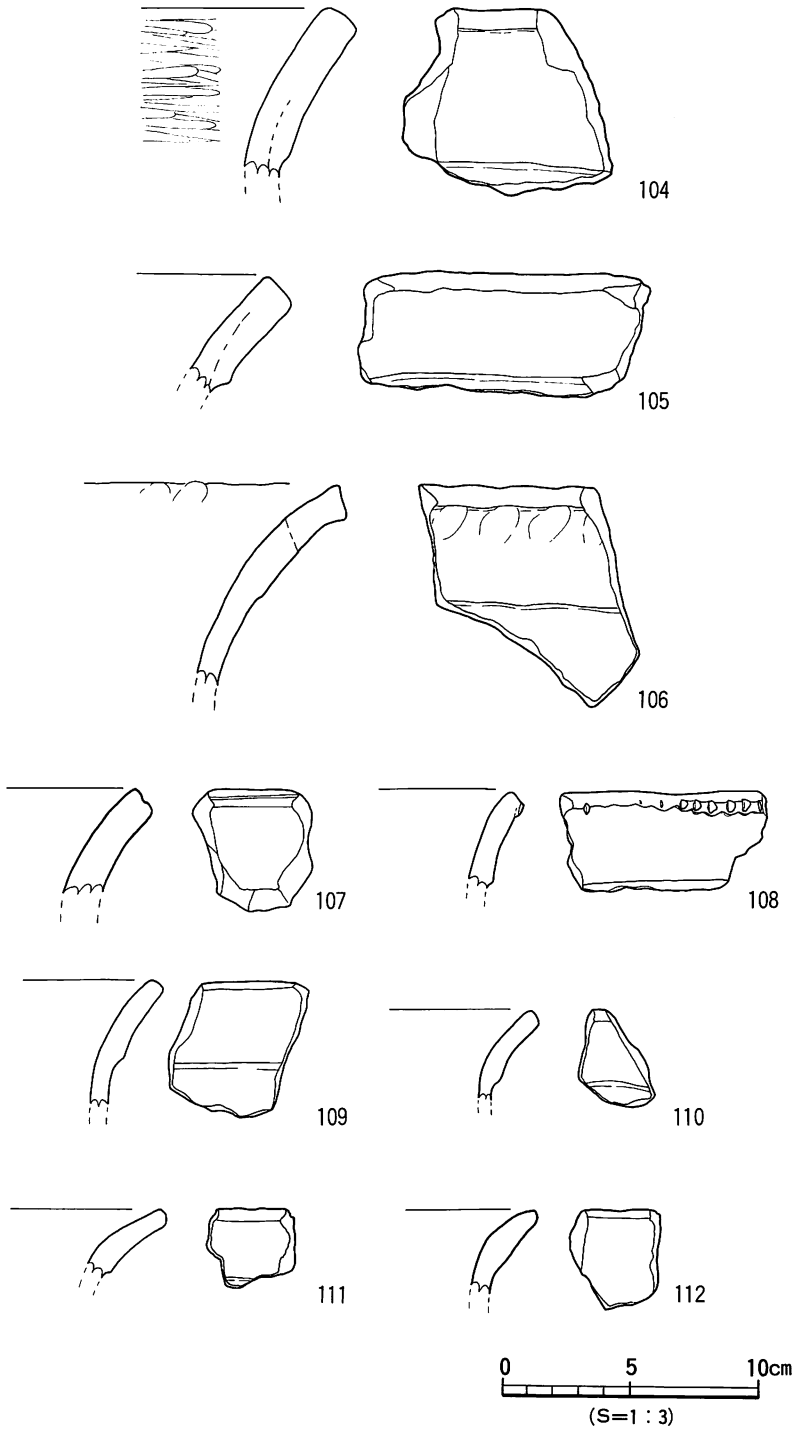
第20図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(2)



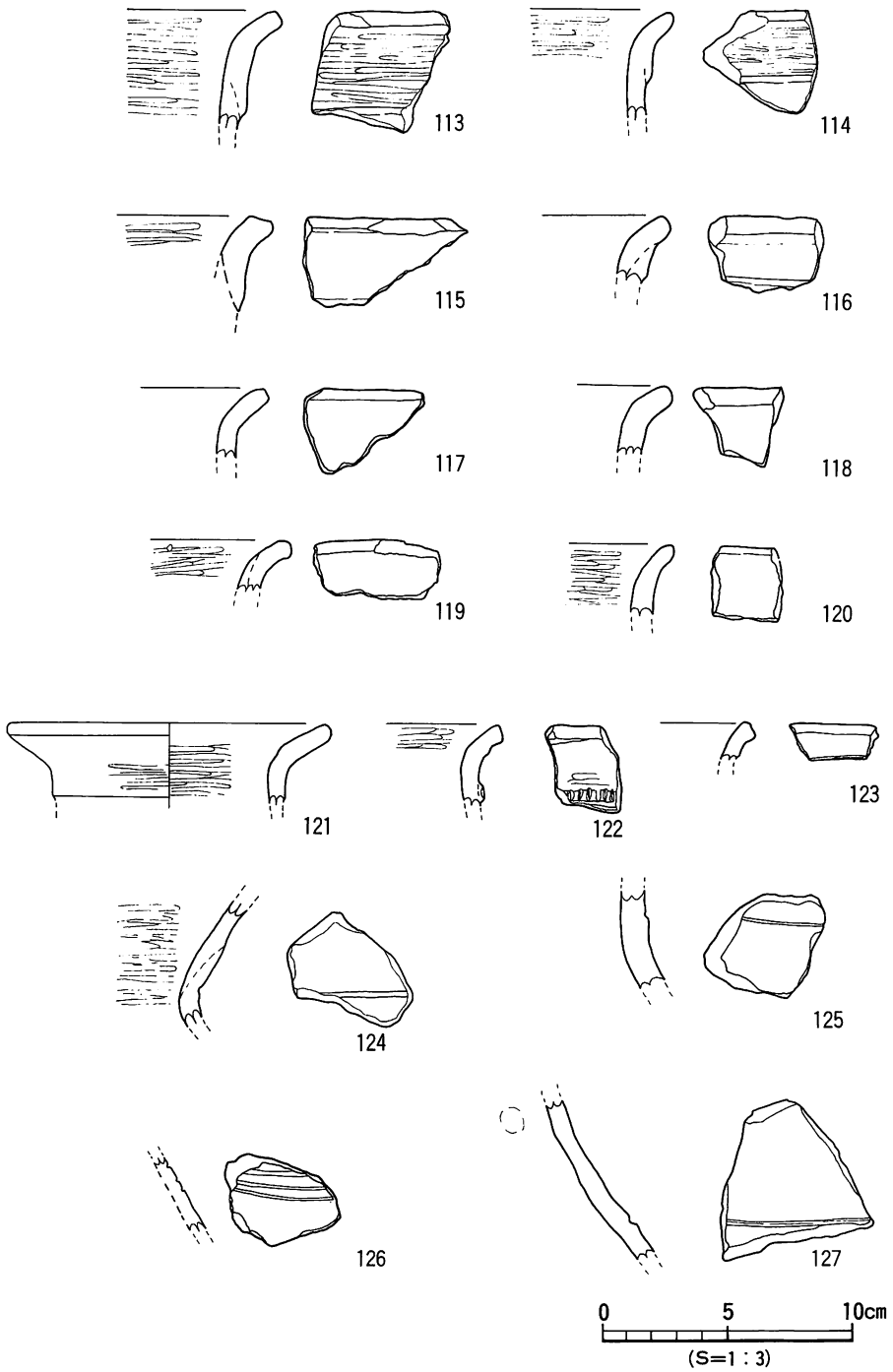
第21図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(3)



第22図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(4)



第23図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(5)



第24図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(6)

沈線文（124～127）　124・125は頸部片で、頸部と肩部の境に1条の沈線文を施す。126・127は肩部片である。126の上部は削り出し状で、下部は2条の沈線文を施す。127は、1条の沈線文を施すもので、外面は丁寧な横方向のヘラミガキを行う。

木葉文（128・129）　胴部片である。128は、無軸のもので、ミガキ後4～6条の浅い沈線で木葉を描く。129は無軸で、屈曲下（沈線状）に1条の沈線で木葉を描く。磨滅のため文様構成は明確でない。

弧文（130～132）　130は、1条の沈線文下に3条の下弦の重弧文を施す。131・132は小片のため文様の構成は明確ではないが、131は浅い沈線文を、132は深めの沈線文を施す。

山形文（133～138）　胴部片である。133は、2条以上の沈線文下に4条の山形文を施す。134は、ミガキ後1条以上の浅い横沈線文下に4条の弧を描くような山形文を施す。135は、小片のため文様構成が不明であるが、深い沈線文を施す。136は、削り出し状の段下に1条の横沈線文を施し2条の山形文を施す。137・138は、胴部最大径部に施すもので、137は山形文を、138は上下に1～2条の横沈線文を施し、沈線文間に斜線文を施すものである。

刺突文（139）　胴部片で、沈線間に刺突文を施す。

竹管文（140）　胴部片である。小片にて文様構成は明確ではないが、横沈線文と直径3㎜大の竹管文を施す。

縦方向の区割り（141～143）　141は、数条の沈線文間に施す。142は、頸部片で、沈線文下に縦の浅い沈線文を数条施す。143は横沈線文下に、縦の沈線文を施す。小片。

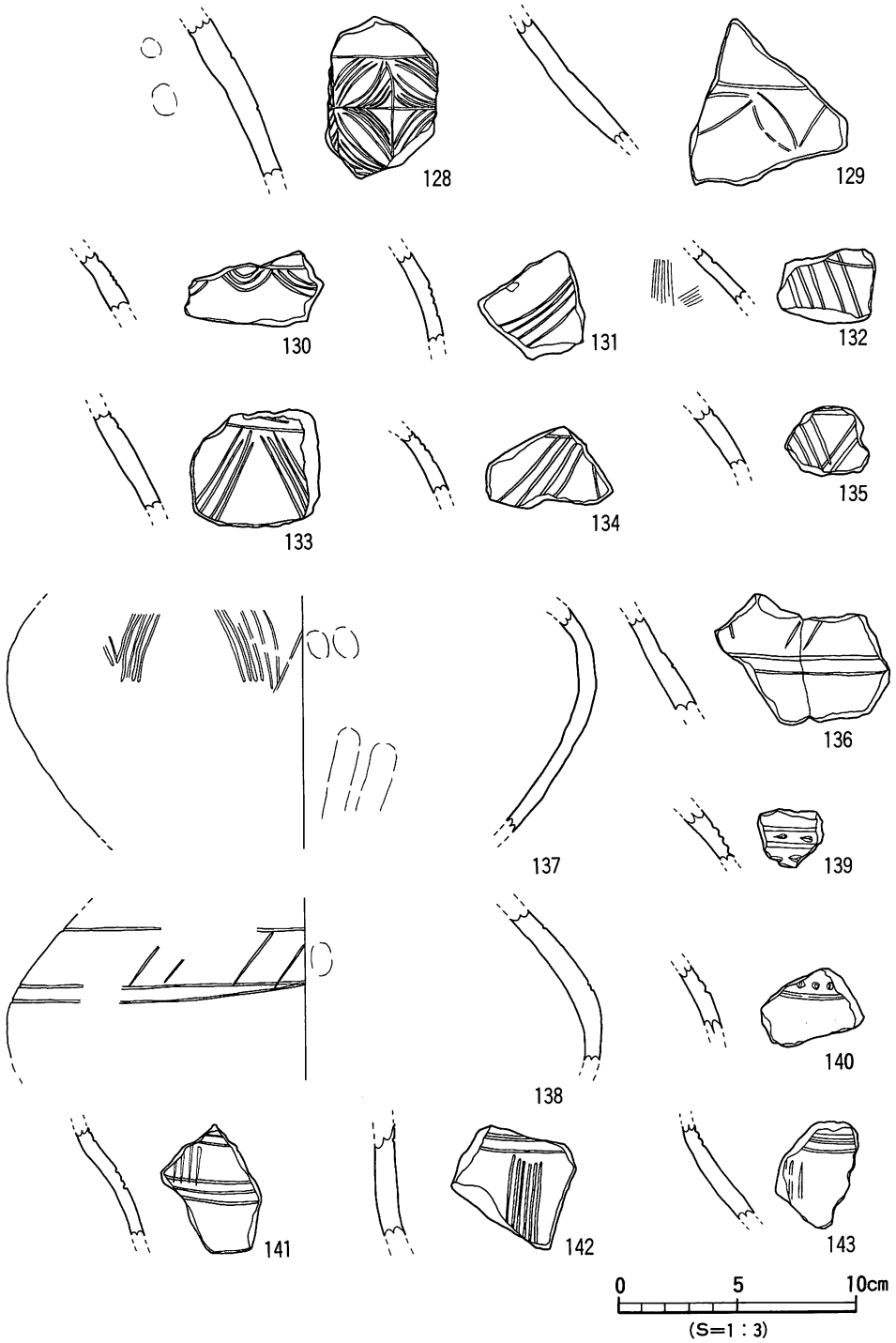
底部（144～148）　144は、大型の壺底部で、平底である。145～148はわずかに上げ底を呈するもので、外面にヘラミガキを施すものもある（145・146・148）。

高坏形土器（149～153）　149・150は坏部片で、口縁内面は直線的でわずかに肥厚し段をもつ。いずれも口縁端部は「コ」字状を呈する。現時点でこれらの出土は当平野内では初例である。151は坏部片で、接合部が屈曲し緩やかに外反する（鉢になる可能性もある）。152は内面が肥厚し段をもつ。端部は丸くおさめる。小片である。153は脚部片で、「ハ」の字状に立ち上がる。外面は剝離の為、裾部の施文（段・沈線）の有無は確認できない。内面はナデ調整である。

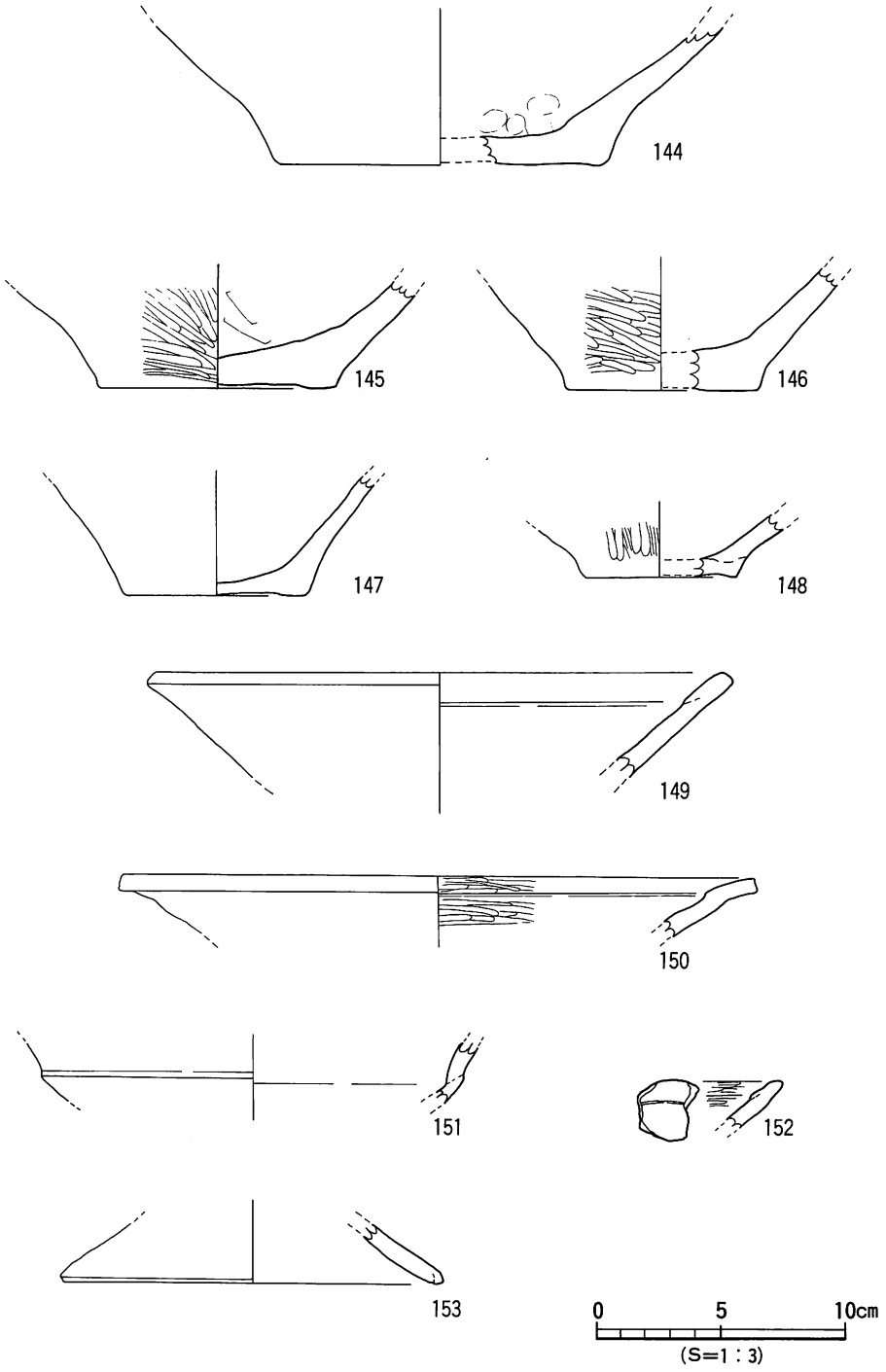
鉢形土器（154～162）　154～160は直立ないし、やや内湾気味に立ち上がる直口の口縁部をもつ。端部は面取りし「コ」字状を呈するもの（154～157）と、丸くおさめるもの（158・159）と、先細りしやや尖り気味のもの（160）がある。また154は、ヘラミガキが、156は、刷毛目調整がみられる。161は大型の鉢で、口縁部が厚く丸い。如意形の口縁で、口縁下に不明瞭な段をもつ。内外面共に丁寧なヘラミガキを行う。162は口縁下に屈曲部をもつ。端部は丸くおさめる。

ミニチュア品（163）　平底で、直線的に立ち上がる。外面に工具痕を看取する。

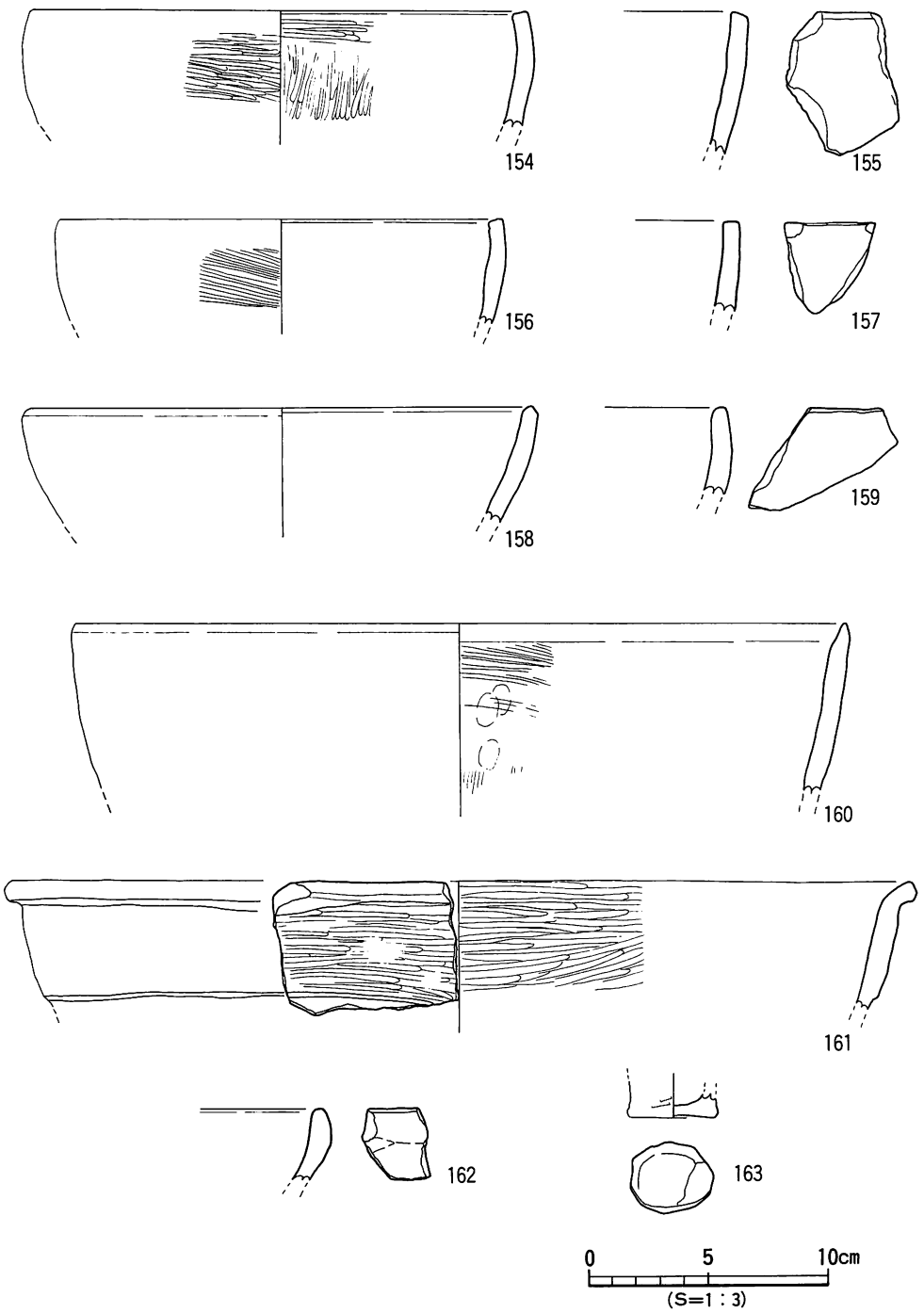
〔水口〕



第25図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(7)



第26図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(8)



第27図　第Ⅲ層下層部出土遺物実測図(9)

4　小　結

本調査において弥生時代から中世までの遺構と遺物を確認することができた。弥生時代については、土壙ＳＫ１と包含層からの弥生土器の検出があったことから、本調査地周辺及び本調査地から上の大峰ケ台丘陵上～中腹部に、同時代の集落が存在していたことを物語っている。事実、大峰ケ台丘陵の山頂部、大峰ケ台遺跡において弥生時代中期の集落関連遺構が検出されている。また、本調査地の南300ｍの地点の澤遺跡においても、弥生時代後期の壺棺墓などが検出されている。これらのことから、弥生時代を通じて、大峰ケ台丘陵を基盤として同時代の集落が存続していたものといえよう。

ついで、古墳時代の遺構と遺物が認められる。同時期の遺跡は、辻遺跡２次調査において、掘立柱建物址を検出しているが、本調査地近隣に存在する古墳時代集落に関連して、溝ＳＤ１～３などの遺構が存在するものと考えられる。引き続き古代からの中世の遺構と遺物を確認している。掘立柱建物址３棟及び遺物包含層（須恵器・土師器）である。掘立柱建物址については、層位関係・出土遺物等から10世紀以降に建てられたものと考えられる。澤遺跡においても同時代の掘立柱建物址が検出されていることから、当地を含め、ごく近隣地域に同時代の集落が存在し、継続して営まれていたものと考えてよかろう。今後は資料収集を重ね、大峰ケ台丘陵及び周辺地域の弥生時代から中世にいたるまでの集落の動態を明らかにし、その変遷を考えていかねばならないであろう。

次に、特筆すべきは、本調査検出の第Ⅲ層遺物包含層出土の弥生土器である。上層は、中・後期の遺物が混在しているが、下層では、前期の遺物のみが集中して出土した。この下層出土の弥生土器は、甕形土器については、如意形口縁を呈するもの（刻目あり）の頸部に施文を施さず、壺形土器については、口縁部境に段をもち、高坏形土器については、坏内面に段を有している。これは板付Ⅱａ式（福岡県板付遺跡）に相当するものと考えられ、松山平野の弥生前期土器の中でも古い段階のものといえる。第Ⅲ層下層出土の弥生土器については、一括性の高いものであり、松山平野における弥生時代前期の土器編年を考えるうえで貴重な資料となるものである。今後、同時期の弥生土器を考えるうえでのひとつの指標となるものである。

〔参考文献〕

松村　　淳　　1989「澤　遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
栗田　茂敏　　1989「辻　遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
松　山　市　　1989『松山市史料集　第２巻　考古編Ⅱ』
愛　媛　県　　1986『愛媛県史　資料編　考古』
福岡市教育委員会　1976『板付　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第35集』

遺構・遺物の一覧

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例）縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、
胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（１～４）多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。　例）◎→良好、○→良、△→不良。

表２　掘立柱建物址一覧

掘立	規模（間）	方位	桁行		梁行		床面積（㎡）	時期	備考
			実長（尺）	柱間寸法（尺）	実長（尺）	柱間寸法（尺）			
1	２×４	東西	440(14.6)	4・3.3・4.0・3.3	300(10)	4.7・5.3	13.40	古代以降	２号掘立に切られる。
2	２×３	東西	550(18.3)	6.7・4.0・3.3	360(12)	6.7・5.3	19.44	古代以降	１号掘立を切る。
3	１×２	南北	350(11.7)	6.0・5.7	340(11.3)	11.3	11.90	古代以降	

表３　土壙一覧

土壙（SK）	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ（m）	埋土	出土遺物	備考	時期
1	D5	不整楕円	逆台形	1.6×0.7×0.12	黒褐色粘質土	弥生		弥生以降

表４　溝一覧

溝（SD）	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ（m）	埋土	出土遺物	備考	時期
1	D２～D３	U字状	5.00 × 0.30 × 0.10	褐色土	須恵	掘立２に切られる。	古墳以降
2	D２	U字状	2.80 × 0.35 × 0.12	茶褐色土	弥生・須恵	掘立２に切られる。	古墳以降
3	C３～D３	V字状	8.20 × 0.32 × 0.10	褐色土	須恵・土師	掘立２に切られる。	古墳以降

表5　第Ⅱ層 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	坏蓋	口径 (9.5)	扁平な天井部から口縁部にゆるやかに下がり、かえりは口縁端部より下がる。	㊉ 回転ヘラ削り ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		6
2	坏蓋	口径(10.4)	笠形の天井部を持ち、かえりは口縁端部より下がらない。	㊉ 回転ヘラ削り ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		
3	坏蓋	口径 (9.0) 残高 2.4	笠形の天井部を持ち、口縁端部は丸い。かえりは口縁端部より下がらない。	㊉ 回転ヘラ削り½ 回転ナデ ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		6
4	坏蓋	残高 1.2	扁平な擬宝珠様つまみ。中央部が突出する。	回転ナデ	ナデ	灰色	密 ◎		6
5	坏蓋	口径(12.9)	天井部から、ゆるやかな弧を描いて下がり、口縁部は下内方へ屈曲する。	㊉ 回転ヘラ削り½ 回転ナデ ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密 ◎		
6	坏蓋	口径(12.8) 残高 1.3	天井部から、わずかに段をなして下がり、口縁部は下方へ屈曲。端部は丸い。	㊉ 回転ヘラ削り ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	灰 色	密 ○		6
7	坏蓋	口径(15.6) 残高 1.8	やや丸味を持つ天井部を有し、口縁部は下方へ屈曲。端部は尖り気味に丸い。	㊉ 回転ヘラ削り½ 回転ナデ ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	緑灰色	密 ◎		6
8	坏蓋	口径(15.4) 残高 1.7	天井部から、わずかに段をなして下がり、口縁部は下方へ屈曲。端部は丸い。	㊉ 回転ヘラ削り½ 回転ナデ ㊐ 回転ナデ	回転ナデ	灰 色	密 ◎		6
9	坏蓋	口径(15.7)	平坦な天井部を有し、口縁部は下方へ屈曲。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
10	坏蓋	口径(14.5)	天井部と口縁部の境界は明瞭な段をなし、口縁部はさらに下方へ屈曲。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		
11	坏身	口径(14.2) 底径 (9.0)	斜め上方に立ち上がる体部をもち、口縁部は外反。高台は内端面で接地。	㊐ 回転ナデ ㊎ 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	密 ◎		7
12	坏身	底径 (9.2)	体部と底部の境界はわずかに稜をなす。高台は八の字に開き、内端面で接地。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	緑灰色	密 ○		
13	坏身	底径(11.7) 残高 3.0	器壁に対し、比較的厚みのある高台が付く。高台は内端面で接地。	㊐ 回転ナデ ㊎ 磨滅のため不明	回転ナデ	灰白色	密 ◎		7
14	坏身	底径 (9.0) 残高 3.3	内湾気味にたちあがる体部を持ち、高台は底部端につく。内端面で接地。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		7
15	坏身	底径(12.0)	斜め上方に立ちあがる体部を持ち、高台は底部端につき、内端面で接地。	㊐ 回転ナデ ㊎ 回転ヘラ削り→回転ナデ	回転ナデ	灰白色	砂粒 ○		7
16	坏身	底径(13.1)	幅広の高台が底部端よりやや内側に付く。内端面で接地する。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	砂粒 ○		7
17	坏身	底径(11.0) 残高 3.0	やや内湾気味にたちあがる体部をもち、高台は平坦面で接地。	回転ナデ	㊐ 回転ナデ ㊎ ナデ	灰色	密 ◎		7

第Ⅱ層 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
18	坏身	底径(12.6)	高台は体部と底部の境界付近に付き、平坦面で接地する。	(口) 回転ナデ (底) ナデ	回転ナデ	灰白色	密 ○		
19	坏身	口径(13.1)	たちあがりは内傾し、端部は尖る。受部は上外方に延びる。	(底) 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	密 ◎	自然釉	
20	坏身	口径(11.5)	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味に丸い。受部はほぼ水平。	(口) ナデ (底) 磨滅のため不明	回転ナデ	青灰色	密 ◎		8
21	坏身	口径 (9.3)	たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。受部はやや上外方に延びる。	(口) 回転ナデ	(口) 回転ナデ	青灰色	密 ◎		
22	坏身	口径 (9.0)	たちあがりは短く内傾。受部は上外方にひねり出されている。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		8
23	坏身	口径(12.0) 器高 3.0	たちあがりは短く内傾。底部は平底風で回転ヘラ切り痕を残す。	(口) 回転ナデ (胴) 回転ナデ (底) 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色	砂粒 ◎		8
24	坏身	口径(10.0) 残高 1.6	たちあがりは短かく、やや内傾し、端部は尖り気味。受部は上方にひねり出し。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ○		
25	無蓋高坏	口径(15.1)	鈍い稜をもち、稜直上に凹線が巡る。内湾気味の体部から口縁部は外反。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		8
26	無蓋高坏	口径(15.2)	稜をもち、体部はやや内湾気味にたちあがる。口縁端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		
27	高坏	残高 5.0	八の字状に開く脚部の外面に不明瞭な２条の凹線。スカシあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎	自然釉	
28	高坏	残高 8.3	比較的細い基部をもつ。中位付近に２条の凹線を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	砂粒 ◎		9
29	甕	口径(22.4)	口縁部は下外方へ肥厚し、端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 △		
30	甕	頸部径 (14.6)	頸部からゆるやかに開く肩部をもつ。肩部外面にヘラ記号あり。	ナデ	円弧叩き ナデ	青灰色	密 ◎		9
31	短頸壺	胴部径 (14.5)	扁球形の体部から鈍く屈曲する。肩部に１条の凹線が巡る。	(胴) 回転ナデ (底) 回転ヘラ削り	(胴) 回転ナデ (底) ナデ	青灰色	密 ◎		9
32	長頸壺	残高 6.5	球形の体部からゆるやかに肩部に至る。肩部に２条の凹線。凹線間に列点文。	回転ナデ	回転ナデ	緑灰色	密 ◎	自然釉	8
33	長頸壺	残高 6.5	台付の長頸壺の底部。外面に台部貼り付けによる接合痕あり。	(底) 回転ヘラ削り	(底) 同心円叩き	灰色	密 ◎	自然釉	9
34	長頸壺	胴部径 (15.5)	半球形の体部から稜をもって屈曲する肩部に１条の凹線が巡る。	(胴上) 回転ナデ (胴下) 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	密 ◎		8

第Ⅱ層 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
35	長頸壺	胴部径 (17.0)	半球形の体部から稜をもって屈曲し、肩部は強く内傾。1条の凹線あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密 ◎		8
36	甕	口径(25.6)	内湾気味にたちあがる口縁部をもち、端部は内傾する不明瞭な段をなす。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	赤褐色	石・長 (1～6) ◎		10
37	甕	口径(23.0)	内湾気味な口縁部で端部は内傾する段、口縁内端部がわずかに肥厚。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	暗褐色 褐色	石・長 (1～7) ◎		
38	椀	口径(16.4)	内湾気味な口縁部で端部は丸い。端部、内面に不明瞭な稜をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色	密 ◎		10
39	坏	口径(16.6) 底径(11.4)	外上方に内湾しつつのびる口縁部をなし、端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色	密 ◎		
40	高坏	口径(18.2)	内湾する口縁部をなし、端部はわずかに面取り。口縁外面に1条の沈線。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐色	密 ◎		9
41	高坏	底径(17.3) 残高 8.2	直立気味な柱部とラッパ状の裾部、柱部14条の沈線、裾端部、半截竹管文。	ヘラミガキ	ヨコナデ	茶褐色	密 ◎		9
42	高坏	口径(16.2)	内湾気味な口縁部をもち、端部付近で外反、端部は尖り気味に丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	石・長 (1～3) ◎		10
43	甑		湾曲しながら上外方にのびる把手。	磨滅のため不明		褐色	石・長 (1～5) ○		10

表6 第Ⅲ層 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
44	甕	口径(23.4)	口縁逆「L」字状。口縁端部はやや丸みを帯びた面をなす。	(口) ヨコナデ (胴) タテハケ	(口) ヨコナデ (胴) 横ミガキ	黄橙色	長 (1～3) ○		10
45	甕	口径(25.0)	口縁逆「L」字状。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	(口) ヨコナデ (胴) 横ミガキ	明赤褐色	石・長 (1～6) ◎		
46	甕	口径(22.2)	口縁逆「L」字状。頸部内面は不明瞭な稜をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐色 褐色	石・長 (1～2) ◎		10
47	壺	頸部径 (14.2)	頸部に凸帯貼付。凸帯上下に1条の沈線。凸帯上面に刻目を施す。	磨滅のため不明	ハケ (8本/1cm)→ ナデ	淡灰褐色	石・長 (1～2) ◎		
48	壺	口径(23.9)	口縁部は下方に肥厚し、端面は外傾。内面に円形浮文貼付。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色	石・長 (1～3) ○		
49	壺	口径(28.7)	口縁部は上下に肥厚し、口縁端面は内傾する凹面をなす。粘土紐貼付あり。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	淡褐色	石・長 (1～3) ○		11

第Ⅲ層 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
50	壺	口径(21.2)	複合口縁壺。拡張部外面に波状文。拡張部は内湾気味で、端部は丸い。	(拡) 磨滅のため不明 (頸) ナデ	ヨコナデ	褐色	石・長(1～3)◎		10
51	壺	口径(12.3)	凹線文壺。口縁端部は下方に肥厚し、２条の凹線が巡る。	(口) ヨコナデ (頸) タテハケ(5本/1cm)	ヨコハケ(5本/1cm)	赤褐色	石・長(1～3)◎		10
52	壺	口径(20.2)	口縁端部は上下方に肥厚し６条の凹線が巡る。	(口) 磨滅のため不明 (頸) タテハケ(6本/1cm)→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色	石・長(1～2)◎		10
53	高坏	残高 4.7	高坏脚部片。円孔が看取される。	磨滅のため不明	ナデ	淡褐色	石・長(1～2)◎		
54	ジョッキ型	底径(10.2)	ジョッキ型土器の底部。上げ底で突出部をもつ。	(胴) ヨコナデ (底) 磨滅のため不明	ナデ	褐色	石・長(1～2)◎		
55	甕	底径 (6.0)	やや上げ底。底部より直立気味に上外方にたちあがる。	(胴) タテミガキ (底) ナデ	ナデ	茶褐色 灰褐色	石・長(1～5)◎		11
56	甕	底径 (8.0)	やや突出した平底の底部。内面に指頭圧痕あり。	(胴) ヨコナデ (底) ナデ	ナデ	褐色 灰色	石・長(1～2)◎		
57	甕	底径 5.0	くびれてやや上げ底を呈する底部。	(胴) ハケ(8本/1cm) (底) ナデ(指頭圧痕)	磨滅のため不明	黄褐色 灰褐色	密◎		11
58	壺	底径(10.0)	やや上げ底の底部。	タテミガキ	ヨコナデ	黒褐色 黄褐色	石・長(1～2)○		
59	壺	底径 (9.0)	やや突出した平底の底部。内面に指頭圧痕あり。	(胴) タテハケ (底) ヨコナデ	ナデ	茶褐色	石・長(1～3)◎		
60	壺	底径 (8.0)	くびれのやや上げ底。底部より内湾気味にたちあがる。内外面に指頭圧痕。	ナデ	ナデ	黄褐色	砂粒◎		
61	紡錘車	直径 5.3 厚さ 1.3 重さ 45.6g	焼成前円孔。円孔直径7mm。中央が突出する。	ナデ		茶褐色	石・長(1～2)○		11

表７ 第Ⅲ層 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅 (cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
62	石斧	ほぼ完形	緑泥片岩	9.4	6.2	3.3	281.9		11
63	石斧	ほぼ完形	蛇紋岩	10.4	6.6	3.7	427.1		11

表8　第Ⅲ層下層部 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
64	甕	口径(26.4) 残高 4.0	口唇全面に刻目を施す。	(口) ヨコナデ (胴) ハケ→ナデ消し	(口) ヨコナデ (胴) ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) 金 ◎		12
65	甕	口径(25.6) 残高 3.1	口唇面取りし下端に刻目を施す。	磨滅のため不明	(口) ヨコナデ	灰褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		12
66	甕	口径(25.4) 残高 4.5	わずかに胴が張る。 口唇下端に刻目を施す。	(口) ヨコナデ (胴) 磨滅のため不明	(口) ヨコナデ (胴) ナデ	灰褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
67	甕	口径(22.4) 残高 10.4	胴が張る。口唇面取りし下端に刻目を施す。	(口) ヨコナデ (胴) 縦ハケ→ナデ消し	(口) ヨコナデ (胴) ナデ	灰褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ◎		12
68	甕	口径(20.0) 残高 6.0	胴が張る。口唇下端に刻目を施す。	(口) ヨコナデ (胴) 磨滅のため不明	(口) ヨコナデ (胴) ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	12
69	甕	口径(19.6) 残高 5.0	口唇面取りし下端に刻目を施す。	(口) ヨコナデ (胴) ナデ	(口) ヨコナデ (胴) ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		12
70	甕	口径(16.4) 残高 3.0	口縁部強く屈曲する。口唇全面に刻目を施す。	(口) ヨコナデ	(口) ヨコナデ (胴) ナデ	茶褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		12
71	甕	残高 4.0	口唇全面に強い刻目を施す。	ヨコナデ	剝離	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ◎		12
72	甕	残高 3.9	口唇全面に浅い刻目を施す。	(口) ヨコナデ (胴) ハケ	磨滅のため不明	茶褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		12
73	甕	残高 2.8	口縁端部わずかに細く口唇に浅い刻目を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1) 金 ◎		
74	甕	残高 2.5	口唇面取りし細く浅い刻目を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
75	甕	残高 3.7	口縁の折り曲げが強い。口唇下端に刻目。金ウンモ多含。	(口) ヨコナデ (胴) 横ハケ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1) 金 ◎		12
76	甕	残高 2.6	端部丸く治める。口唇下端に刻目を施す。小片である。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 黄褐色	石 (1) ◎		
77	甕	残高 1.8	小片。口唇全面に刻目を施す。	ヨコナデ	磨滅のため不明	黄褐色 黄褐色	石 (1) ◎		
78	甕	残高 1.8	小片。口唇全面に刻目を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
79	甕	残高 3.7	口縁端部面取り。口唇下端刻目を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1) 金 ◎		
80	甕	残高 3.0	肩部片。薄い貼り付けによる不明瞭な段をもつ。浅く刻目を施す。	ヨコナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石 (1) 金 ◎		13

第Ⅲ層下層部 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
81	甕	残高 5.0	胴部片。有段で段上に刻目を施す。	ナデ	ナデ	黒褐色 褐色	石・長(1) 金 ◎		13
82	甕	残高 4.6	有段で段上と段下に浅い刻目を施す。	ハケ→ナデ消し	ナデ	黄褐色 褐色	石・長(1) 金 ◎	黒斑	13
83	甕	残高 6.1	有段部の段上に浅い刻目を施す。	ハケ→ナデ消し	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長 金 ◎		13
84	甕	残高 3.2	有段部明瞭。深い刻目を施す。	ナデ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1) 金 ◎		13
85	甕	残高 2.0	口唇尖がる。口縁下貼り付け凸帯。凸帯上に浅い刻目を施す。	ヨコナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1) ◎		13
86	甕	残高 2.5	口縁部わずかに 貼り付け凸帯。凸帯上に刻目を施す。	縦ハケ(8本/1cm)	ヨコナデ	黄褐色 褐色	石・長(1) 金 ◎		13
87	深鉢	口径(17.4) 残高 3.8	口唇部つまみ出し、緩やかに波うつ。口縁下凸帯巡らせ刻目を施す。	(口) ヨコナデ (胴) ミガキ	ミガキ	黄褐色 黄褐色	石 (1) ◎		13
88	深鉢	残高 2.0	緩やかに外反する口縁。内面に刺突文を施す。口縁端面「コ」字状を呈す。	ヨコナデ	ナデ	黄褐色 黒褐色	砂粒 (石1) ◎		13
89	深鉢	口径(20.8) 残高 7.5	緩やかに内湾ぎみに立ち上がる口縁。口縁に縄目文を施す。	不明	板ナデか？	黄褐色 黄褐色	石・長 (1～2) ◎		13
90	深鉢	残高 3.6	緩やかに外反しながら立ち上がる口縁に縄目文を施す。		ナデ	茶褐色 暗褐色	砂粒 黒ウンモ ◎		13
91	深鉢	残高 4.3	緩やかに外反しながら立ち上がる口縁。	磨滅(条痕か)	ヨコナデ	黄灰褐色 黄灰褐色	石・長 (1～3) ◎		13
92	甕	底径 8.0 残高 8.0	上げ底を呈する。	縦ハケ→ナデ消し	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～4) 金 ◎		18
93	甕	底径 6.0 残高 6.3	わずかに上げ底を呈する。	縦ヘラミガキ	磨滅のため不明	黄褐色 黄褐色	石・長 (1～4) ◎		18
94	甕	底径 (5.0) 残高 3.7	わずかに上げ底を呈する。	磨滅のため不明	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1～2) ◎		
95	甕	底径 (6.4) 残高 4.7	わずかに上げ底を呈する。	縦ヘラミガキ	ナデ	黒褐色 褐色	石・長(1) ◎		
96	甕	底径 (8.5) 残高 3.6	平底。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	褐色 褐色	石・長(1) ◎		
97	甕	底径 (7.5) 残高 2.8	平底。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1～2) ◎		

第Ⅲ層下層部 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
98	壺	口径(33.8) 残高 8.2	口縁部緩やかに外反。口縁下に不明瞭な段をもつ。粘土接合痕顕著。	ヘラミガキ	ヘラミガキ→ナデか	茶褐色 褐色	石・長(1~2) ◎		14
99	壺	口径(38.0) 残高 5.5	口縁部緩やかに外反。口縁下に不明瞭な段をもつ。端面「コ」字状を呈する。	磨滅のため不明	ナデ	黄褐色 褐色	石・長(1~3) 金 ◎		14
100	壺	口径(32.2) 残高 5.5	口縁部緩やかに外反。口縁下に不明瞭な段をもつ。器壁厚い。	ヘラミガキ（磨滅）	ヘラミガキ（磨滅）	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		14
101	壺	口径(36.4) 残高 5.0	大きく屈曲する口縁部。口縁下に不明瞭な段をもつ。	ヨコナデ	ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
102	壺	口径(36.4) 残高 4.0	大きく屈曲する口縁部。口縁下に不明瞭な段をもつ。	ヘラミガキ→ナデ	ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
103	壺	口径(38.0) 残高 3.4	大きく屈曲する口縁部。不明瞭な段をもつ。指頭痕顕著。	ナデ	ミガキかナデ	褐色 黒褐色	石・長(1~2) 金 ◎		14
104	壺	残高 7.3	緩やかに外反する口縁で不明瞭な段をもつ。端面「コ」字状を呈する。	磨滅のため不明	ヘラミガキ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		14
105	壺	残高 4.8	緩やかに外反する口縁で不明瞭な段をもつ。端面「コ」字状を呈する。	ミガキかナデ	ミガキかナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ◎		14
106	壺	残高 8.6	端面「コ」字状。指頭痕顕著。沈線化した不明瞭な段をもつ。	ヘラミガキ（横方向）	ヘラミガキ（磨滅）	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		14
107	壺	残高 4.1	端面「コ」字状を呈し、1条の沈線文を施す。小片。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄褐色 灰褐色	石・長(1~3) ◎		14
108	壺	残高 3.9	口唇下端に刻目を施す。口縁下に不明瞭な段をもつ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		14
109	壺	残高 5.3	緩やかに外反する口縁部。口縁下に不明瞭な段をもつ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
110	壺	残高 3.8	緩やかに外反する口縁部。口縁下に不明瞭な段をもつ。小片。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄褐色 黄褐色	石(1) ◎		
111	壺	残高 3.0	緩やかに外反する口縁部。沈線化した不明瞭な段をもつ。小片。	ヘラミガキ（横方向）	ミガキかナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ◎		
112	壺	残高 3.9	不明瞭な段。端部丸く治める。小片。	ミガキかナデ	ミガキかナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		
113	壺	残高 4.8	大きく屈曲する口縁部。不明瞭な段をもつ。端面「コ」字状を呈する。	ヘラミガキ（横方向）	ヘラミガキ（横方向）	茶褐色 褐色	石・長(1) 金 ◎		15
114	壺	残高 4.1	大きく屈曲する口縁部。端部丸く治める。	ヘラミガキ（横方向）	ヘラミガキ（横方向）	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ◎		15

第Ⅲ層下層部 出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
115	壺	残高 3.5	大きく屈曲する口縁部。端面「コ」字状を呈する。	ミガキかナデ	ヘラミガキ（横方向）	灰褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		15
116	壺	残高 3.0	器壁厚い。口縁端部丸く治める。不明瞭な段をもつ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明）	褐色 灰褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
117	壺	残高 3.4	大きく屈曲する口縁部。段の有無は不明。	磨滅のため不明	ヘラミガキ（横方向）	黄褐色 黄褐色	石(1) ◎		
118	壺	残高 3.4	大きく屈曲する口縁部。小片。	ヘラミガキ（横方向）	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		
119	壺	残高 3.2	大きく屈曲する口縁部。端部丸く治める。	ナデ	ナデ	黄褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
120	壺	残高 2.9	小片。端部丸く治める。	ミガキかナデ	ヘラミガキ（横方向）	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎		
121	壺	口径(12.6) 残高 3.0	大きく屈曲する口縁部。中型品。	ヘラミガキ（横方向）	ヘラミガキ（横方向）	褐色 褐色	石・長(1~2) 金 ◎		15
122	壺	残高 3.4	大きく屈曲する口縁部。凸帯を巡らせ刻目を施す。端面「コ」字状。	磨滅のため不明	ヘラミガキ（横方向）	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎		15
123	壺	残高 1.5	端面「コ」字状を呈する。沈線化した段をもつ。小片。	ナデ	ミガキかナデ	黒色 黒色	石・長(1) ◎		15
124	壺	残高 5.3	口縁と頸部の境に1条の浅い沈線文を施す。	ヘラミガキ（横方向）	ヘラミガキ（横方向）	褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		16
125	壺	残高 4.1	口縁と頸部の境に1条の沈線文を施す。	ナデ	ナデ	黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~2) ◎		
126	壺	残高 3.6	小片。 3条以上の沈線文。	ヘラミガキ（横方向）	剝離のため不明	褐色 褐色	石・長(1~2) ◎		16
127	壺	残高 7.0	肩部片。 1条の沈線文を施す。	丁寧なヘラミガキ（横方向）	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		16
128	壺	残高 7.0	方形に沈線で区切った後、5～6条の沈線で木葉文を施す。	ミガキ→施文	ナデ	黒・茶褐色 黄褐色	石・長(1~3) 安山岩 ◎		16
129	壺	残高 7.0	横沈線文下に1条の沈線文で木葉文を施す。	磨滅のため不明	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		16
130	壺	残高 3.2	横沈線文 1条。 重弧文 3条。	ミガキかナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~2) ◎		16
131	壺	残高 4.5	弧文。 浅く細い沈線文4条。	ミガキ	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~2) 金 ◎		

第Ⅲ層下層部 出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
132	壺	残高 3.2	小片。弧文か？	磨滅のため不明	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
133	壺	残高 5.0	胴部片。細く浅い沈線で山形文。	磨滅のため不明	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
134	壺	残高 3.5	小片。ヘラミガキ後、山形文を施す。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 褐色	砂粒 金 ◎		
135	壺	残高 3.5	小片。横沈線文2条以上。山形文4条以上。	磨滅のため不明	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~3) 金 ◎		16
136	壺	残高 5.3	胴部片。2本1組の山形文。削り出し状の段。1条の沈線文。	ヘラミガキ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		16
137	壺	残高 9.0	大きく張る胴部片。5～6条1組の山形文を施す。	ヘラミガキ（横方向）	ナデ	褐色 褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
138	壺	残高 6.0	大きく張る胴部片。沈線文間に斜線文を施す。	磨滅のため不明	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		16
139	壺	残高 2.5	小片。沈線文間に刺突文を施す。	小片にて不明	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ◎		16
140	壺	残高 3.4	胴部片。小片。3㎜大の竹管文と沈線文を施す。	ヘラミガキ（横方向）	ナデ	灰黄褐色 褐色	石・長(1) ◎		16
141	壺	残高 5.3	3条以上の横沈線文間に4条以上の縦沈線文を施す。	ヘラミガキ（横方向）	ナデ	褐色 褐色	石・長(1) ◎		16
142	壺	残高 5.0	頸部片。2条以上の横沈線文下に6条の縦沈線文を施す。	ミガキかナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ◎		16
143	壺	残高 4.5	肩部片。 3条以上の横沈線文下に2条以上の縦沈線文。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	褐色 褐色	石・長(1~2) ◎		
144	壺	底径(12.5) 残高 5.5	平底で大型の底部。	ナデ	ナデ	黄褐色 暗茶褐色	石・長(1~3) 金 ◎		~~18~~
145	壺	底径 9.7 残高 4.4	わずかに上げ底を呈する。	ヘラミガキ	板ナデ	褐色 褐色	石・長(1~3) 金 ◎		18
146	壺	底径 (7.8) 残高 4.9	平底。	ヘラミガキ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		18
147	壺	底径 7.4 残高 4.9	わずかに上げ底を呈する。	磨滅のため不明	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) 金 ◎		18
148	壺	底径 (6.0) 残高 2.5	わずかに上げ底を呈する。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 黒灰色	石・長(1~3) ◎		

第Ⅲ層下層部 出土遺物観察表 土製品

(6)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
149	高坏	口径(22.6) 残高 4.2	口縁部わずかに肥厚し段をもつ。端面「コ」字状を呈する。	磨滅のため不明	ミガキかナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ◎		17
150	高坏	口径(25.4) 残高 4.3	口縁部わずかに肥厚し段をもつ。端面「コ」字状を呈する。	剝離のため不明	ヘラミガキ（横方向）	黄褐色 茶褐色	石・長(1~3) 金 ◎		17
151	高坏	口径(18.2) 残高 2.6	口縁下に屈曲部をもつ。鉢の可能性もある。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄褐色 褐色	砂粒 ◎		17
152	高坏	残高 2.3	小片。口縁部肥厚し段をもつ。端部丸く治める。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐色 褐色	石・長(1) 金 ◎		17
153	高坏	底径(15.4) 残高 2.2	「八」字状に立ち上がる裾部。	剝離のため不明	ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1) ◎		17
154	鉢	口径(20.6) 残高 4.8	内湾ぎみに立ち上がる直口口縁。端面「コ」字状を呈する。	ヘラミガキ（横方向）	(口) ヘラミガキ(横方向) (胴) ヘラミガキ(縦方向)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ◎		17
155	鉢	残高 5.9	やや内湾ぎみに立ち上がる直口口縁。端面「コ」字状を呈する。	ナデ	ミガキかナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ◎		
156	鉢	口径(18.6) 残高 4.3	内湾ぎみに立ち上がる直口口縁。端面「コ」字状を呈する。	(口) ハケ→ヨコナデ (胴) ハケ(8本/1cm)	(口) ヨコナデ (胴) ナデ	黄褐色 黒色	石・長(1) 金 ◎		
157	鉢	残高 3.8	やや内湾ぎみに立ち上がる直口口縁。端面「コ」字状を呈する。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 黒褐色	密(石・1) ◎		
158	鉢	口径(21.0) 残高 4.8	外反しながら立ち上がる口縁。端部丸く治める。	ヘラミガキ（磨滅）	磨滅のため不明	灰褐色 黄褐色	石・長(1) 金 ◎		17
159	鉢	残高 3.6	内湾ぎみに立ち上がる口縁。端部丸く治める。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄茶褐色 黒色	石・長(1~2) 金 ◎		
160	鉢	口径(32.2) 残高 6.0	外反ぎみに立ち上がる口縁。端部先尖がり。大型品。	磨滅のため不明	(口) ヨコナデ (胴) 浅いハケ	茶褐色 茶褐色	砂粒(長2) ◎		17
161	鉢	口径(37.5) 残高 5.3	如意形。端部丸く口縁下に不明瞭な段をもつ。 大型品。	ヘラミガキ（横方向）	ヘラミガキ（横方向）	茶褐色 黄褐色	石・長(1) 金 ◎		17
162	鉢	残高 3.0	口縁下で屈曲する。 端部丸く治める。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎		17
163	ミニチュア	底径 3.6 残高 1.5	わずかに上げ底を呈する。直立ぎみに立ち上がる。	工具痕看取	ナデ	黒褐色 黒褐色	石・長(1) 金 ◎		17

第Ⅲ章

辻町（ツジマチ）遺跡

第Ⅲ章　辻町遺跡

1　調査の経過

(1)　調査に至る経緯

1990年（平成２）年５月、株式会社清家商事より、松山市辻町39－１の開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『34　朝美遺物包含地』内にある。

文化教育課は、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、同年７月２日から５日までの間、試掘調査を実施した。その結果、土層は安定した推積状況を示しており、遺構面を４面と遺物包含層を３層検出した。遺物は青磁、白磁、土師器、須恵器が出土し、古墳時代～中世の遺跡があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・株式会社清家商事の二者は遺跡の取扱いについて協議を行い、開発によって失われる遺跡について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は古墳時代から中世における当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課・松山市立埋蔵文化財センターが主体となり、株式会社清家商事の協力のもと、1991年４月16日に開始した。

(2)　立　地

本調査地は、ＪＲ松山駅より西へ約400ｍ、松山平野西部の標高14.8ｍに立地する。本調査地周辺には、古墳群や集落址などが確認されている大峰ヶ台丘陵、一級河川石手川と源流を共にし、松山平野を東西に流れる宮前川がある。大峰ヶ台丘陵は標高125ｍで、山頂部には弥生時代中期中葉の集落址があり（大峰ヶ台遺跡）、北西部に朝日谷古墳、南西部に客谷古墳群、北東裾部には澤遺跡、南東裾部に辻遺跡など数多くの遺跡が確認されている〔松山市 1989他〕。宮前川は、この大峰ヶ台丘陵の東裾部近くを北から南、そして西へと流れる。本調査地は、宮前川を挟み、大峰ヶ台丘陵の南西約800ｍ、宮前川からは南東約300ｍに位置している。

〔参考文献〕

松山市教育委員会　1989　「大峰ヶ台遺跡」「客谷Ｂ地区古墳群」「澤遺跡」「辻遺跡」
『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
松山市教育委員会　1991　「朝日谷１号墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』

(3) 調査組織

調 査 地　松山市辻町遺跡39－1

遺 跡 名　辻町遺跡

調査期間　野外調査　1991（平成3）年4月16日～6月15日

室内整理　1991（平成3）年6月18日～7月31日

調査面積　対象面積　654.74㎡　　実施面積　246.5㎡

調査委託　株式会社　清家商事　代表 清家健介

調査担当　調 査 員　梅木謙一

調査員補　真木　潔

作 業 員　川井　　正、栗林　和孝、是沢　嘉昭、田中　茂樹、田丸　竜馬、細田　尚秀、松岡　欣弘、松本　正義、三江　元則、宮田　昭吾、大西　朋子、関　　正子、多知川富美子、萩野ちよみ、水口あをい、矢野　久子、吉井　信枝

(4) 経　過

調査対象面積は654.74㎡である。調査地は隣接する水田より約1ｍの造成がなされており、安全面及び廃土置場を考慮して実施面積を設定し調査を行った。以下、調査工程を略述する。

平成3年　4月16日　重機による表土剝ぎ取り作業を開始した。調査地は水田を造成しており、かなりの廃土が予想されるため、客土及び旧水田耕作土は調査区外への搬出を行った（4月16～17日の間）。

19日　作業員を増員し、本格的な調査を開始する。

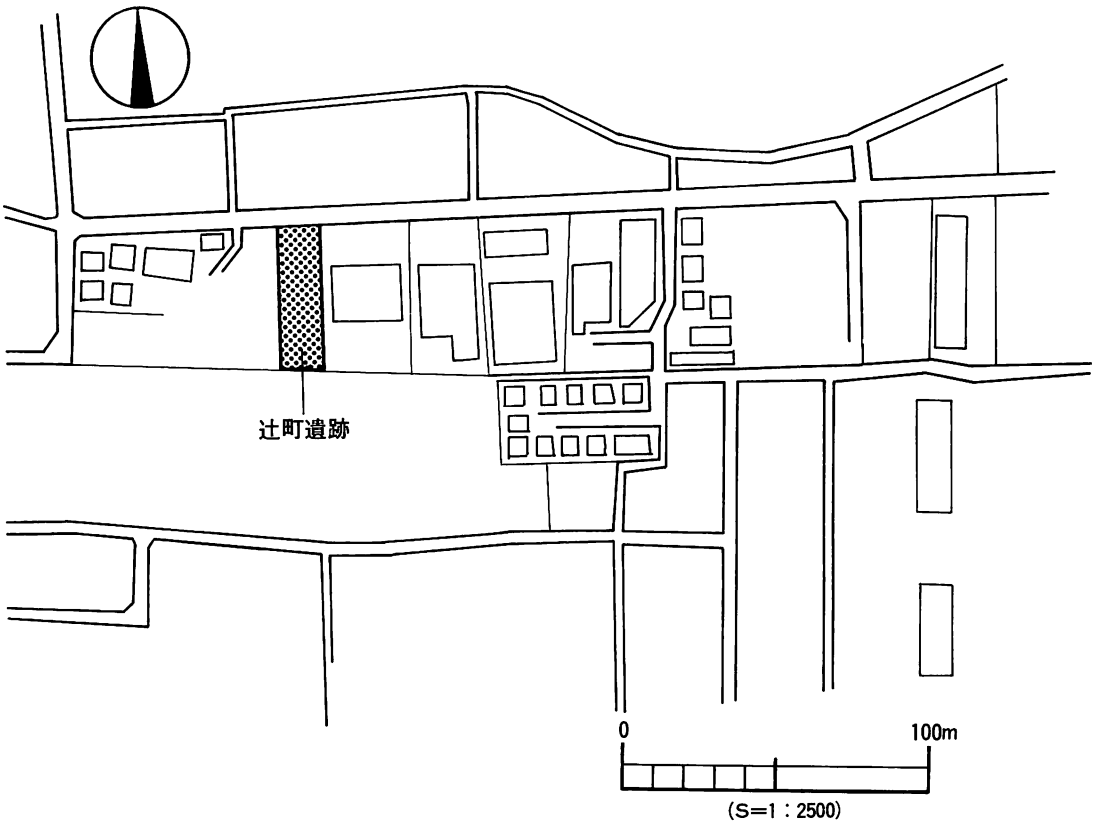
30日　第Ⅴ層を完掘し、第Ⅶ層の調査を行う。遺構の検出は、遺構面と遺構埋土の土色がはっきりと分かれているため容易に行えた。

5月 …… 第Ⅶ層を完掘し、第Ⅷ層の調査を行う。第Ⅷ層中より土器の一群を検出（ＳＸ1）、関連する遺構を検出すべく、遺構検出作業にはいる。2回に渡り愛媛大学法文学部教授下條信行先生に調査指導を乞う。

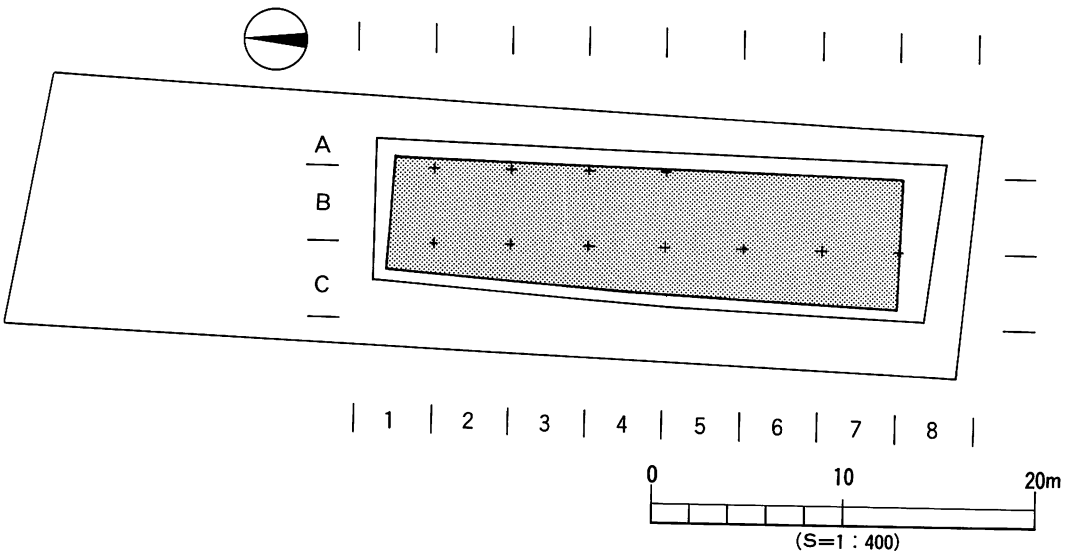
6月 …… 第Ⅷ層を完掘し、第Ⅸ層の調査を行う。15日、野外調査終了。

18日　松山市立埋蔵文化財センターにて、室内調査を実施する（～7月31日）。

平成4年2月～3月　報告書整理作業を行う。



第28図　　調査区位置図



第29図　調査地区割図

2 層 位（第30図、図版20－1）

本調査の基本層位は、第Ⅰ層造成土（40～60cm）、第Ⅱ層旧耕作土（10～25cm）、第Ⅲ層暗赤褐色土（5～10cm）、第Ⅳ層明黄灰色土（10～15cm）、第Ⅴ層灰色砂質土（10～20cm）、第Ⅵ層黄色土（2～5cm）、第Ⅶ層黄灰色土（10～20cm）、第Ⅷ層暗茶褐色土（40～45cm）であり、最下層は第Ⅸ層暗灰色粘質土である。

第Ⅰ層－客土による造成土である。

第Ⅱ層－近現代の水田耕作土である。

第Ⅲ層－水田など、耕作土下に人為的に張られる床土と呼ばれるものである。

第Ⅳ層－第Ⅴ層の漸次層である。

第Ⅴ層－遺物包含層である。調査地全体に推積しており、青磁、白磁、瓦器、土師器の破片が混在して包含される。

第Ⅵ層－2～5cmと薄く、調査地南に推積が限られる。

第Ⅶ層－遺物包含層である。調査地全体に推積しており、土師器、須恵器が出土し、主に土師器片が多く包含される。上面で遺構を検出している。

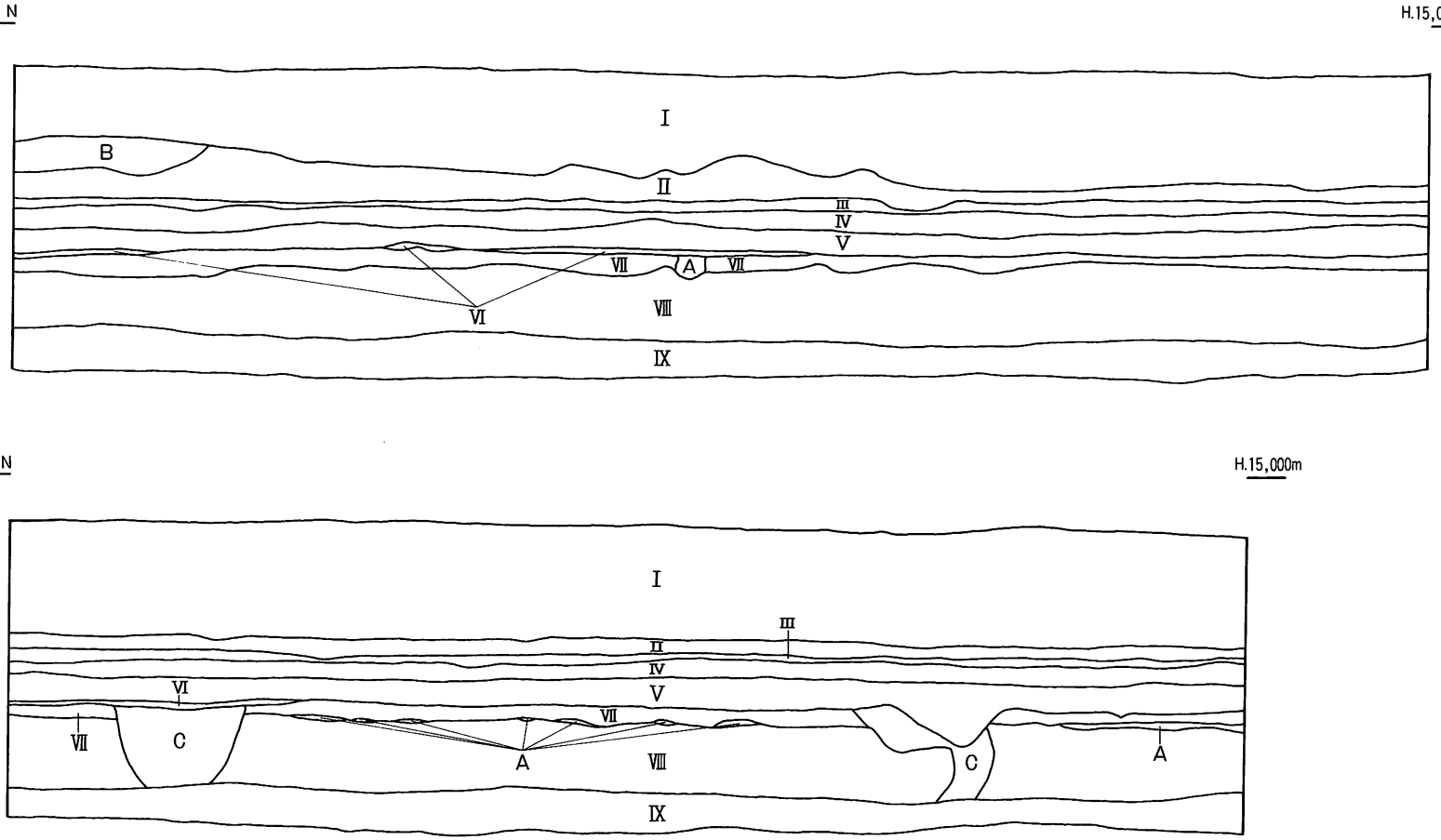
第Ⅷ層－遺物包含層である。40～45cmと推積は厚く、調査地全体に推積する。遺物は土師器、須恵器が出土し、調査地中央の層中位部（上面より約20cm下）より土器の一群が検出される（ＳＸ1）。本層遺物出土状況は上部の約20cmの間に限られ、下部からの遺物の出土はなかった。遺構は上面及び層中位部で検出する。

第Ⅸ層－調査地北から南にかけて灰色が強くなり、土色の変化がみられる。上面にて遺構を検出する。

第Ａ層－第Ⅶ層、Ⅷ層間に推積し、調査地全体においてまばらに見られる。上面にて遺構を検出する。

出土遺物より判断すると、第Ⅴ層は中世以後に、第Ⅵ層は古墳時代～中世、第Ⅶ、Ⅷ層は古墳時代に推積したものと判断される。また第Ⅶ層、第Ⅷ層の出土遺物には、時期差がさほど認められず、よって2層は短期間での推積土壌であると考える。

第Ⅷ層は、遺物の出土状況より中位部で生活面が少なくとも1面存在すると考えられるが、色調等に変化は認められず分層するに至らなかった。



Ⅰ 造成土　Ⅱ 旧耕作土　Ⅲ 暗赤褐色土(床土)　Ⅳ 明黄灰色土
Ⅴ 灰色砂質土　Ⅵ 黄色土　Ⅶ 黄灰色土　Ⅷ 暗茶褐色土
Ⅸ 暗灰色粘質土　A 黄白色砂質土　B 撹乱　C 遺構

第30図　西壁土層図

3 調査の概要（遺構と遺物）

第Ⅴ層

第Ⅴ層では、遺構は未検出であった。出土遺物は、土師器、瓦器、須恵器、白磁、青磁の破片である（第31図、図版23－１）。

土師器杯（１～４） 口径11～13.8cm、底径6.2～８cm、器高2.7～3.7cm、内外面共に回転ナデ調整がみられ、底面を回転糸切りするものである。２・４は、口縁端部が外反する。

土師器埦（５） 高台径5.4cm、高台高1.1cmと、土師器埦の高台としてはやや高めで、取り付け後のナデ調整がみられる。

土師器皿（６・７） ６は、口径7.4cm、底径５cm、器高1.2cm、内外面共に回転ナデ調整で、底面は回転糸切り痕が残る。口縁部は丸みを帯びている。

瓦器（８～10） ８は、口径14cm、内外面共に回転ナデ調整がみられ、胎土は白黄色である。形態からみて瓦器埦の焼成前であると考えられる。９は、瓦器埦で、口径16cm、内外面共に回転ナデ調整である。外面は灰色で鈍い輝きを見せる。10は、瓦器埦底部で、高台径4.6cm、高台高0.2cm、貼り付けによる高台は断面形が四角形を呈し、内外面共にナデ調整されている。見込みには２本の暗文が平行に入る。

須恵器（11・12） 11は、東播系須恵器鉢で、口径25cmと広口のスリ鉢形である。12は、高坏の脚部である。スカシは三方とみられ、回転カキ目調整がある。

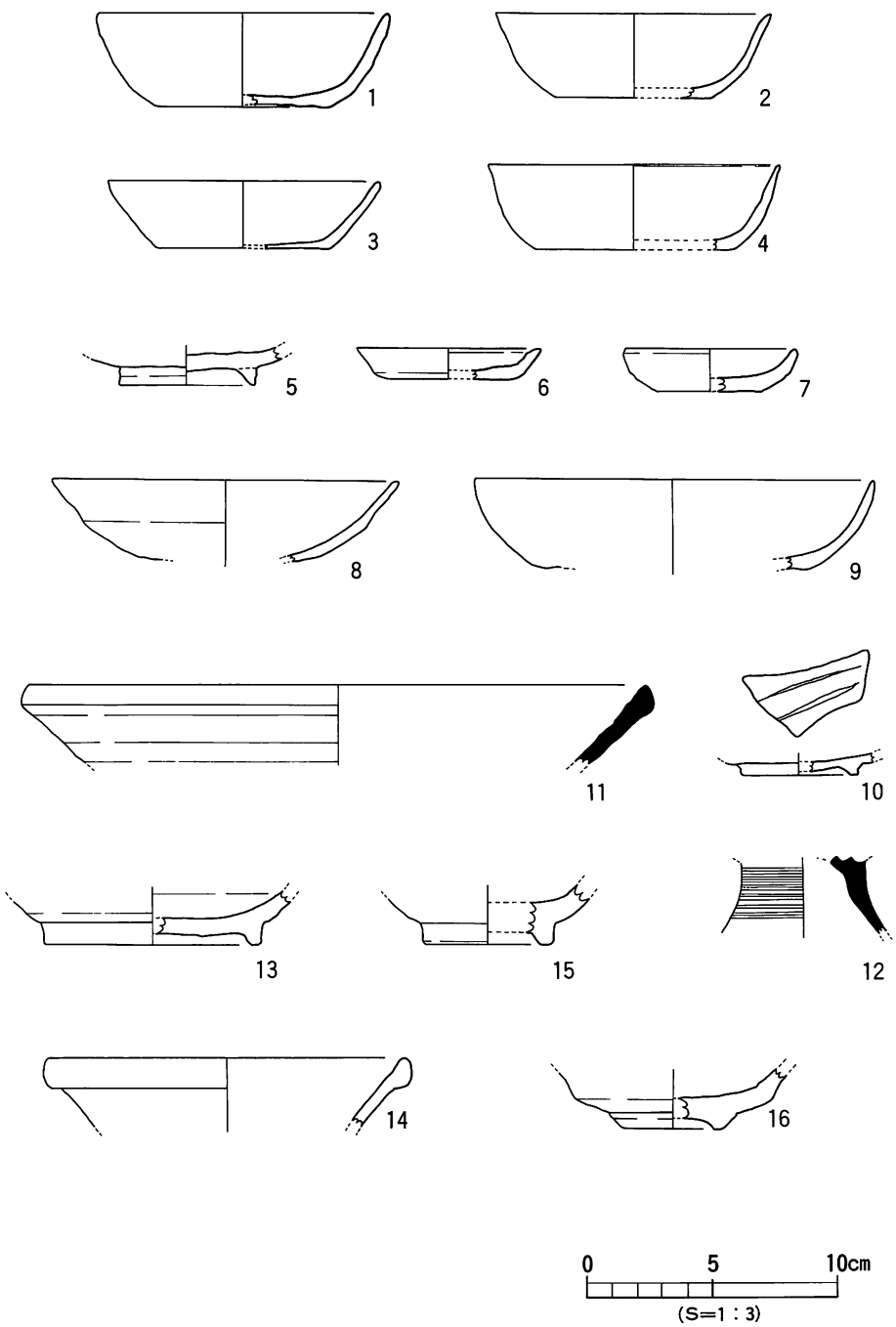
白磁（13・14） 13は、高台径8.8cm、高台高0.4cm、高台は削り出しによるものである。外面は回転ヘラ削り、内面は底部まで釉が施され、底部よりやや上に沈線の段をもつ。白磁碗Ⅳ類に比定できよう(1)。14は、口径14.4cm、内外面共に釉が施されているが、外面の下部には施されていない。口縁部は玉縁状で、玉縁下部には断面形でＶ字のシャープな凹線がある。白磁碗Ⅳ類に比定できる(1)。

磁器（~~15~~ 16） 高台径４cm、高台高0.4cm、高台は削り出しによるものである。外面はヘラ削りによる調整で、内面は灰白色の釉が施され、胎土目痕を残す。

青磁（~~16~~ 15） 高台径5.2cm、高台高0.5cm、龍泉窯系青磁碗底部である。高台は貼り付けによるものである。胎土は青灰色をしており、釉は厚く塗り、高台外面にまで及ぶ。

〔参考文献〕

(1) 森田 晩・横田賢次郎 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』



第31図　第Ⅴ層出土遺物実測図

第Ⅶ層（第32図、図版20－２）

第Ⅶ層では、上面より遺構を検出している。検出遺構は柱穴15基、性格不明遺構４基である。検出した遺構の柱穴、性格不明遺構の埋土は暗灰色土である。遺構内からは少数の土師器片が出土しているが、器種、時期等を明確に判断できるものではない。柱穴は平面形が不定形で深さが20cm前後で、断面形はスリ鉢状を呈するものがほとんどである。第Ⅶ層からの出土遺物は土師器、須恵器で主に土師器片が多く出土している。

出土遺物（第33図、図版23－２）

土師器（17）　甕形土器である。口径14cm、口縁部断面形が、緩やかなＳ字状をなし、わずかに輪積みの痕が残る。外面の調整は、口縁部が横ナデ、体部は刷毛目を残す。内面は口縁部が横ナデ、体部は磨滅により調整は不明であるが、指頭痕が看取される。

須恵器（18）　壺の口縁部である。口径16cmと少し大きく、外反したのち、段をなして上外方へとのびる。

第Ⅷ層（第34・35図、図版21）

第Ⅷ層は、上面と層中位部に２面より遺構を検出している。

上面での検出遺構は、溝状遺構１条（布堀り状）、柱穴３基である。いずれの遺構も埋土は黄灰褐色土の単一層で、遺物の出土はなかった。

溝状遺構は、溝底に溝に対して直角に楕円のくぼみが等間隔（約30cm）で並列する。深さは約20cmと浅い。

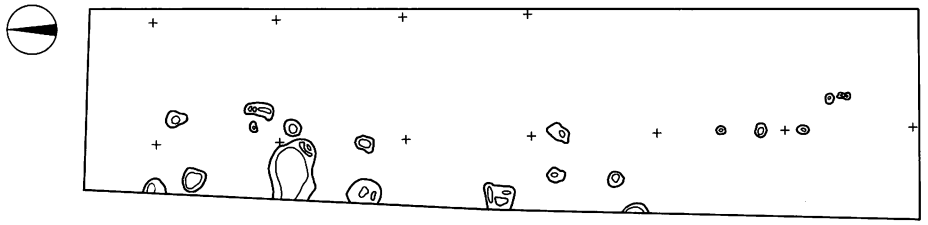
層中位部からの検出遺構は、溝状遺構１条、柱穴６基である。

この層中位部は第Ⅷ層上面より約20cm下で、上面の遺構検出とは色調等には変化が認められない。

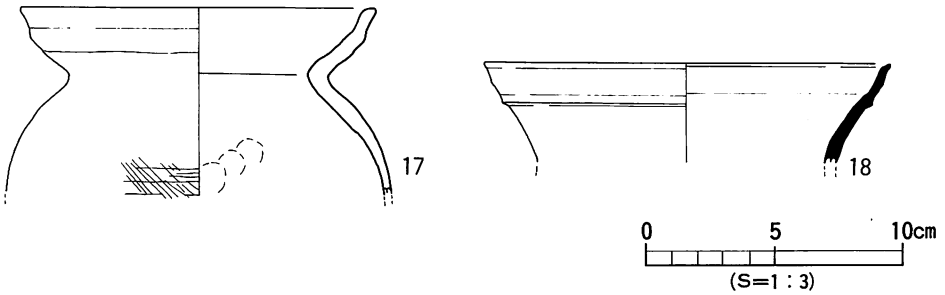
第Ⅷ層は、試掘調査の結果から豊富に遺物を包合していることが判明しており、約１cmずつの掘り下げを行った。その結果、層中位部より土器の一群（以下この土器の一群をＳＸ１とする）を検出した。また、上面からは検出できなかった新たな遺構をＳＸ１と同レベルにて検出した。よって、このレベルでの文化面の存在を確認するに至った。

ＳＸ１は、土師器の高坏形土器、壺、滑石製の臼玉等が出土している。ＳＸ１の遺物は完形品が多数をしめ、遺物の散らばりはほとんどなく、原位置を保ったままでの出土と考えられる。この出土状況からは、遺物の配列らしきものがうかがえるが、ＳＸ１に関連すると思われる人為的な掘り込み等は検出されなかった。

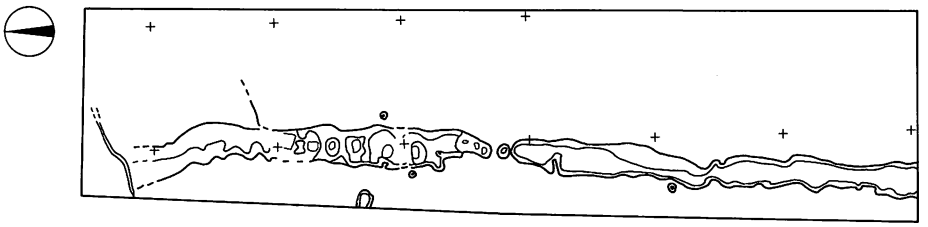
第Ⅷ層からの出土遺物は土師器、須恵器である。遺物はすべて上面から層中位部までの約20cmの間で出土した。層中位部より下からの遺物の出土はなかった。



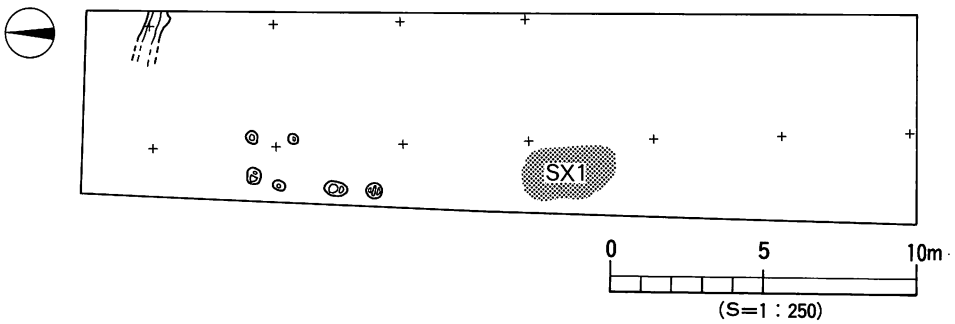
第32図　第Ⅷ層遺構配置図



第33図　第Ⅷ層出土遺物実測図



第34図　第Ⅷ層上面遺構配置図



第35図　第Ⅷ層中位部遺構配置図

土師器（第36図、図版24）

甕形土器（19～22）　19～21は、内湾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端面は傾斜し、ナデによる面をもつ。19は口縁19㎝である。体部外面はハケ目調整がほどこされ、わずかに指頭痕が残る。内面は磨滅により調整は不明であるが、指頭痕が看取される。20は口径23㎝で、21は口径18㎝である。21は内外面共に調整は磨滅により不明である。22は口径14㎝で、口縁部は緩やかに外反し、端部は先細りする。外面は口縁部、体部共にハケ調整が施され、わずかに指頭痕が残る。内面は、口縁部がナデ調整、体部はヘラ削り後にナデ調整が施されている。

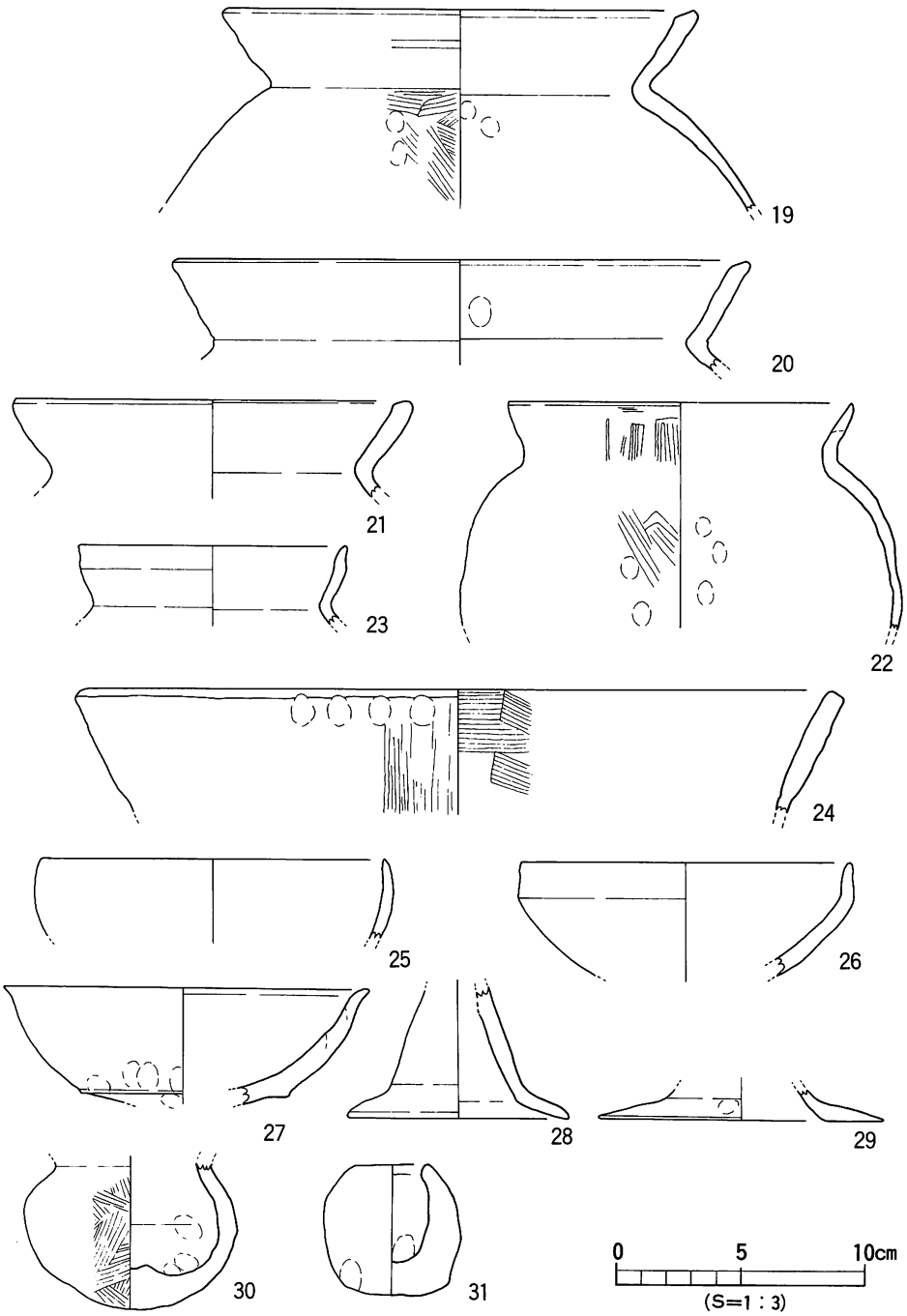
壺形土器（23・30）　23は口径11㎝、口縁部は外反したのち、直立して立ち上がる。内外面共に磨滅により調整は不明である。30は小型の丸底壺形土器の体部である。全体に器壁が厚く、内面底部は指圧痕が顕著に残り、輪積みの痕がはっきりとうかがえる。外面はハケ目調整がほどこされる。

甑形土器（24）　口径30㎝、口縁端部「コ」の字状で、ナデ調整が施される。内外面共に刷毛目が残る。

埦形土器（25・26）　25は口径14㎝で、体部は内湾して立ち上がる。口縁端部は丸く尖る。内外面共にナデ調整である。26は口径13.4㎝で、体部は底部から大きく外反したのち、口縁部は直立して立ち上がる。内外面共にナデ調整である。

高坏形土器（27～29）　27は坏部である。口径は15㎝で、口縁部は鈍い稜線をもって外反する。外面はナデ調整で、黒斑がある。内面はナデ調整である。28は脚部片である。底径は9.2㎝で、柱部は円錐状にひろがり、裾部は内湾してひらく。調整は内外面共に磨滅により不明である。29は裾部片である。28とは違い、裾部が水平にひろがる。内外面共にナデ調整である。

ミニチュア土器（31）　口径３㎝、底径2.2㎝、器高5.3㎝を測る。器壁は厚く、底部から口縁端部にかけて薄くなる。器形は全体的に丸い。口縁部は内湾し、内傾する。内外面共に指頭痕があり、手ずくねによるものである。



第36図　　第Ⅷ層出土土師器実測図

須恵器（第37・38図、図版24・25）

坏蓋（32～47）

出土坏蓋には破片が多く、ちょうど高坏の蓋であれば、つまみの部分にあたる天井部のないものがあるため、高坏の蓋として使用された可能性もあるが、あえて坏蓋として扱うことにする。

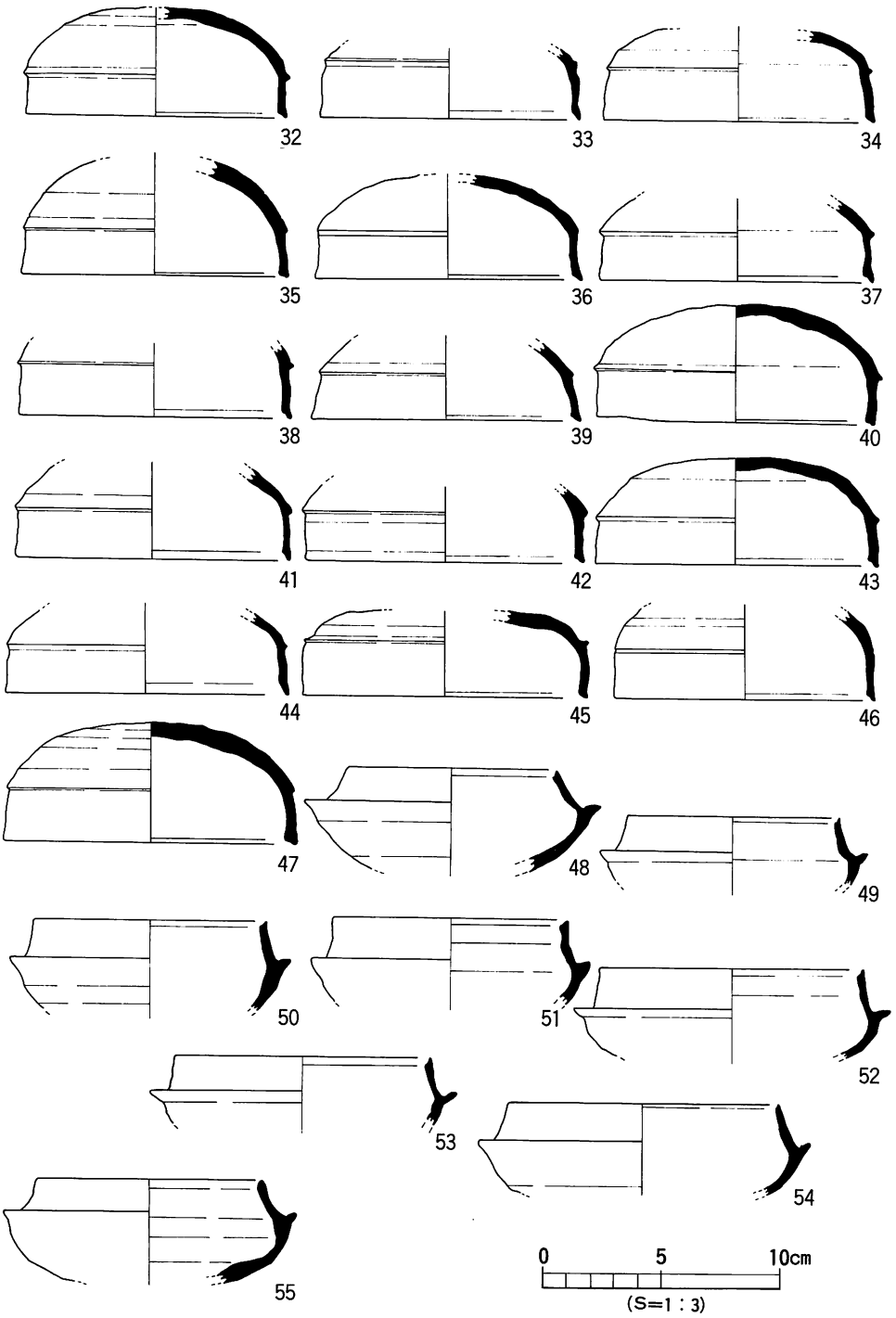
径により分類すると、A類11.0～11.2cm（32・33・46）、B類11.4～11.6cm（34～39）、C類11.8～12.2cm（40～45）、D類12.5cm（47）に分類できる。

A類（32・33・46）　32は天井部が丸みを帯び、外方に短く伸びる稜を境に口縁部は直下に下る。口縁端部はわずかに凹面をなして内傾する。調整は、天井部外面の半分を回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。33は32ほど明確な稜でなく、短く丸い。口縁端部はシャープに尖り、わずかに凹面をなして内傾する口縁端部を持つ。調整は、内外面共に回転ナデ調整である。

B類（34～39）　天井部は丸みを帯び、特に35は丸く器高が高い。稜は34・37・38が短く外方にのび、35・39は天井部と口縁部との段差による稜をもつ。36は少し異なり、沈線によって稜を浮かび上がらせている。口縁部は稜を境に直下に下るもので、39のみわずかに外反する。口縁端部はわずかな凹面をなして内傾する。37は内傾する明瞭な段を有する。調整は、35は天井部外面が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整、36は天井部外面の3／4が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。34・37・38・39は口縁部の破片で、回転ナデ調整を内外面共に見るのみである。

C類（40～45）　天井部は丸みを帯び、45のみが扁平で他の天井部と異なる器形をもつ。稜は40・43が短く外方に伸びる稜で、41・42・44は段による稜である。45は40・43とおなじく外方に伸びる稜をもつが、40・43のそれとは少し異なり、シャープで短く上外方に伸びる。口縁部は稜を境に直下に下り、端部はわずかな凹面をなして内傾する。40は内傾する明瞭な段を有する。調整は、40は天井部外面が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整、43は天井部外面の3／4が回転ヘラ削り、その他の内外面が回転ナデ調整、45は天井部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。41・42・44は回転ナデ調整を内外面共に見るのみである。

D類（47）　口径12.5cmとやや大型で、器形は類似している。天井部は丸みを帯びて下がり、天井部と口縁部の境界は段による稜をもつ。口縁部は直下に下り、端部はわずかな凹面をなして内傾する。調整は、天井部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整をみる。



第37図　　第Ⅷ層出土須恵器実測図(1)

坏身（48～55）

口径により分類すると、A類9.0cm（48・49）、B類10.0～10.4cm（50・51）、C類11.0～11.6cm（52～55）に分類できる。

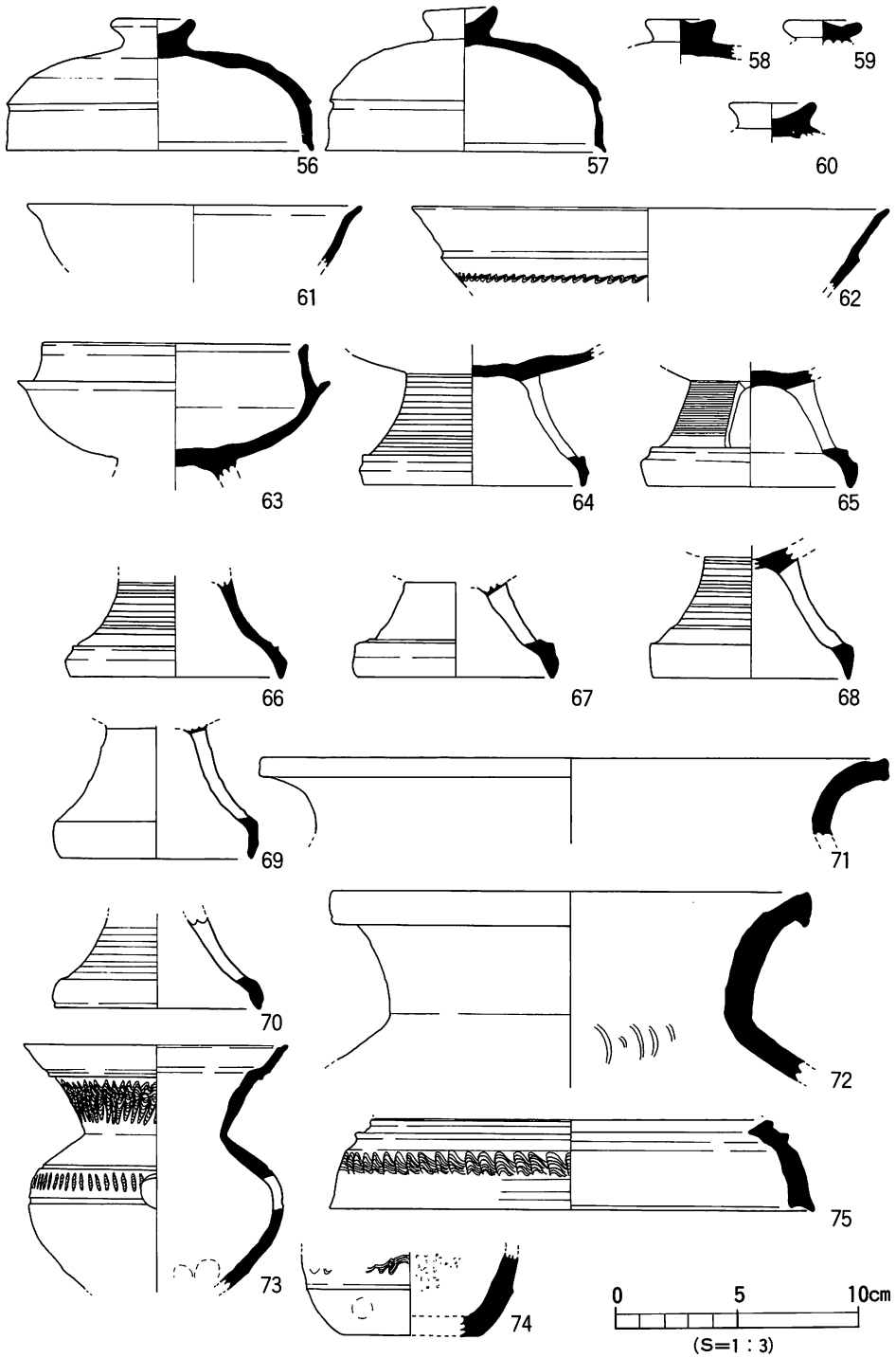
A類（48・49）　48の底部は丸く浅い。たちあがりは内傾し、端部は凹面をなして内傾する。受部は長くシャープで受部端に沈線が巡る。調整は底部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。49はたちあがりが48ほどではないが内傾し、端部は内傾する明瞭な段を有する。受部はやや外方に伸び、シャープさに欠ける。調整は内外面共に回転ナデ調整である。

B類（50・51）　50はたちあがりはやや内傾し、端部はわずかな凹面をなして内傾する。受部は外方に伸び、シャープさに欠け、受部端に沈線が巡る。調整は内外面共に回転ナデ調整である。51はたちあがりは内傾した後、直立し、端部は肥厚してわずかな凹面をなして内傾する。受部はぼったりとしてやや上外方に伸びる。調整は内外面共に回転ナデ調整である。

C類（32～55）　32はたちあがりはやや内傾し、端部はわずかに凹面をなして内傾する。受部はシャープで長く、外方に伸びる。底部はやや扁平な感がある。調整は底部外面が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。53はたちあがりはやや内傾し、端部はわずかな凹面をなして内傾する。受部は薄く上外方に伸びる。調整は内外面共に回転ナデ調整で、底部に自然釉がかかる。54はたちあがりは内傾し、端部は薄く、内傾する。受部は上外方に伸び、受部端に沈線が巡る。調整は底部外面が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。55は底部は丸く深めである。たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部は短く丸く、上外方に伸びる。調整は底部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。

高坏（56～70）

56・57は高坏の蓋である。56は天井部がやや丸みを帯び、稜は突起せず、沈線により浮かび上がらせた感がある。口縁部は直下に下り、端部は内傾する明瞭な段を有する。つまみは丸く中央が凹む。調整は、天井部外面が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。57は天井部が丸く、沈線による稜をもつ。口縁部は直下に下り、端部は緩やかな凹面をもって内傾する。つまみは丸く中央が凹む。調整は天井部外面の１／３が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。58～60は高坏の蓋のつまみである。58・59は56・57のつまみとは違い、中央部が突出する。60は56・57のつまみと同じく、中央が丸く凹む。61・62は無蓋高坏の口縁部である。61は口径14cmと小型で、口縁部は「く」の字形に外反し、端部は丸い。調整は内外面共に回転ナデ調整である。62は口径20cmと大型で、口縁部は広く外反し、端部は丸い。外面の中位部に段をもち、その段下に波状文を施す。調整は、内外面共に回転ナデ調整である。63は有蓋高坏の坏部である。底部は丸く、たちあがりは内傾し、端部は細く内傾する。受部は上外方に伸び、受部端に沈線が巡る。脚部は坏部の調整後取り付けられたことがうかがえる。調整は底部外面１／３が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。64～70は高坏



第38図　　第Ⅷ層出土須恵器実測図(2)

の脚部である。いずれも「ハ」の字形にゆるやかに外反し、端部付近では64は上外方に伸びる凸線、65は短い凸線と段、66はゆるやかに膨らみ短い凸線、67は大きな段とゆるやかな凹面、68はゆるい段、69はゆるやかな膨らみ、70はわずかに段をなす。端部は丸く尖りぎみで、直下に下がる。長方形のすかしが三方に脚部付け根から端部近くまではいる。調整は、64～66、68・70の外面に回転カキ目調整がみられ、67・69は回転ナデ調整である。内面はいずれも回転ナデ調整である。

甕（71.72）

71は甕の口縁部である。口径26.2cmで、外方に大きく外反し、端部はわずかに凹面をなす。調整は磨滅により不明である。72は口縁部がゆるやかに外反し、口縁端部は下方に肥厚する。調整は内外面共にナデ調整で、頸部内面に円弧叩きがみられる。

瑞（73・74）

73は小型の瑞である。口径は11.1cmで、体部最大径を上回る。外反する口縁部はさらに段をなして端部へつづく。端部はゆるやかな凹面をなして内傾する。口縁部に波状文、体部には上下２本の沈線によって囲まれた刺突列点文を施す。74は小型の瑞の底部である。推定底径６cmの平底風の底部で、体部に凸線と波状文が施される。

器台（75）

器台の脚部である。推定脚底径20.2cmで、「ハ」の字形に膨らみながら外反し、端部は水平で凹面をもつ。波状文を施し、上部に透かしが看取される。

ＳＸ１（第39図、図版22）

ＳＸ１は、第Ⅷ層上面より約20cm下の層中位部（海抜13.5ｍ）調査地ほぼ中央部に位置し、土師器の高坏形土器、壺形土器、須恵器の高坏、蓋坏、壺、滑石製の臼玉が約３ｍ×３ｍの範囲において出土した。

出土状況は、土師器の高坏形土器、壺形土器、須恵器の高坏の完形品が約60cm四方の範囲で出土し、さらにその周辺より蓋坏等が出土した。この中心となる遺物群は、完形品で、整然と原位置を保ったままの出土と考えられる。さらに器高の高いものが中心に分布しており、遺物の配列がうかがえる。また、この中心部より臼玉が19個出土している。19個中５個は土師器の長頸壺の中から、残りの14個は長頸壺周辺からの出土であった。長頸壺は、土器群中心に向かって傾き、口縁部が体部よりずれ落ちたかたちで出土した。

第39図　　ＳＸ１　　測量図

土師器（第40図、図版26・27）

高坏形土器（76～81）

76～78は完形品であり、同器形である。76は口径16.6cm、器高12.8cm、脚部底径12.2cmである。坏部はゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。坏屈曲部は稜をもつ。脚部の柱部は円錐形で、裾部は屈折してひらく。坏底部は充塡技法がみられる。調整は、外面は磨滅により不明で、脚部内面は巻き上げ痕が残る。77は口径15cm、器高11.8cm、脚部底径10.4cmである。調整は内外面共にナデ調整が行われている。78は口径15.9cm、器高13.5cm、脚部底径11.2cmである。器形は76・77と同様であるが、器壁がやや厚い。坏底部は充塡技法がみられる。調整は、内外面共にナデ調整である。79～81は脚部片である。79は脚部底径11.2cmで、柱部は円錐形で、裾部は屈折してひらく。調整は、磨滅により不明である。80は坏底部から脚部にかけての破片である。脚部底径10cmで、坏底部には接合痕が明瞭に残り、充塡技法が見られる。調整は内外面共に磨滅により不明である。81は坏底部から脚部にかけての破片である。脚部底径10.2cmで、80と同器形、同技法であるが、80よりも脚部高が高い。

壺形土器（82・83）

82は口径10.8cm、胴部径13.2cm、器高16cmである。胴部は球形を呈し、口縁部は上外方に基部から直線的にのびる。調整は、内外面共に磨滅により不明である。83は口径8.6cm、胴部径10.1cm、器高9.9cmである。胴部は球形を呈し、底部内面が粗悪で器壁は厚い。口縁部は上外方に基部から直線的にのびる。調整は、外面及び口縁部内面はナデ調整で、胴部内面は粗悪で巻き上げ痕がのこる。

甕形土器（84・85）

84は口径11.6cmで、口縁部はゆるやかに外反する。調整は、内外面共にナデ調整である。85は口径11.9cmで、口縁部は外傾する。調整は、内外面共にナデ調整である。

埦形土器（86）

口径13.4cm、器高5.6cmである。底部は丸底で、口縁部は直立する。調整は内外面共にナデ調整である。

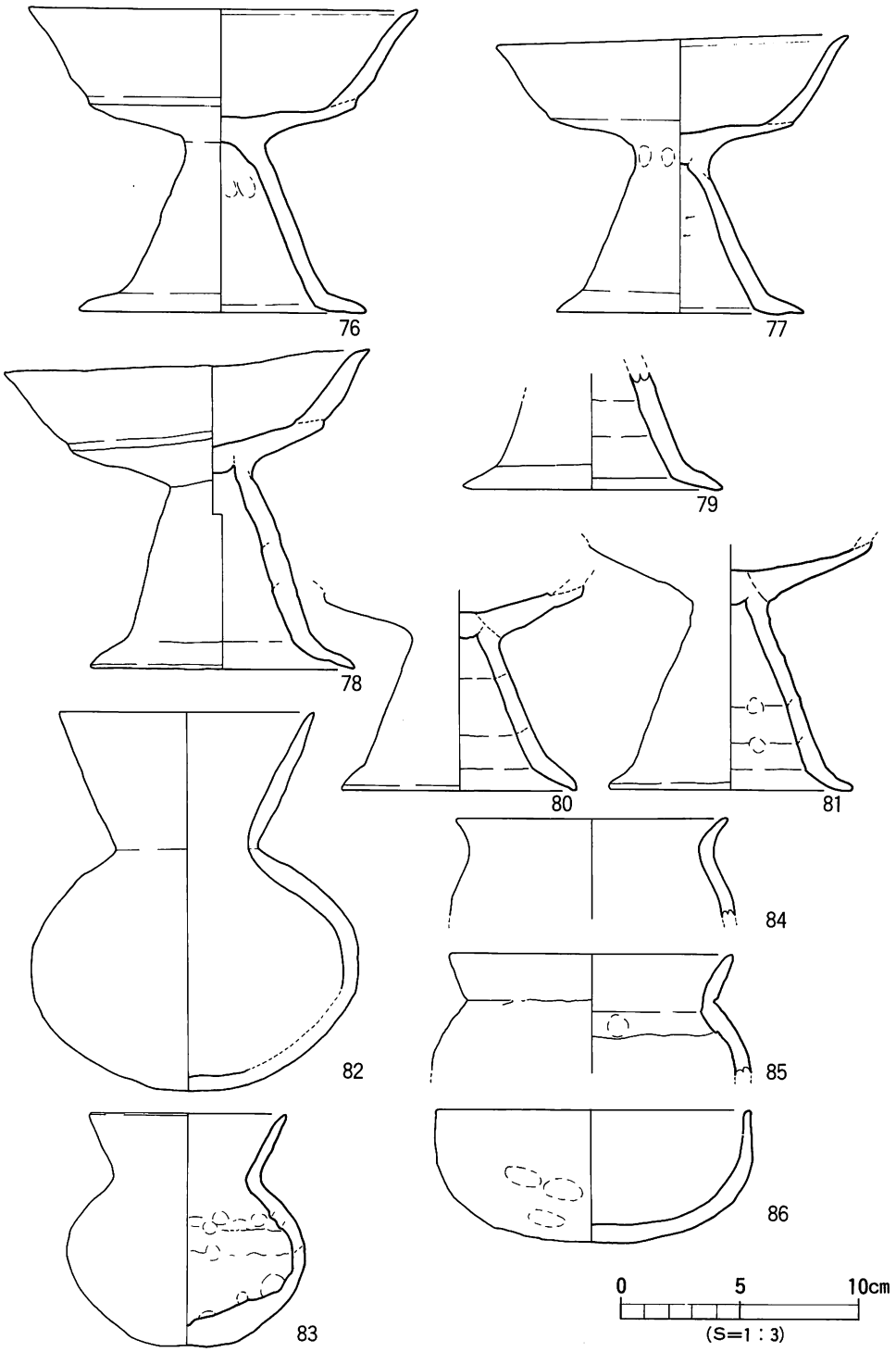
須恵器（第41図、図版27・28）

坏蓋（87）

口径12.8cmである。天井部は丸みを帯びて低い。稜は外方に伸びて短く丸い。口縁部は直下に下がり、口縁端部はわずかに凹面をなして内傾する。調整は、天井部外面半分を回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。

坏身（88～91）

88は口径11cm、器高4.95cmで、底部はやや丸みを帯びる。たちあがりは真上に伸び、端部は凹面をなして内傾する。受部は外方に伸び、受部上面は丸みを帯びる。調整は、底部外面が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。89は口径10.6cm、器高5.2cmで、底部は



第40図　　ＳＸ１　出土土師器実測図

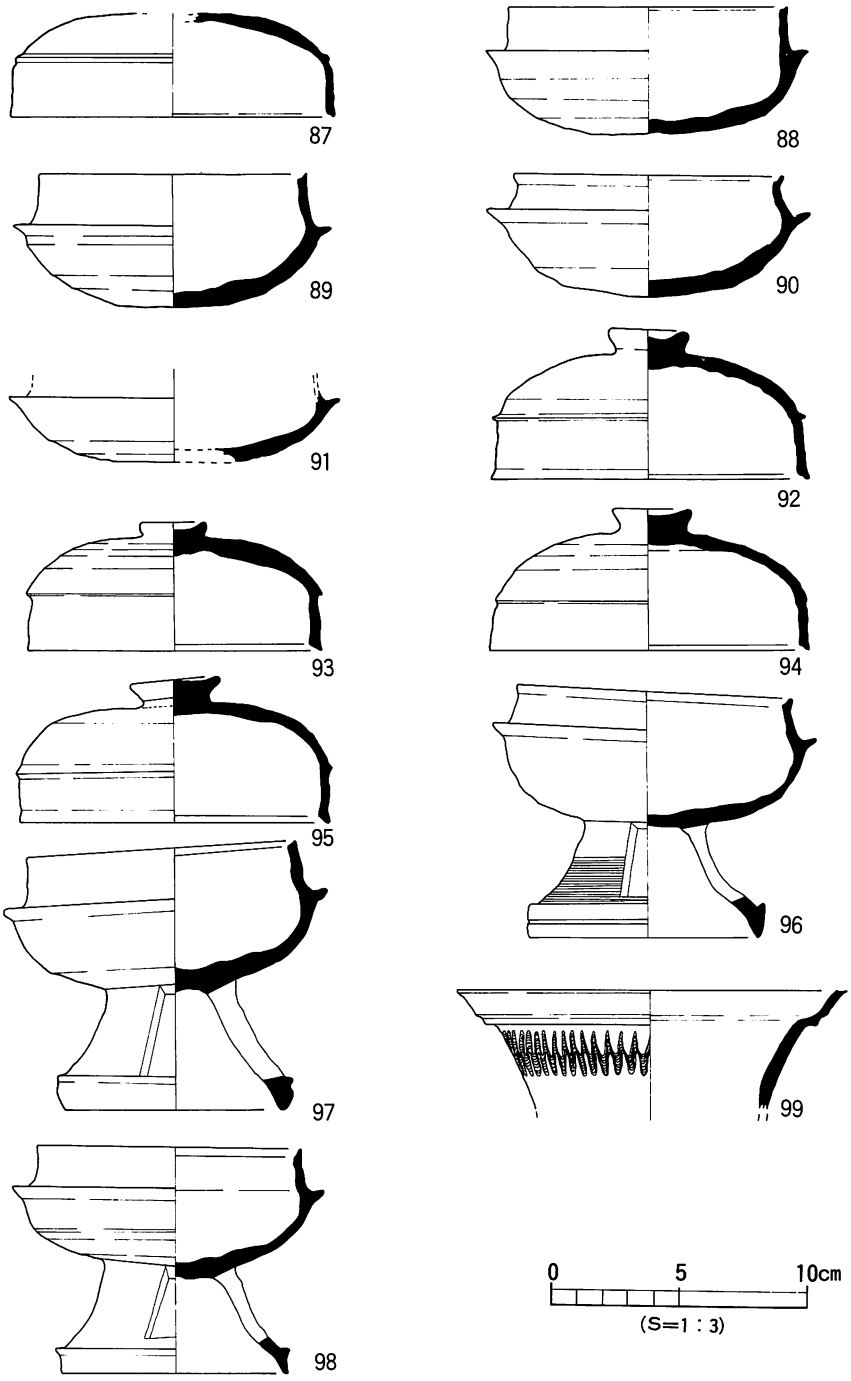
丸みを帯びる。たちあがりはわずかに内傾し、ほぼ真上に伸びる。端部は凹面をなして内傾する。受部は外方に伸び、受部上面は丸みを帯びる。調整は、底部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。90は口径8.8㎝、器高4.8㎝で、底部は丸みを帯びる。たちあがりは内傾した後、端部近くで外反し、端部は内傾する段をもつ。受部は上外方に伸び、受部端に沈線が巡る。調整は、底部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。91は底部が浅く、受部は上外方に伸びる。調整は、底部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。

高坏 (92～98) 92～98は有蓋高坏である。

高坏蓋(92～95) 92は口径12.5㎝、器高5.9㎝である。天井部は丸みを帯びる。稜は短くシャープに外方に伸びる。口縁部は直下に下り、端部は凹面をもって内傾する。つまみは上面がくぼみ、中心部が少しふくらむ。調整は、つまみ及びその周辺が回転ナデ調整、のこり天井部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。93は口径11.6㎝、器高５㎝で、天井部は丸みを帯びる。稜は天井部と口縁部との段差からなる。口縁部は直下に下り、端部は内傾する。つまみは上面がくぼむ。調整は、天井部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。94は口径12.6㎝、器高5.5㎝で、天井部は丸い。稜は沈線により浮かび上がらせた感がある。口縁部はやや外方へ広がりながら下がり、端部はわずかな凹面をもって内傾する。つまみは上面がくぼむ。調整は、天井部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。95は口径12.2㎝、器高5.8㎝で、天井部は丸く少し平たい。稜は小さく外方に突起する。口縁部は中央が少しふくらみをもって下がり、端部は内傾する。つまみは上面がくぼみ、中心部がふくらむ。調整は、天井部外面半分が回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ調整である。

高坏 (96～98)

96は口径10.8㎝、脚底径９㎝である。坏底部は丸みを帯びて平たい。口縁部はやや内傾し、端部近くで外反する。端部は内傾し、受部は上外方に伸びる。脚部は「ハ」の字状にゆるやかに外反し、端部近くで上外方に伸びる凸線をもって下る。三方に長方形のすかしが入る。調整は、坏底部外面半分が回転ヘラ削り、その他の坏部内外面は回転ナデ調整で、脚部外面は回転カキ目調整を施す。97は口径10.6㎝、脚底径8.5㎝、器高10.5㎝で、坏底部は丸い。口縁部はやや内傾し、端部は内傾する。受部は外方に短く伸びる。脚部は「ハ」の字状にゆるやかに外反し、端部近くで段をなす。三方に長方形のすかしが入る。調整は、坏底部１／３が回転ヘラ削り、その他の坏部内外面は回転ナデ調整で、脚部は内外面共に回転ナデ調整である。98は口径10.4㎝、脚底部8.8㎝、器高8.9㎝で、坏底部は丸みを帯びる。口縁部は湾曲して内傾し、端部はゆるやかな凹面をもって内傾する。受部は外方に伸びる。脚部は「ハ」の字状に外反し、端部近くで段をなして真下に下る。三方に長方形のすかしが入る。調整は、坏底部外面が回転ヘラ削り、その他の坏部内外面は回転ナデ調整で、脚部は内外面共に回転ナデ調整である。



第41図　　ＳＸ１　出土須恵器実測図

甕 (99)

甕の口縁部である。口径15.4cmで、外反する口縁部はさらに段をなして端部へ続く。端部はゆるやかな凹面をなして内傾する。調整は内外面共に回転ナデ調整で、頸部外面に波状文が施される。

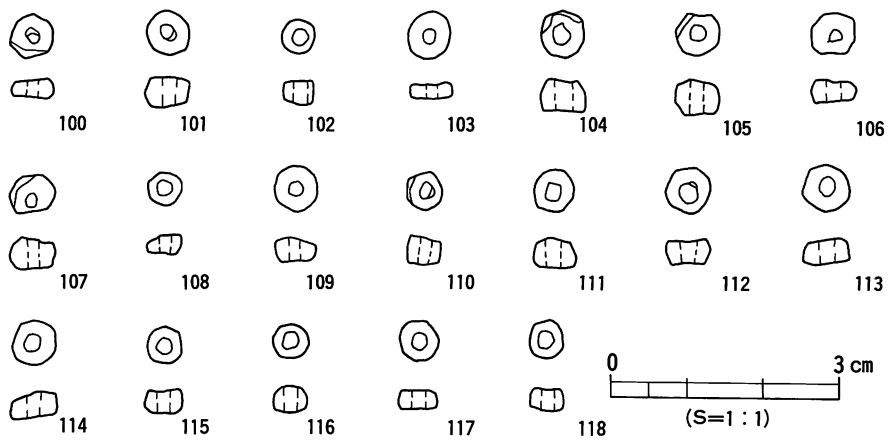
臼玉 (第42図)

100～118は直径0.4～0.6cmの臼玉である。色調は緑灰色である。114～118の5個は長頸壺(82)の中からの出土である。

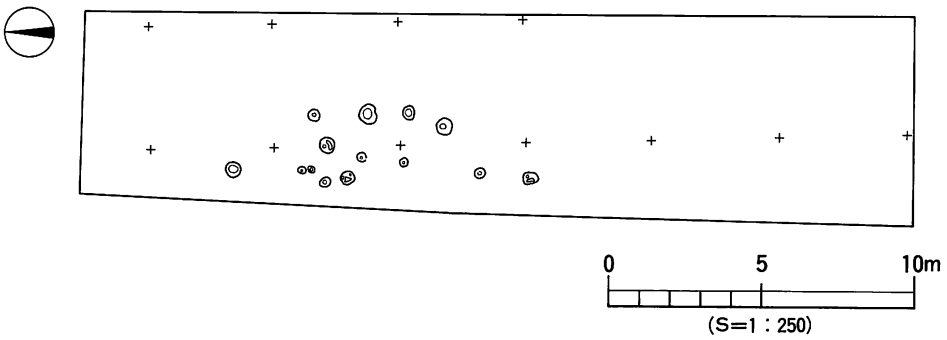
第Ⅸ層 (第43図)

第Ⅸ層は暗灰色粘質土で、北から南へと灰色が強くなる傾向がある。検出遺構は、柱穴14基である。遺構は断面形がすり鉢状のものが多く、大きいもので直径50cm程度、深さ40cmほどである。遺構面からの遺物の出土はなかった。

調査地南端部C 7区の層上面で、約30cm四方に、厚さ約3cmで堆積する炭化物を検出した。この炭化物は調査地西壁及び東壁断面には検出されず、南壁断面にわずかな層をなし、調査地外南方へ続くと思われる。焼土及び、関連すると思われる人為的掘りこみ等は検出されなかった。



第42図　　ＳＸ１　出土臼玉実測図



第43図　　第Ⅸ層遺構配置図

4　小　結

本調査は、古墳時代から中世における当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的として実施された。

調査の結果、古墳時代・中世の文化面と遺物包含層を確認した。

古墳時代

第Ⅶ・Ⅷ層より５世紀後半～６世紀前半の遺物が出土し、第Ⅷ層中位部で、一群の土器（ＳＸ１）を検出した。

ＳＸ１は、出土状況及び遺物の依存状況より、何らかの祭祀行為の遺物群として考えることができる。まず、遺物の配列をみると、須恵器は北側に、土師器は南側に分布が濃い。くわえて高坏形土器、長頸壺といった器高の高いものが、土器分布の中心部で検出された。出土遺物の器種構成では、高坏形土器が土師器・須恵器共に多く、土師器では壺形土器他が、須恵器では坏身・坏蓋、瑞がそれに次ぐ。一方、土師器の甕形土器、須恵器の壺といった祭祀性の低い器種の出土が希薄であった点は注意される。この他、滑石製の臼玉が長頸壺（第40図83）の中とその周辺の土壌より出土した。長頸壺に当初より投入したか否かは判断しがたいが、土器群と同時に用いられた可能性は充分に考えられる。これ等のことより、この一群の資料が祭祀行為に関係するものであることは確かであろうが、その対象については特定できない。松山平野では、出作遺跡（伊予郡松前町）で水利に関係すると考えられる祭祀資料がある（相田則美1983)。５ｃ後半を中心とする土器（土師器・須恵器)、石製模造品、鉄製品が大量に出土しており、本事例とは規模を別とするが、高坏形土器、石製品を多く用いる点においては共通点がみうけられる。出作遺跡の整理と分析が進めば、本資料に対する位置付けも可能になることであろう。

第Ⅶ・Ⅷ層出土遺物は、ＳＸ１と同時期ないし、わずかに下る時期のもの（６世紀前半）である。ＳＸ１の時点で生活面が存在し、その後約半世紀間で両層が堆積したものと判断される。

中 世

第Ⅴ層は、13世紀を主体とした遺物が出土した。近接する古照遺跡及びその周辺地で、同時期の遺構と遺物を検出している（註１）。古照遺跡の地に経営された集落との関連を示す資料となるものである。

本調査は、狭範囲に対するものであったが、松山平野における５世紀後半～６世紀前半の生活様式の一端と土器様相を確認するものとなった。また、古照遺跡の北東部の様相を知る資料となった。今後は、今回得られたＳＸ１の資料を基に、古墳時代の小規模祭祀（日常祭祀）の様相や松山平野における古墳時代後期前半の土器相について調査・研究しなければならない。

〔参考文献〕

相田 則美 1983「愛媛県出作遺跡」『季刊考古学』第２号 雄山閣

（註１）

古照遺跡についての主文献

松山市教育委員会 1974『古照遺跡』
1976『古照遺跡Ⅱ』
1989『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
1991『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』
松山市立埋蔵文化財センター 1991『南江戸閾目遺跡』
松山市史料集編纂委員会 1980『松山市 史料集』第１巻 考古編
1987『松山市 史料集』第２巻
愛媛県史編纂委員会 1982『愛媛県史』原始・古代Ⅰ
1986『愛媛県史』資料編 考古

遺構・遺物一覧

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例）縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（ ）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、
胴底→胴部～底部。

胎土・勝成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

（ ）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（１～４）多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。　例）◎→良好、○→良、△→不良。

表９　第Ⅴ層 出土遺物観察表 土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(色)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	坏	口径(13.0) 底径(7.0) 器高 3.7	口縁部は内湾気味にたちあがり、端部は丸い。底部はやや上げ底をなし、回転糸切り痕が残る。	(口端) ナデ (口) 回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密(長1) ◎		23
2	坏	口径(11.0) 底径(3.1) 器高 3.3	内湾気味にたちあがる口縁部端部付近でわずかに外反する。底部回転糸切り。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密 ◎		
3	坏	口径(10.9) 底径(7.0) 器高 2.7	口縁部は外反し端部は丸い。底部は平底で、切り離しは回転糸切りによる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密(石1) ◎		
4	坏	口径(13.8) 底径(8.0) 器高 3.4	直立気味に立ちあがる口縁部。底部は平底風。回転糸切り痕が残る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密(石1) ◎		23
5	坏	高台径5.4 高台高1.1	断面三角形の比較的高い高台をもつ土師器塊。高台は貼付による。	ナデ	ナデ	灰白色	密(石1) 金ウンモ ◎		
6	皿	口径(7.4) 底径(5.0) 器高 1.2	比較的器壁の厚い土師器皿。底部切離しは回転糸切りによる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密 ◎		
7	皿	口径(6.8) 底径(4.2) 器高 1.7	内湾して立ちあがる口縁部。底部切離しは回転糸切り。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	石(1~2) ◎		23
8	皿	口径(14.0)	内湾気味に立ち上がり、中位付近でわずかに稜をなす。	回転ナデ	回転ナデ	白黄色	石・長(1~3) ◎		23

第Ⅴ層 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(色)	胎土 焼成	備考	図版
9	埦	口径(16.0)	瓦器埦。口縁部は内湾してたちあがり、端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密(石1) ◎		23
10	埦	高台径4.6 高台高0.2	断面方形の貼付高台をもつ瓦器埦。内面見込みに2本の暗文あり。	ナデ	ナデ	暗灰色	密 ◎		23
11	鉢	口径(25.0)	東播系須恵器鉢。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	青灰色	密(長1) ◎		~~23~~
12	高坏	残高 3.0	須恵器高坏の脚部。	回転カキ目	回転ナデ	青灰色	長(1~2) ◎		
13	埦	高台径8.8 高台高0.4	白磁埦。高台は削り出しによる。底部内面に1条の沈線状の段あり。	ナデ	ナデ	明灰色	密 ◎	釉	23
14	埦	口径(14.4)	白磁埦。口縁部は玉縁状。端部下にV字状の凹線あり。口縁外面のみ釉付着。	ナデ	ナデ	明灰色	密 ◎	釉	23
~~15~~ 16	埦	高台径5.2 高台高0.5	龍泉窯系青磁埦。外面に蓮弁文あり。釉が高台部分にまで及ぶ。	ナデ	ナデ	緑灰色	密 ◎	釉	23
~~16~~ 15	埦	高台径4.0 高台高0.4	磁器埦。高台は削り出しによる。胎土目痕あり。	ヘラ削り	回転ナデ	灰白色	密 ◎	釉	23

表10 第Ⅶ層 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(色)	胎土 焼成	備考	図版
17	甕	口径(14.0)	「S」字状口縁をなし、口縁端部は丸くおさめる。	(口) ナデ (胴) ハケ	(口) ナデ (胴) 指頭圧痕	黄灰色	石・長(1~2) 金ウンモ ◎	黒斑	23
18	甕	口径(16.0)	口縁部は外反し、段をなして上外方にのびる。口縁端部は内傾する段をなす。	(口) 回転ナデ	(口) 回転ナデ	青灰色	密 ◎	自然釉	23

表11 第Ⅷ層 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(色)	胎土 焼成	備考	図版
19	甕	口径(19.0)	内湾する口縁部。端部は内傾する。内面は指頭痕顕著。	(口) ヨコナデ (胴) ハケ	(口) ヨコナデ (胴) ナデ	黄灰色	石・長(1~2) 金 ◎		24
20	甕	口径(23.0)	内湾する口縁部。端部は内傾する。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色	石・長(1~2) ◎		
21	甕	口径(18.0)	内湾する口縁部。端面は内側に肥厚し、やや内傾する。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄灰色	石・長(1~2) ◎		
22	甕	口径(14.1)	外反する口縁部。端部は尖り気味に丸い。内面は指頭痕顕著。	(口) ハケ (胴) ハケ	(口) ヨコナデ (頸) ナデ (胴) ヘラケズリ→ナデ	黄灰色	密(長1) ◎		24

第Ⅷ層 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(色)	胎土 焼成	備考	図版
23	壺	口径(11.2)	内湾してたちあがる口縁部。口縁端部は丸い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄灰色	密(長1) ◎		
24	甕	口径(30.1)	外反する口縁部。口縁端部はコの字状。	㊀ ハケ (指頭痕顕著)	㊁ ハケ→ヨコナデ	黄灰色	石・長(1~2) ◎		24
25	埦	口径(14.2)	口縁部は内湾し、口縁端部は尖り気味に丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色	石・長(1~2) ◎		
26	埦	口径(13.4)	胴部は外反気味にたちあがり、口縁部は直立する。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色	石・長(1~2) 金 ○		
27	高坏	口径(15.2)	坏屈曲部は稜となる。口縁部は外反し、端部は先細りする。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色	石・長(1~2) 金 ◎	黒斑	24
28	高坏	脚底径 9.2	柱部は円錘状に広がり、裾部は外反。柱ー裾部境に弱い稜あり。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄灰色	石・長(1~2) ○		
29	高坏	脚底径11.6	長く外反する裾部。端部は先細り。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色	石・長(1~2) ◎		
30	壺	胴部径 8.9	球形の胴部。底部はやや丸底。器壁は厚い。	ハケ→ナデ	ナデ (指頭痕顕著)	黄褐色	石・長(1~3) 金 ○	黒斑	24
31	ミニチュア	口径(3.0) 底径(2.2) 器高 5.3	手づくね土器	ナデ	ナデ	黄褐色	砂粒 ◎	黒斑	24
32	坏蓋	口径(11.2) 器高 4.6	天井部は丸みをもち、稜は外方に短く延びる。口縁部は直下に下がり、端部は内傾。	㊄ 回転ヘラ削り ½ 回転ナデ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密(長1~2) ◎		24
33	坏蓋	口径(11.2)	口縁端部はシャープに尖り凹面をなして内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密(長1~3) ◎		
34	坏蓋	口径(11.4)	やや扁平な天井部をもち、稜は外方に短くのびる。口縁端部は内傾。	㊄ 回転ヘラ削り 回転ナデ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密(石1~3) ◎		
35	坏蓋	口径(11.5)	天井部は丸く高い。稜は段差により表わされる。	㊄ 回転ヘラ削り ½ 回転ナデ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(1~2) ○		24
36	坏蓋	口径(10.0)	天井部は比較的丸く、稜は沈線によって浮かび上がらせた感がある。	㊄ 回転ヘラ削り ½ 回転ナデ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	石(1~4) ○		
37	坏蓋	口径(11.6)	稜は外方に短くのび、口縁端部は凹面をなして内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(1~4) ○		
38	坏蓋	口径(11.6)	稜は短く、口縁部はやや内湾気味に下がり、口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	砂粒 ◎		
39	坏蓋	口径(11.6)	稜は段差によるもので、口縁部は外反し、端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	砂粒 ○		

第Ⅷ層 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
40	坏蓋	口径(11.8) 器高 5.0	天井部は丸味を帯び、稜は短く上外方にのびる。口縁端部は内傾。	㊀ 回転ヘラ削り ½ 回転ナデ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(1~2) ○		
41	坏蓋	口径(11.8)	稜は段差によるもので、口縁端部は凹面をなして内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	長(1~3) ◎		24
42	坏蓋	口径(11.9)	稜は段差により表わされ口縁端部は内傾する段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密(長1) ◎		
43	坏蓋	口径(12.0) 器高 4.5	比較的丸い天井部をもち、稜は短く外方にのびる。口縁端部は内傾	㊀ 回転ヘラ削り ½ 回転ナデ ㊁ 回転ナデ	㊀ ナデ ㊁ 回転ナデ	灰色	石・長(1~3) ○		
44	坏蓋	口径(12.0)	稜は段差によるもので、口縁部はやや外反気味に下がり、端部は内傾する。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	青灰色	密 ◎		
45	坏蓋	口径(12.2)	扁平な天井部をもち、稜は上外方にのびる。口縁部は内湾気味に下がり、端部は丸い。	㊀ 回転ヘラ削り ½ 回転ナデ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(1~2) ◎		24
46	坏蓋	口径(11.0)	天井部は丸味を帯び、稜は沈線により浮かびあがらせている。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	砂粒 金 ◎		24
47	坏蓋	口径(12.5)	天井部は丸く、稜は段差による。口縁端部は純く内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
48	坏身	口径(9.0) 受部径11.3	たちあがりは内傾し、端部は凹面をなして内傾。受部は長く上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
49	坏身	口径(9.0) 受部径11.3	たちあがりは内傾し、端部は凹面をなす。受部は上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
50	坏身	口径(10.0) 受部径12.0	たちあがり端部は内傾する段をもつ。受部はやや上外方にのびる。	㊁ 回転ナデ ㊂ 回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	密 ◎		
51	坏身	口径(10.4) 受部径12.0	たちあがりは内傾した後、直立し、端部は段をなす。受部は太く純い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密(長1) ○		
52	坏身	口径(11.2) 受部径13.4	たちあがり端部は内傾する凹面をなす。受部はシャープで長い。底部は扁平。	㊁ 磨滅の為不明 ㊂ 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色 灰色	密(長1~3) ○		
53	坏身	口径(11.0) 受部径13.2	たちあがりは内傾し、端部は内傾する。受部は長く上外方にのびる。	磨滅の為不明	回転ナデ	灰白色	密(長1) ◎	自然釉	25
54	坏身	口径(11.6) 受部径14.2	たちあがり端部は尖り気味に丸い。	㊁ 回転ナデ ㊂ 回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色	密 ○		
55	坏身	口径(11.4) 受部径12.5	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味。受部は短く丸くおさめている。	㊁ 回転ナデ ㊂ 回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	密 ○		25
56	蓋	口径(12.8) 器高 5.4	天井部は丸く、口縁端部は内傾する凹面をなす。つまみは丸く、中央部がくぼむ。	㊁ 回転ヘラ削り ½ 回転ナデ つまみ ナデ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		25

第Ⅷ層 出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
57	蓋	口径(11.8) 器高 6.0	稜は沈線により浮かび上がらせている。口縁端部は内傾する凹面をなす。	(天) 回転ヘラ削り ½ 回転ナデ (つまみ) ナデ (口) 回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		25
58	蓋	つまみ径 2.9 つまみ高 0.9	中央部がやや突出する。有蓋高坏のつまみ。	ナデ	ナデ	青灰色	密 ◎		
59	蓋	つまみ径 3.2 つまみ高 0.6	扁平なつまみ。中央部が突出する。	ナデ	ナデ	灰色	密 ◎		
60	蓋	つまみ径 3.6 つまみ高 1.1	中央部がくぼむ有蓋高坏のつまみ。	ナデ	ナデ	灰色	密 ◎		
61	無蓋高坏	口径(14.0)	内湾する口縁部から、端部付近で外反し、端部は丸くおさめる。	(口) 回転ナデ	(口) 回転ナデ	灰色	石・長(1~2) ◎		
62	無蓋高坏	口径(20.0)	口縁部は外反し、端部は丸い。口縁中位部に段をなし、段下に波状文を施す。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	灰色	石・長(1~2) ◎		25
63	有蓋高坏	口径(10.8)	有蓋高坏の坏部。たちあがり端部は内傾し、受部は丸く上外方にのびる。	(口) 回転ナデ (坏底) 回転ナデ 回転ヘラ削り ½	回転ナデ	灰白色	石・長(1~3) ○		25
64	高坏	脚底径 9.2	ハの字状に外反し、脚端部付近に上外方にのびる凸線が巡る。	(坏底) 回転ヘラ削り (脚) 回転カキ目 (脚端) 回転ナデ	(坏底) ナデ (脚) 回転ナデ	灰色	密 ○		
65	高坏	脚底径 8.4	脚端部付近に1条の凸線が巡り、脚端部は段をなして内傾する。三方に長方形すかしあり。	(脚) 回転カキ目 (脚端) 回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		25
66	高坏	脚底径 8.8	脚部は外反気味に下がり、脚端部付近に1条の凸線が巡る。	(脚) 回転カキ目 (脚端) 回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
67	高坏	脚底径 8.2	脚端部付近に1条の凸線が巡り、端部は凹面をなして内傾する。スカシあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 △		
68	高坏	脚底径 8.2	脚部は八の字状に外反し、脚端部は内傾して下がる。長方形スカシあり。	(脚) 回転カキ目 (脚端) 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○		
69	高坏	脚底径 8.0	脚部はハの字状に外反して下がり、端部は内湾気味に下がる。スカシあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密 ◎		
70	高坏	脚底径 8.6	脚端部付近でわずかに段をなし、内傾して下がる。スカシあり。	(脚) 回転カキ目 (脚端) 回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密 △		
71	甕	口径(26.2)	口縁部は大きく外反し、口縁端部はわずかに凹面をなす。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	灰白色	粗 △		
72	甕	口径(20.0)	口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は下方に肥厚する。	(口) ヨコナデ (肩) ナデ	(口) ナデ (肩) タタキ→ナデ消し	灰色	密 ○		25
73	壺	口径(11.1) 残高 9.0	口径が体部最大径を上回る。口縁端部は内傾する段をなし、頸部に波状文、体部に上下2本の沈線と刺突列点文あり。	(口) 回転ナデ (胴中) 回転ナデ (胴下) ナデ	(口) 回転ナデ (胴中) 回転ナデ (胴下) ナデ	灰白色	密 ○		25

第Ⅴ層 出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
74	瓦	底径(6.0)	平底の底部。体部下半に1条の凸線が巡り、凸線上に波状文を施す。	(底) ナデ	(底) ナデ	灰白色	密 ○		
75	器台	底径(20.2)	ハの字状に開く脚部。端部はほぼ水平で、凹面をなす。波状文を施す。スカシあり。	(脚上) ヨコナデ (脚下) ミガキ	ヨコナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		25

表12 ＳＸ１ 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
76	高坏	口径 16.6 脚底径12.2 器高 12.8	坏屈曲部は段をもつ。口縁部外反。短くやや内湾する脚裾部。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄灰色	石・長(1~2) ◎		26
77	高坏	口径 15.0 脚底径10.4 器高 11.8	坏屈曲部は稜となる。口縁部は外反し、端部は先細り。充塡技法。	ヨコナデ	(口) ヨコナデ (柱) ヘラケズリ	黄灰色	石・長(1~2) ◎		26
78	高坏	口径 15.9 脚底径11.2 器高 13.5	坏屈曲部は段をもつ。器壁は厚い。充塡技法。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰色	砂粒 ◎		26
79	高坏	脚底径11.2	柱裾部は内湾気味に開く。柱ー裾部内面に稜をもつ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄灰色	石・長(1~2) ◎		
80	高坏	脚底径11.0	柱裾部は内湾して開き、端部は先細り。充塡技法。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄灰色	石・長(1~2) 砂 ○		26
81	高坏	脚底径10.2	坏底部は比較的丸い。裾部は短く内湾する。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄灰色	石・長(1~2) ◎		26
82	壺	口径 10.8 胴部径13.2 器高 16.0	扁球形の胴部から、上外方に直線的にたちあがる口縁部。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	橙色	石・長(1~2) ◎		27
83	壺	口径 8.6 胴部径10.1 器高 9.9	肩部が強く張り、胴下半はすぼまる。口縁部は内湾し端部は先細り。	ヨコナデ	(口) ヨコナデ (胴) ヨコナデ (指頭痕顕著)	橙色	長(1~2) ◎		27
84	甕	口径(11.6)	口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸い。	(口) ナデ (胴) ヨコナデ	ヨコナデ	橙色	長(1~2) ◎		27
85	甕	口径(11.9)	わずかに内湾する口縁部。端部は丸い。	ヨコナデ	(口) ヨコナデ (胴) ヘラケズリ	橙色	長(1~2) ◎		27
86	埦	口径 13.4 器高 5.6	内湾した後、直線的にたちあがる口縁部。端部は丸い。丸みのある平底。	ナデ (指頭痕顕著)	ナデ	灰白色	石・長(1~2) ◎		27
87	坏蓋	口径(12.8)	やや丸味をおびた天井部。稜は短く丸い。口縁部は直下に下がり、端部は内傾。	(天) 回転ヘラ削り ½ (口) 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石・長(1~2) ◎		27
88	坏身	口径 11.0 器高 4.9	完形品。たちあがりは直線的にのび、端部は内傾する凹面。底部は丸い。	(底) 回転ヘラ削り ½ (口) 回転ナデ	回転ナデ	灰白色	石・長(1~2) ◎		27

ＳＸ１ 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(色)	胎土 焼成	備考	図版
89	坏身	口径 10.6 器高 5.2	完形品。たちあがり端部は凹面。受部は外方に水平にのびる。底部は丸い。	㊀ 回転ヘラ削り ½ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		27
90	坏身	口径 8.8 器高 4.8	完形品。たちあがり端部は外反。受部は長く上外方にのびる。底部は丸い。	㊀ 回転ヘラ削り ½ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色	石・長(1~2) ○		27
91	坏身	残高 2.8	比較的浅い底部。受部はやや上外方にのびる。	㊀ 回転ヘラ削り ½	回転ナデ	灰白色	石・長(1~2) △		27
92	蓋	口径 12.5 器高 5.9	完形品。天井部は丸く、断面三角形のシャープな稜をもつ。口縁端部は内傾。	㊀ 回転ヘラ削り ½ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石・長(1~2) ◎		28
93	蓋	口径 11.6 器高 5.0	完形品。天井部は丸く、稜は段により表わされる。口縁端部は内傾する段をなす。	㊀ 回転ヘラ削り ½ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	長(1~2) ◎		28
94	蓋	口径 12.6 器高 5.5	完形品。天井部は丸く、稜は沈線による。口縁端部は内傾する段をなす。	㊀ 回転ヘラ削り ½ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石・長(1~3) ◎		28
95	蓋	口径 12.2 器高 5.8	完形品。天井部は丸く、稜は短く外方に突出する。つまみ中央部が突出。	㊀ 回転ヘラ削り ½ ㊁ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石・長(1~2) ◎		28
96	有蓋高坏	口径 10.8 脚底径 9.0 器高 9.6	坏部は深く、坏底部は丸い。脚端部付近に凸線が巡り、脚端部に凹線状のくぼみあり。完形品。	(坏底) 回転ヘラ削り ½ (脚柱) 回転カキ目 その他 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石・長(1~2) ◎		28
97	有蓋高坏	口径 10.6 脚底径 8.5 器高 10.5	完形品。脚部はハの字状に開き、脚端部付近に凸線が巡る。三方にスカシあり。	(坏底) 回転ヘラ削り ½ その他 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		28
98	有蓋高坏	口径 10.4 脚底径 8.8 器高 8.9	完形品。脚端部付近に凸線が巡り、脚端部はやや凹面をなす。三方にスカシあり。	(坏底) 回転ヘラ削り ½ その他 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		28
99	壺	口径 15.4	口縁端部付近で段をなし、立縁端部は内傾する凹面をなす。頸部外面に波状文あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		28

表13 ＳＸ１ 出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	品種	残存	色	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
100	臼玉	完形	緑灰色	0.2	0.6	0.2	0.1		28
101	臼玉	完形	緑灰色	0.4	0.6	0.2	0.2		28
102	臼玉	完形	緑灰色	0.3	0.4	0.1	0.1		28
103	臼玉	完形	緑灰色	0.2	0.6	0.2	0.1		28
104	臼玉	完形	緑灰色	0.4	0.6	0.2	0.2		28
105	臼玉	完形	緑灰色	0.4	0.55	0.2	0.25		28
106	臼玉	完形	緑灰色	0.25	0.6	0.2	0.1		28

ＳＸ１ 出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	品 種	残 存	色	法 量				備考	図版
				長さ（cm）	幅 （cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
107	白玉	2/3	緑灰色	0.4	0.6	0.2	0.1		28
108	白玉	完形	緑灰色	0.25	0.45	0.15	0.09		28
109	白玉	完形	緑灰色	0.3	0.55	0.2	0.15		28
110	白玉	完形	緑灰色	0.4	0.45	0.15	0.1		28
111	白玉	完形	緑灰色	0.35	0.55	0.15	0.15		28
112	白玉	完形	緑灰色	0.3	0.6	0.2	0.2		28
113	白玉	完形	緑灰色	0.3	0.6	0.2	0.2		28
114	白玉	完形	緑灰色	0.3	0.6	0.2	0.15	82内	28
115	白玉	完形	緑灰色	0.3	0.5	0.15	0.1	82内	28
116	白玉	完形	緑灰色	0.35	0.45	0.15	0.09	82内	28
117	白玉	完形	緑灰色	0.2	0.5	0.15	0.1	82内	28
118	白玉	完形	緑灰色	0.3	0.45	0.15	0.1	82内	28

第Ⅳ章　朝美澤遺跡２次調査出土の弥生前期土器

梅木謙一、水口あをい

はじめに

松山市朝美澤遺跡２次調査では、弥生時代前期の良好な遺物包含層を検出するにいたった。

松山平野の弥生時代前期、特に前半期の資料は数少なく、よって器種構成や器形態等その土器様相は不明な点が多い。

今回確認した包含層からは、100数十点もの前期土器片の資料が出土した。しかし、土器片は小さく、器形の全てを知れるものではなかった。だが、器種や口縁部形態、施文、調整を知り得る資料としては貴重な資料であり、弱干の分析を試みるものである。　（梅木）

(1)　形式分類

器種は、甕形土器、壺形土器、高坏形土器、鉢形土器（ミニチュア品）で構成される。

甕形土器　口縁部の出土は29点で、胴部片は12点の出土を見る。口縁部の形態は大きく２つに分けられる。ａは如意形の口縁部（22点）で、ｂは縄文晩期の凸帯文系の系譜をひく（４点）ものである。ａはすべて無沈で、口縁端部に刻目を施す。刻目は口縁端部全面（７点）に施すものと、口縁部下部（10点）に施すものがあり（不明：５点)、面取りした口縁端部に刻目を施すものが大半である。ｂは凸帯を巡らすもの（３点）と、巡らさないもの（１点）がある。胴部片では12点のうち11点が有段で刻目を施し、１点は無段である。

壺形土器　口縁部片49点、体部片85点がある。口縁部は法量（推定）より、大型品（16点)、中型品（28点)、小型品（５点）の３つに分類できる。いずれも口縁下に曖昧な段（整形時の粘土接合によるもの）を持つ（小片のため不明なものもある)。122のように頸部に凸帯をもつような異例なものもある（１例だけ)。

高坏形土器　坏部片３点、脚部片１点で、坏部はいずれも内側にわずかに段をもつ。

鉢形土器　如意形口縁を有するもの１点と、内湾気味に立ち上がる直口口縁を有するもの12点がある。直口口縁には端面を「コ」字状（５点）に仕上げるものと、丸く仕上げるもの（６点）と、尖り気味に仕上げるもの（１点）がある（不明１点)。

ミニチュア　底部片が１点出土している。　（水口）

(2)　施　文

甕形土器　体部に沈線はなく、口縁端部に刻目を施す。刻目は浅く刻むものと、深く刻むものがある。縄文晩期の凸帯文系のものに刺突文（内面１点、外面１点）を施すものである。

壺形土器　大型品－口唇に１条の横沈線文（１点）を施すものと、口縁下に段をもつもの（１点）がある。中型品－口唇に２条の横沈線文と刻目を施す（１点)。小型品－頸部に２条以上の沈線文を施す（１点）ものと、凸帯を巡らす（１点）ものがある。体部片は85点で、うち口

頸部片と思われるものが12点、胴部片が73点である。施文は七種のものがみられる。沈線文、弧文、木葉文、山形文、段部、刺突文、竹管文である。口頸部片では、横沈線文（7点）、横沈線に縦沈線を組み合わせたもの（1点）と、段部（4点）がある。胴部片では、横沈線文（19点）、横沈線文に縦沈線文を組み合わせたもの（2点）、弧文（13点）、無軸の木葉文（2点）、山形文（13点）、沈線化した段（14点）、刺突文（1点）、竹管文（1点）、不明（7点）がある。なお、ヘラ描きは、浅く施されるものが大半をしめる。（水口）

(3) 調　整

調整方法は、刷毛目調整を顕著に残すもの、刷毛目調整（木口）後ナデ消しするもの、ナデ調整をするもの、磨き調整をするものがある。

甕形土器　最終仕上げにナデ調整が施されることが多い。刷毛目調整は、a・b類両方にみられるが、刷毛目調整を顕著に残すものは少ない。

壺形土器　口縁部は内外面共に横方向のヘラ磨きが大半をしめる。体部片は、小片、または磨滅のため明確な調整方法は不明である。

高坏形土器　坏部内面に横方向のヘラ磨きがみられる。

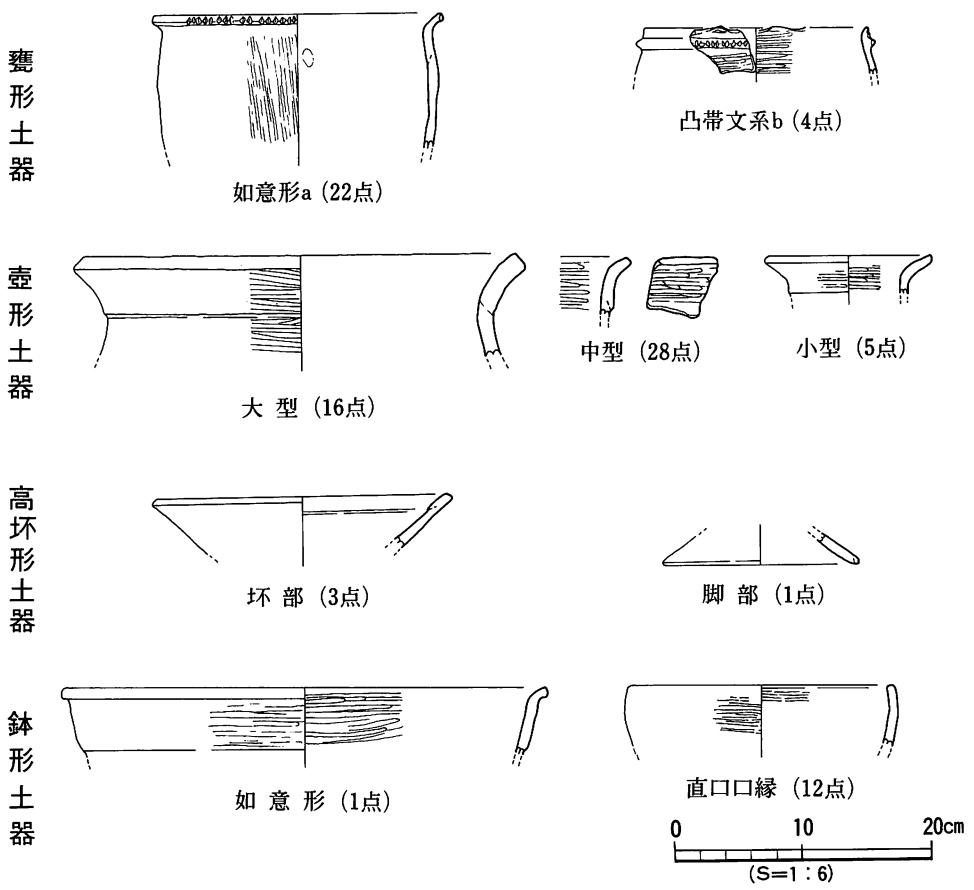
鉢形土器　如意形口縁は内外面共に横方向のヘラ磨きで、直口口縁は内外面共にナデ及び、磨き調整が主体となる。（梅木・水口）

(4) 小　結

朝美澤遺跡2次調査出土の弥生前期土器は、甕形土器、壺形土器、高坏形土器、鉢形土器で器種が構成される。器種構成比率は、調査条件より資料としては充分なものではないが、高坏形土器の存在が注意される。市内の弥生前期土器ではこれまで高坏形土器の存在が不明確であった、よって、稀少資料として価値あるものである。出土品は、甕形土器では板付系統と縄文晩期凸帯文系統のものの二種が存在し、前者は体部に沈線文を施さない。壺形土器では不明瞭ながら口頸部境に段を有し、未だ沈線化していない。高坏形土器では坏・脚部ともに段を有し、鉢形土器では如意形口縁と直口口縁を呈するものの二種がある。これらの特徴は、北部九州地方の板付Ⅱa式の特徴をそなえているものである。ただし、北部九州地方のものと異なる点は、甕形土器における刷毛目調整の消極的な使用や、壺形土器の施文パターン等があげられる。特に施文では、122の凸帯文、139・140の刺突文・竹管文、128の木葉文、141～143のタテ割り区画による施文技法が注意を要するものであろう。

次に課題である。出土状況にも関係するが、本資料の器種構成の是非とその比率、また、各器種の形態の把握、さらには甕形土器における二系統の前後へのつながり等多くのものがあげられる。いずれも、今後の資料によって確認しなければならないものである。

本資料は、現時点においては、松山平野における弥生前期土器の様相が知れる資料としては最も古い段階の時期に比定されるものであり、平野内、更には西瀬戸内地方の前期古～中段階の土器様相が知れる数少ない資料として注意を要するものといえる。（梅木）



第44図　器種構成と施文分類

第Ⅴ章　朝美澤(２次)・辻町遺跡調査の成果と課題

平成３年に実施した朝美澤（２次）遺跡と辻町遺跡の調査では、松山平野における土器編年の資料となるものを確認し、さらに、古照遺跡をつかさどる宮前川中流域の遺跡様相が知れる資料が得られた。

弥生時代

朝美澤遺跡（２次）では、前期前半の好資料と中・後期の資料が出土した。前期前半の資料は、包含層出土ではあるが、異時期の遺物の出土はなく、一括遺物に順ずる好資料として認められよう。壺形土器には口頸部境に段をもち、甕形土器では沈線文はなく、高坏形土器では坏内面に段を有する。以上の点において、北部九州地方の板付Ⅱａ式の土器様相をもつ。よって、平野内での当該期の良好な資料がない現時点においては貴重な資料であるといえる。また、瀬戸内地方の弥生前期土器研究にとっても好資料となるものであると考える。

古墳時代

辻町遺跡ＳＸ１の一群の土器は、器種構成や滑石製臼玉が検出されたことで祭祀性の強い遺構であることは確かであろう。ただし、祭祀の対象物が明確でない点で課題を残すものとなった。遺物研究の視点からは、祭祀遺構の性格が強いが、出土土器には、特別に祭器化された様相は認められず、生活品と同形態を示すものと判断できる。よって、５世紀後半の土器編年の資料として良好なものといえる。

古代～中世

朝美澤遺跡（２次）では、６～８ｃの遺物包含層と、古代～中世に比定される掘立柱建物址が検出された。また、辻町遺跡では、輸入陶磁器が出土している。南接する古照遺跡地帯では、近年、同時代の資料が増加しており、同地帯の報告にて、今回の資料並びに遺跡の確かな評価がなされるものと考える。古照遺跡一帯の調査の整理・報告に期待するものである。

以上、本書では、朝美澤遺跡（２次)、辻町遺跡の調査報告を行った。両遺跡とも、集落としては南接する古照遺跡と同じ母体のものである。古照遺跡が発見され早20年となる。現在もなお、古照遺跡は調査され（８次）ている。

図　版

図版例言

1．構造の撮影は、大西朋子・宮内慎一・真木潔が行った。

使用機材：

カ メ ラ　アサヒペンタックス67　　レンズ　ペンタックス67　55㎜Ｆ４　他
　　ニコンニューＦＭ２　他　　ズームニッコール28～85㎜　他
フィルム　ネオパンＳＳ

2．遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カ メ ラ　トヨ／ビュー45Ｇ　　レンズ　ジンマーＳ240㎜Ｆ5.6　他
ストロボ　コメット／ＣＡ-32　2灯・ＣＢ2400　2灯（バンク使用）
ｽﾀﾝﾄﾞ他　トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム　白　黒　プラスＸパン4_X5
　　カラー　エクタクロームＥＰＰ4_X5

3．遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。
（白黒に限る。）

使用機材：

引 伸 機　ラッキー450ＭＤ　　レンズ　エル・ニッコール135㎜Ｆ5.6Ａ
　　ラッキー90ＭＳ　　エル・ニッコール50㎜Ｆ2.8Ｎ
印 画 紙　イルフォードマルチグレードⅢＲＣ

【参考】　『埋文写真研究』Vol.1　1990　Vol.2　1991

〔大西朋子〕

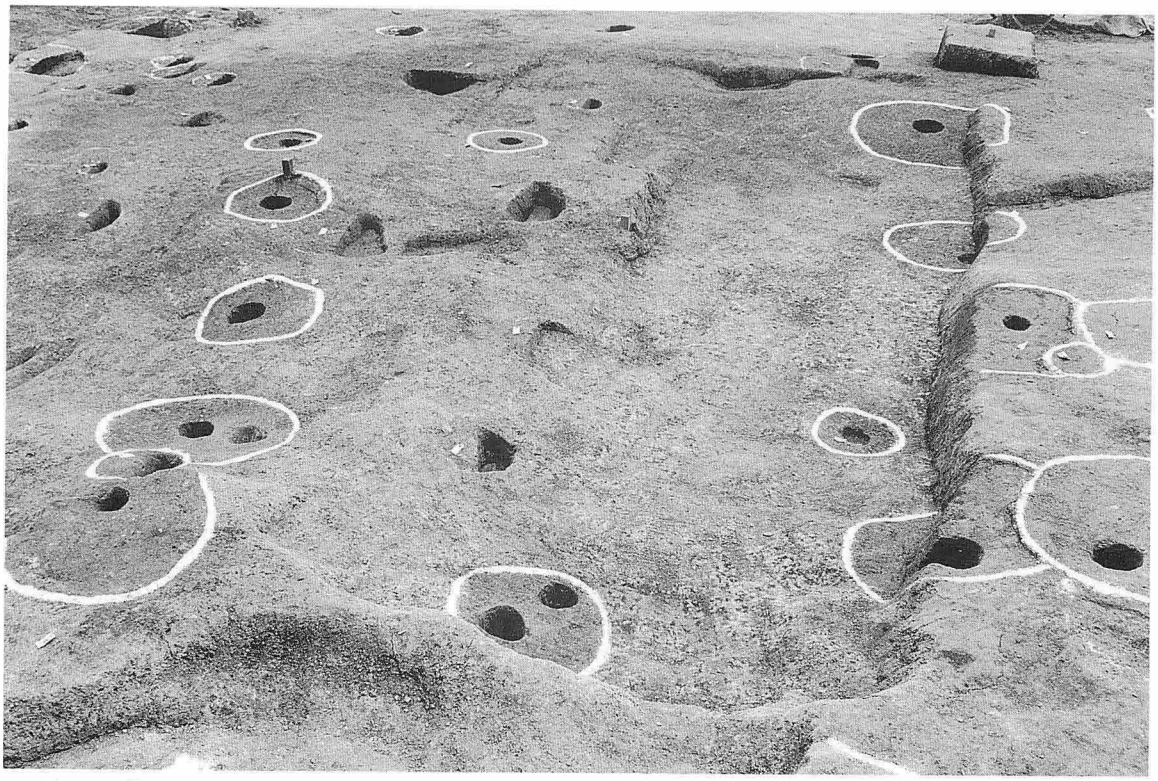
１．調査地遠景（南西より）

２．遺構検出状況①（南より）

図版二

１．遺構検出状況②（西より）

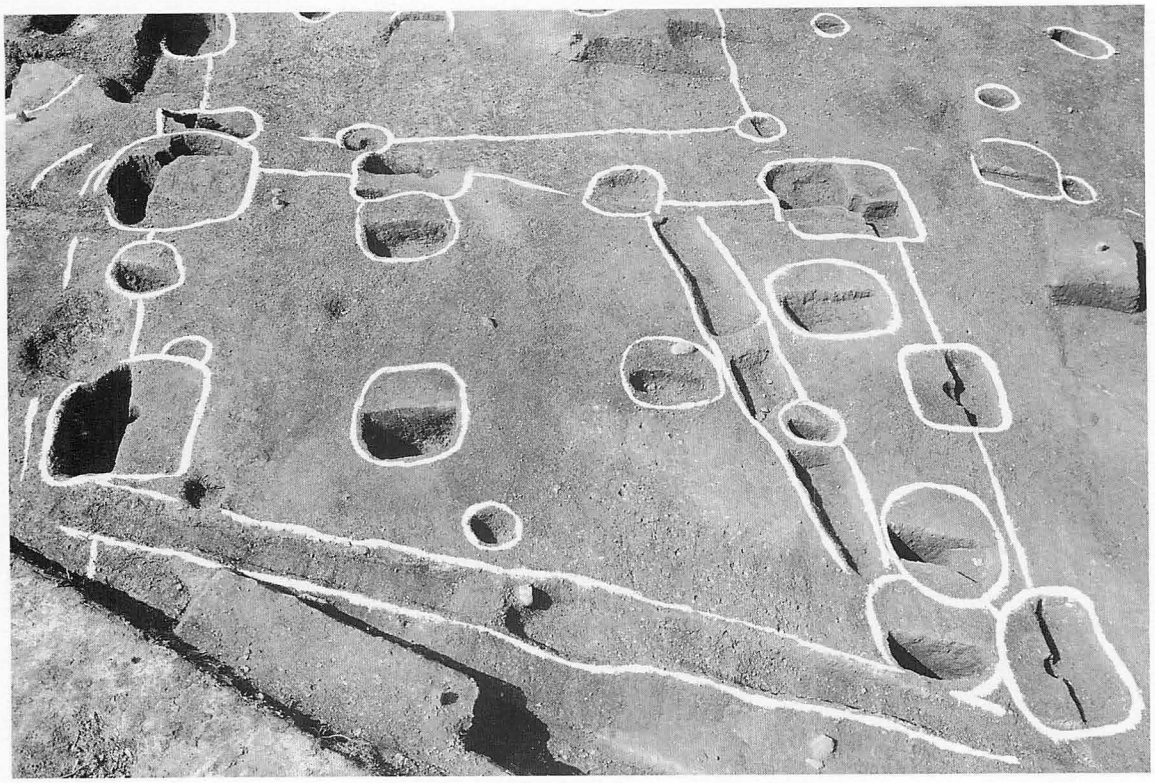
２．北東隅壁土層（南より）



１．掘立１①（西より）

２．掘立１②（南より）

図版四



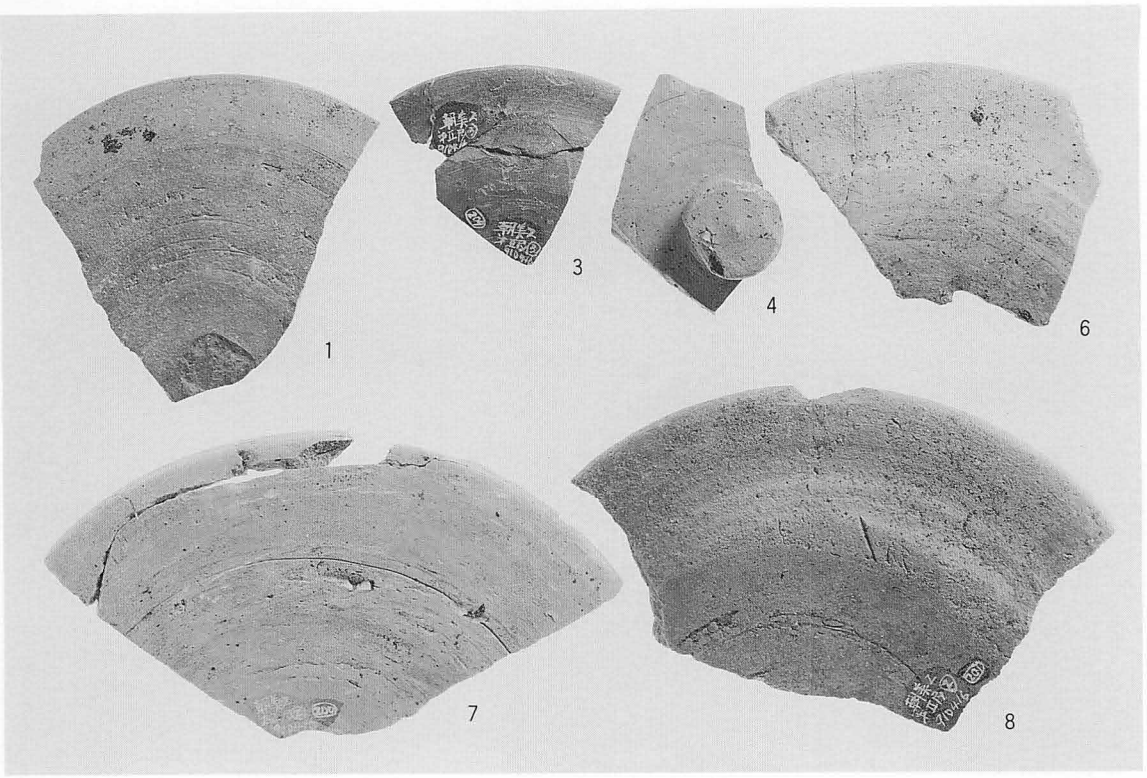
１．掘立２（南より）

２．掘立３（南より）

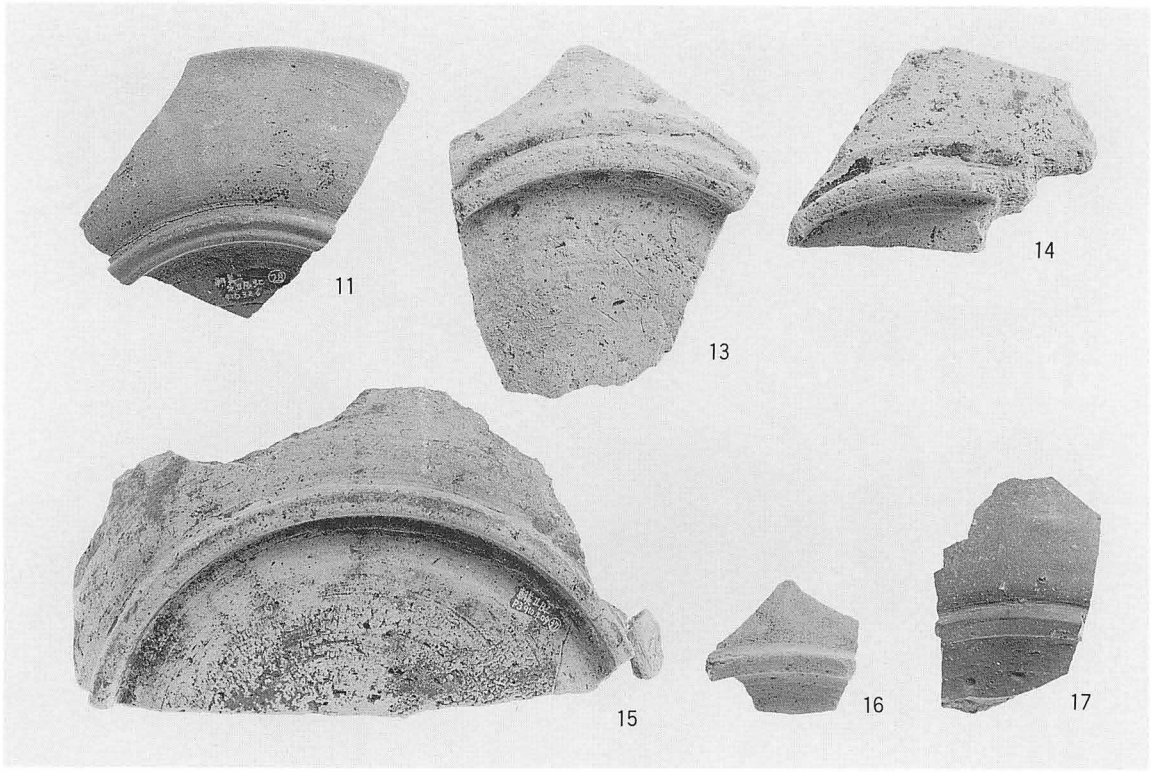
１．遺物出土状況①（西より）

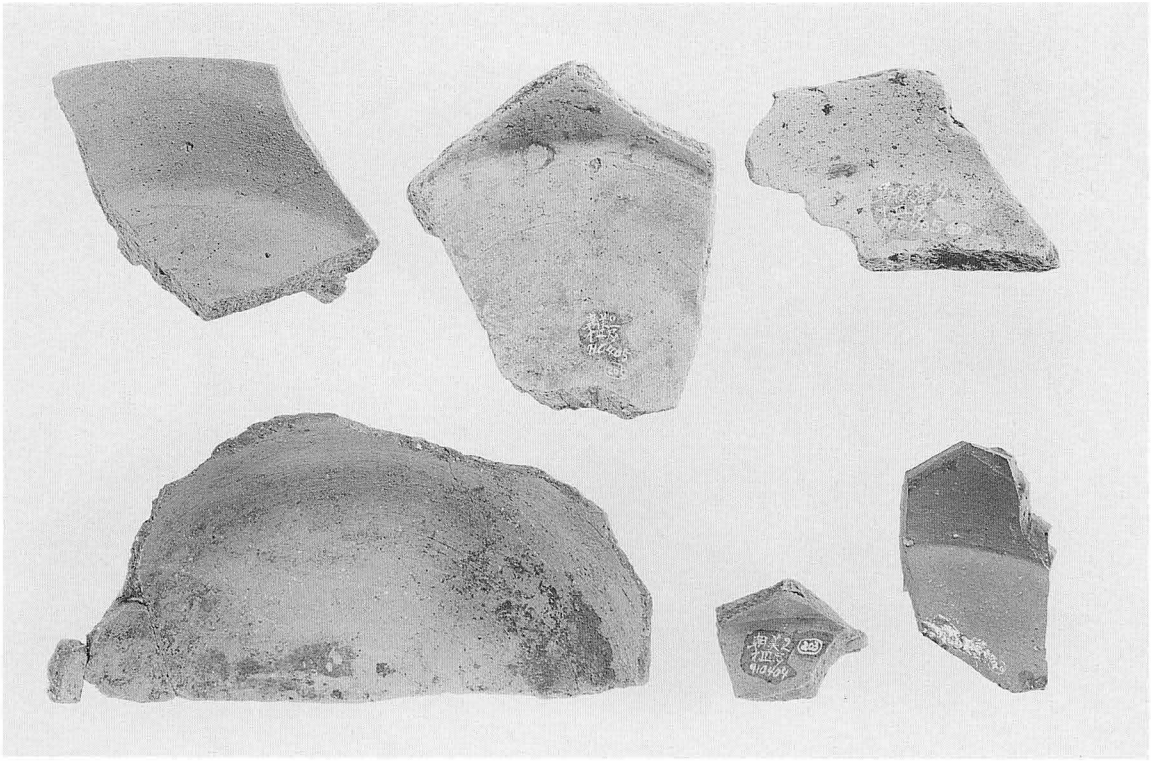
２．遺物出土状況②（西より）

図版六



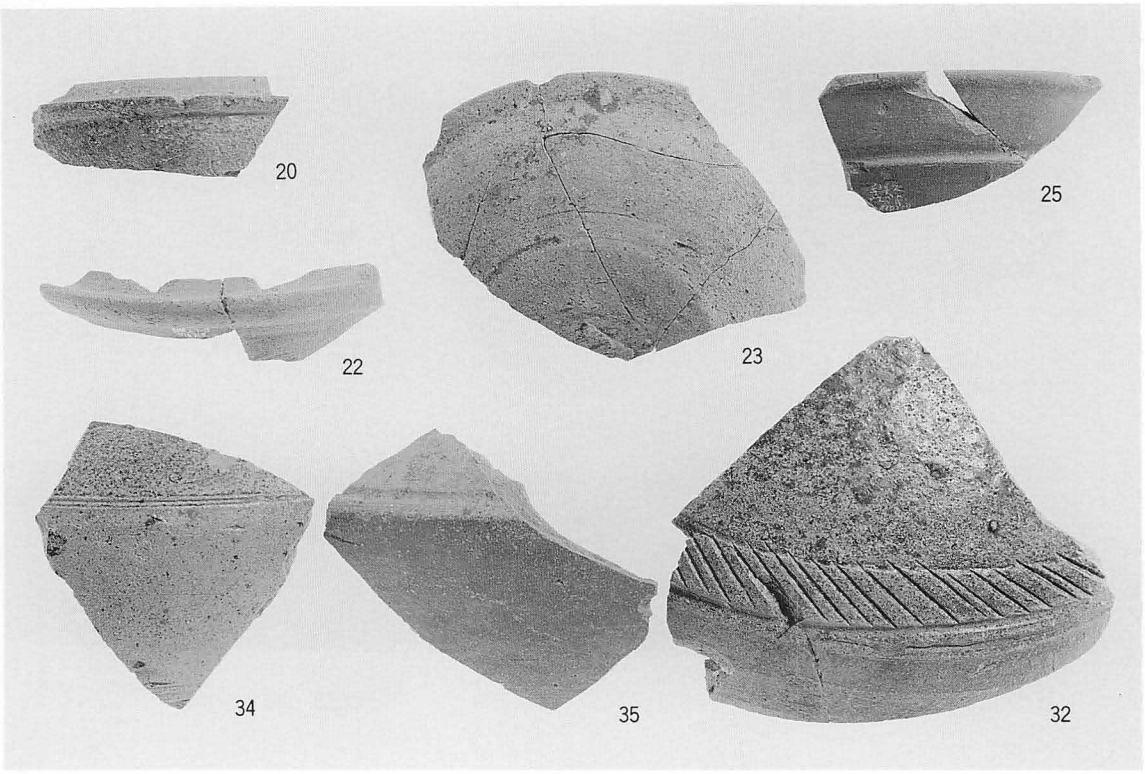
1．第Ⅱ層出土遺物 ①〔上〕：外面，〔下〕：内面



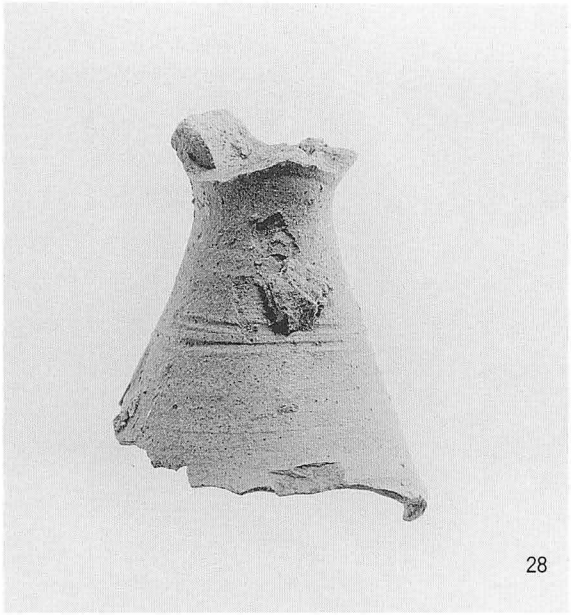


1．第Ⅱ層出土遺物②〔上〕：外面，〔下〕：内面

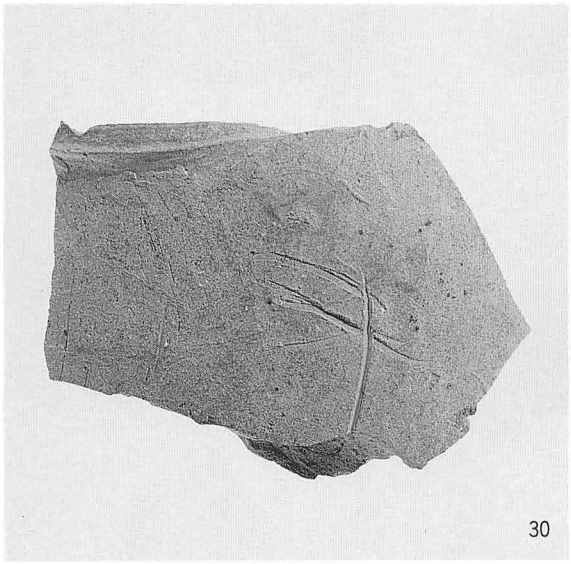
図版八



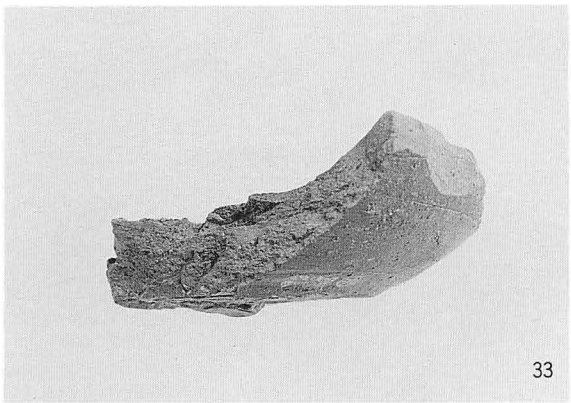
1．第Ⅱ層出土遺物③〔上〕：外面，〔下〕：内面


28

31


30

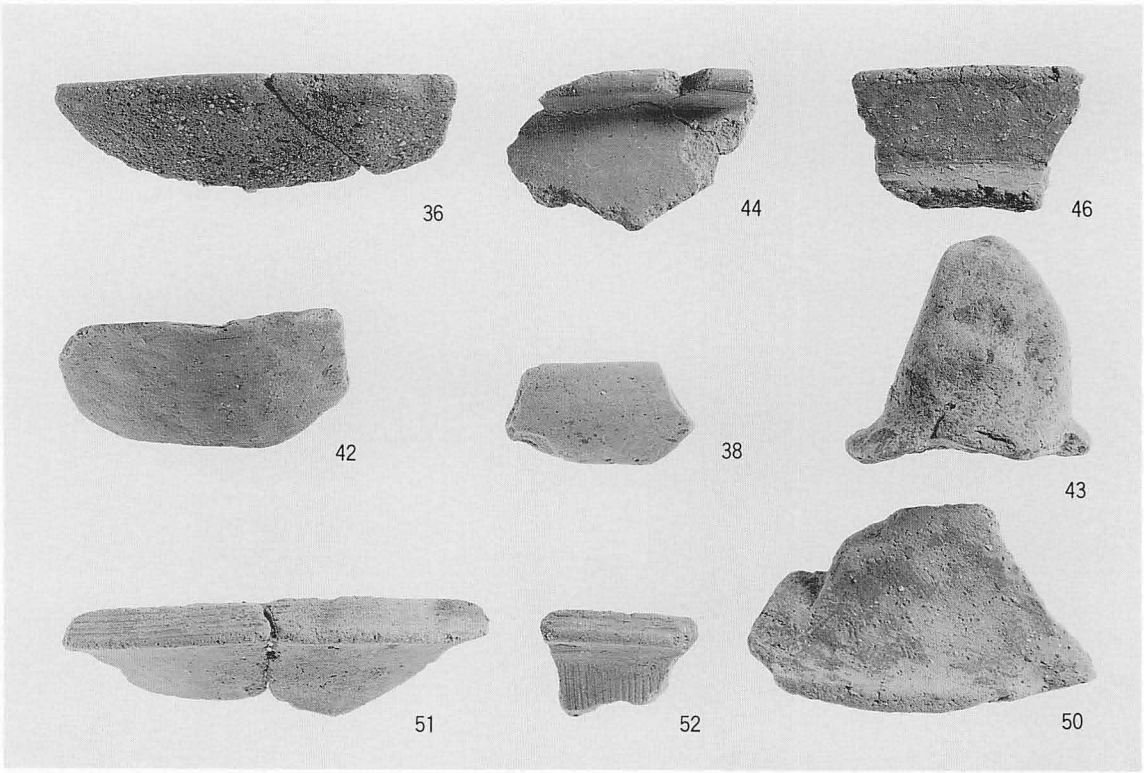
40


33

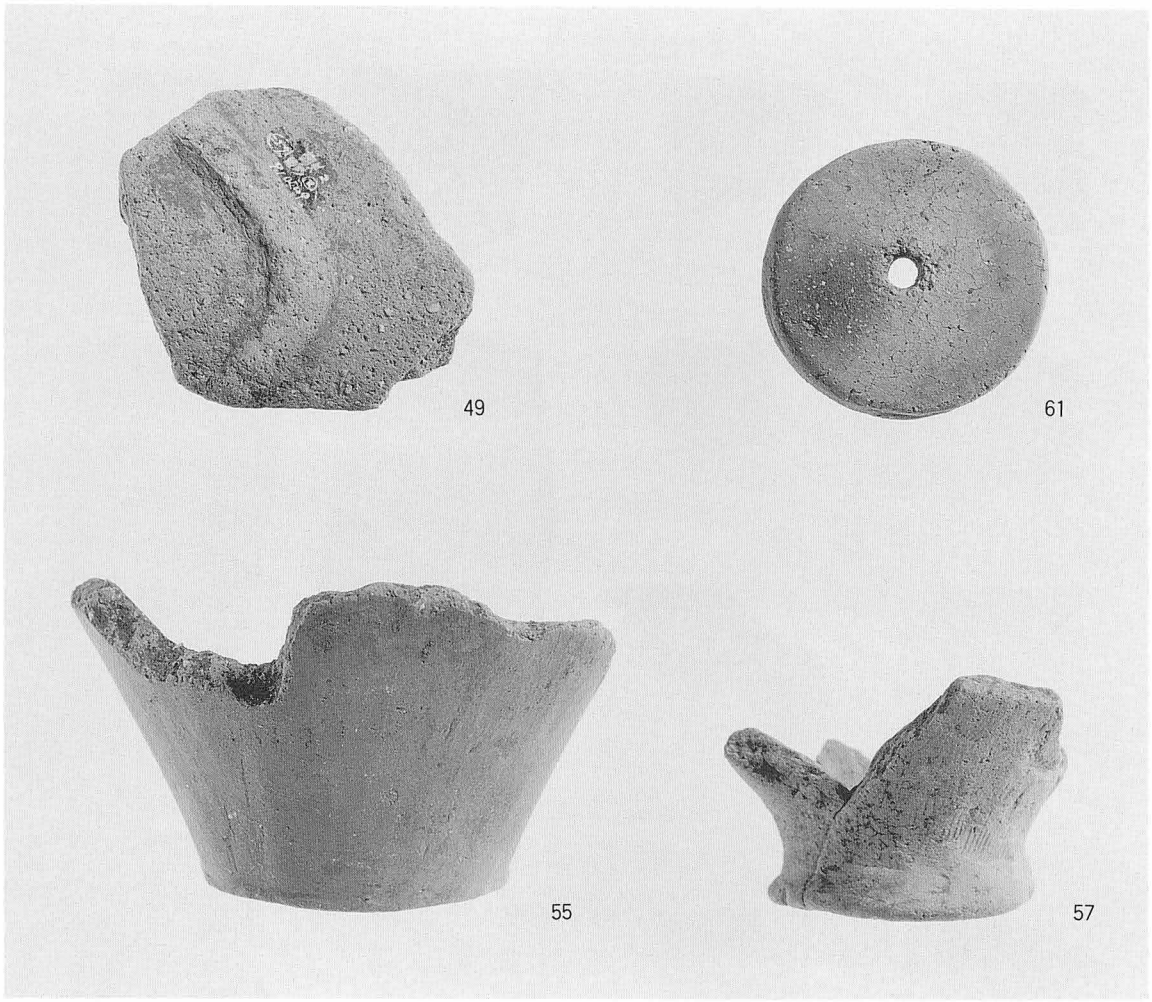
41

1．第Ⅱ層出土遺物④

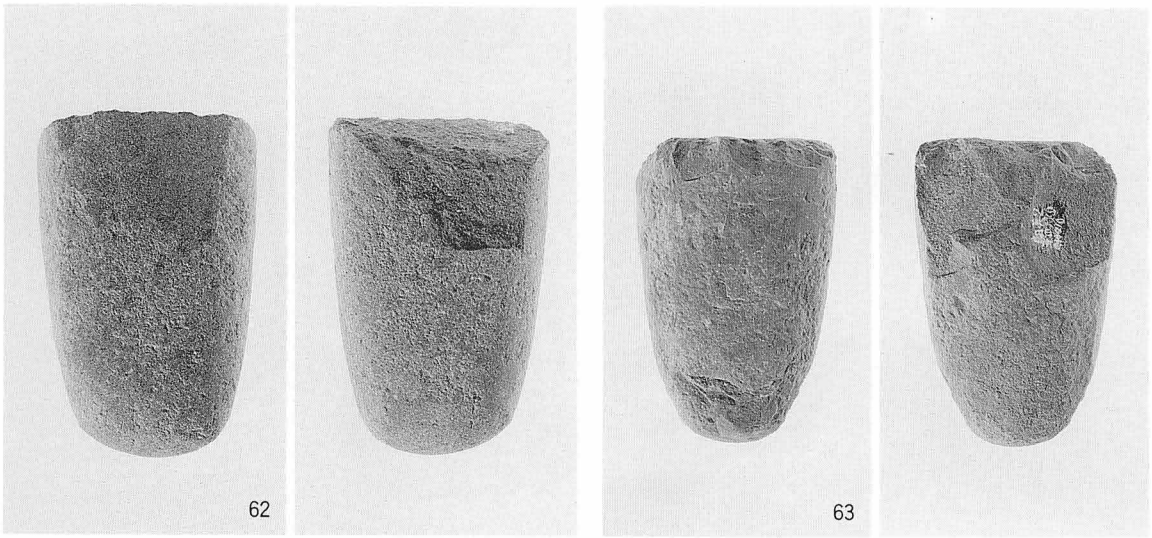
図版十



1．第Ⅱ層出土遺物(36･38･42･43) 第Ⅲ層出土遺物(44･46･50～52)〔上〕：外面，〔下〕：内面

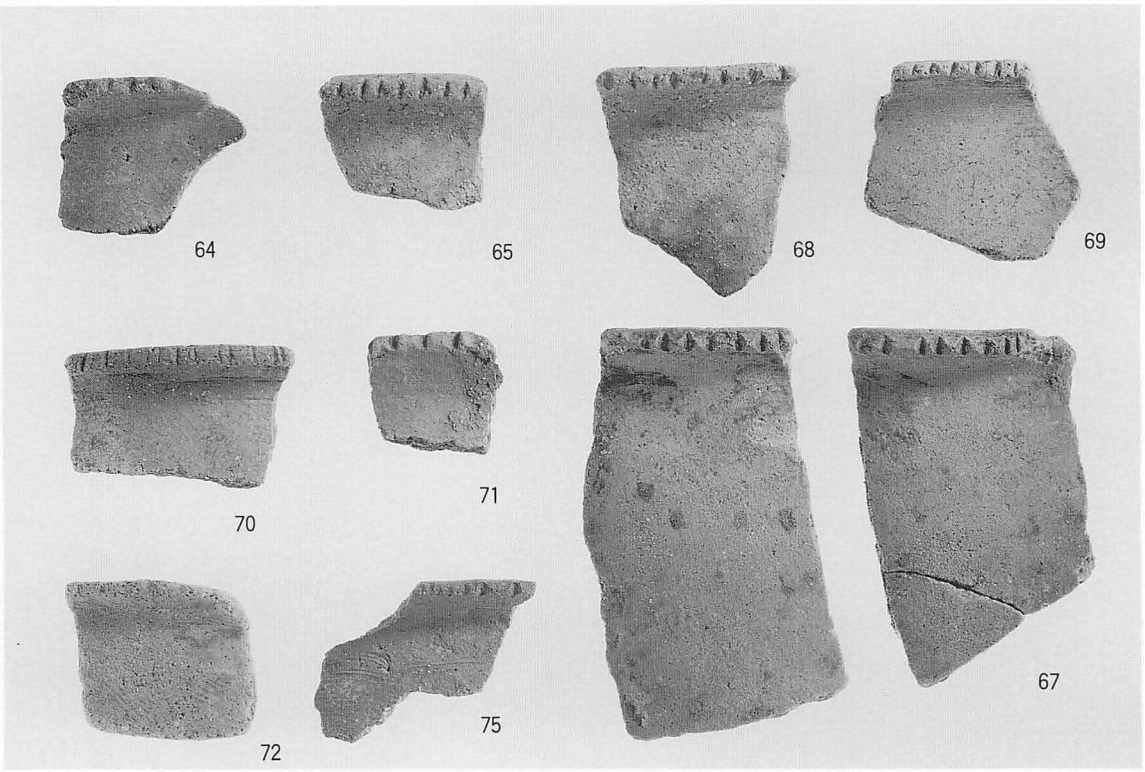


１．第Ⅲ層出土遺物

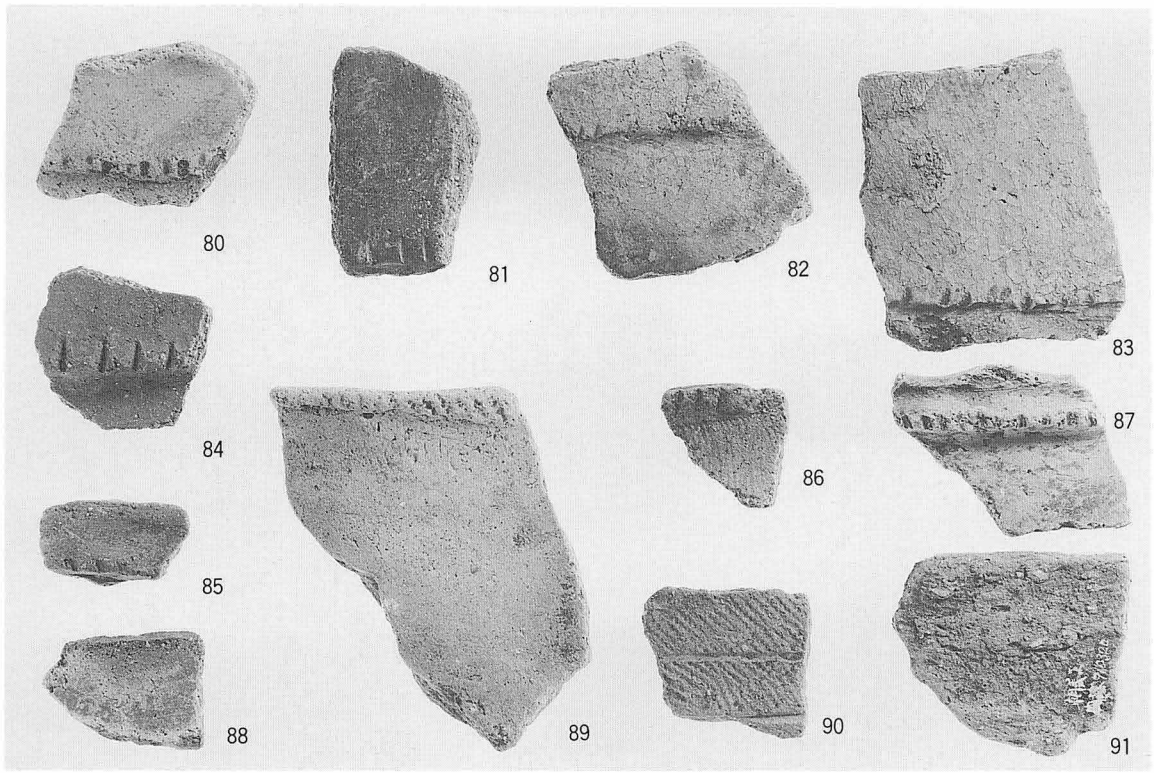


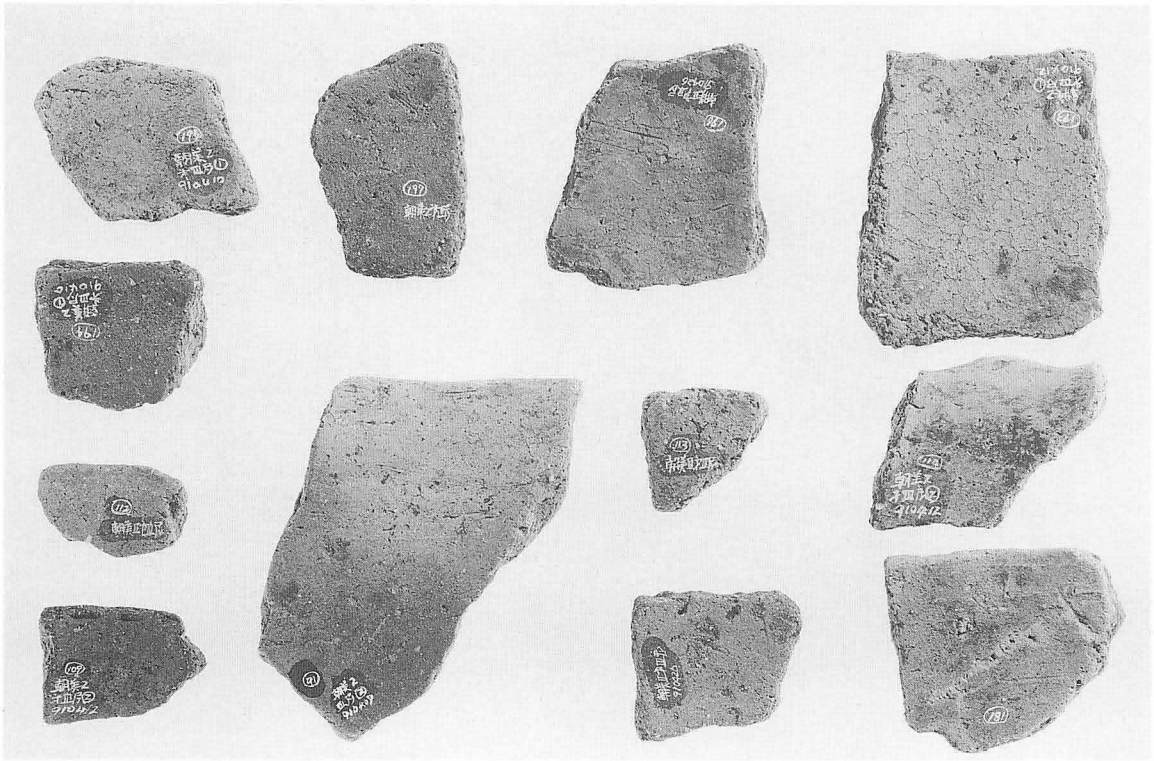
２．第Ⅲ層出土遺物（石製品）

図版十二



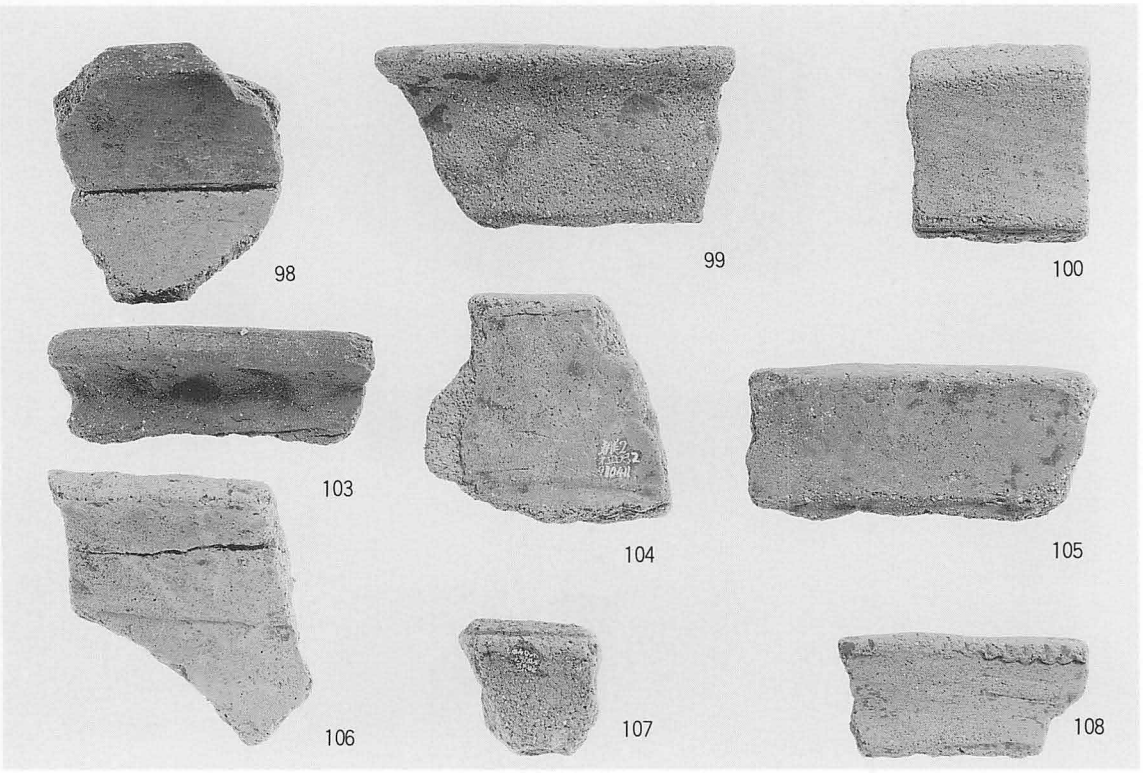
1．第Ⅲ層下層部出土遺物①〔上〕：外面，〔下〕：内面

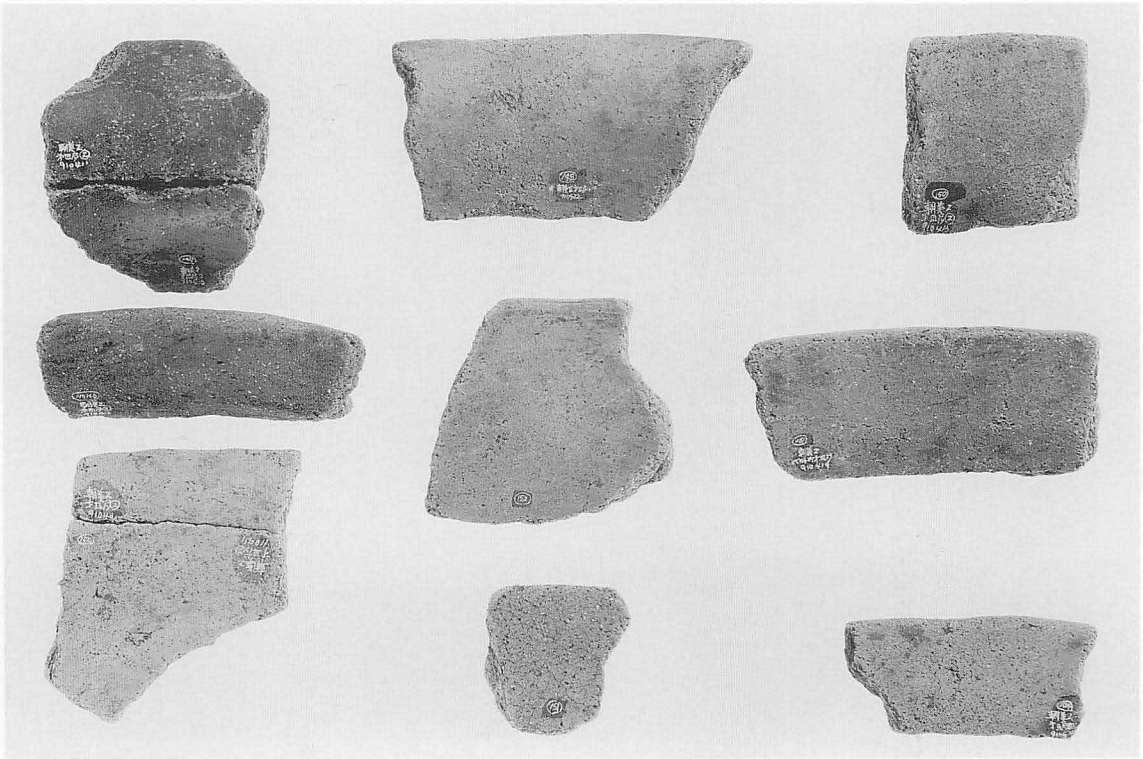




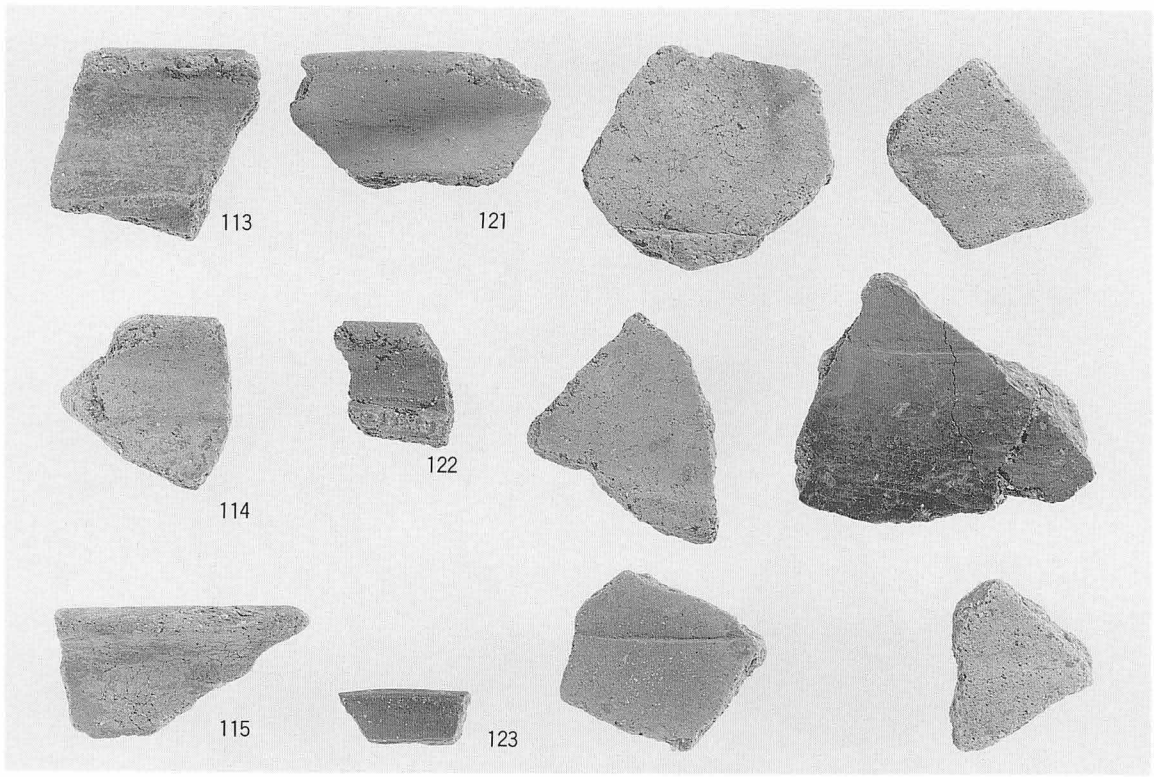
1．第Ⅲ層下層部出土遺物②〔上〕：外面，〔下〕：内面

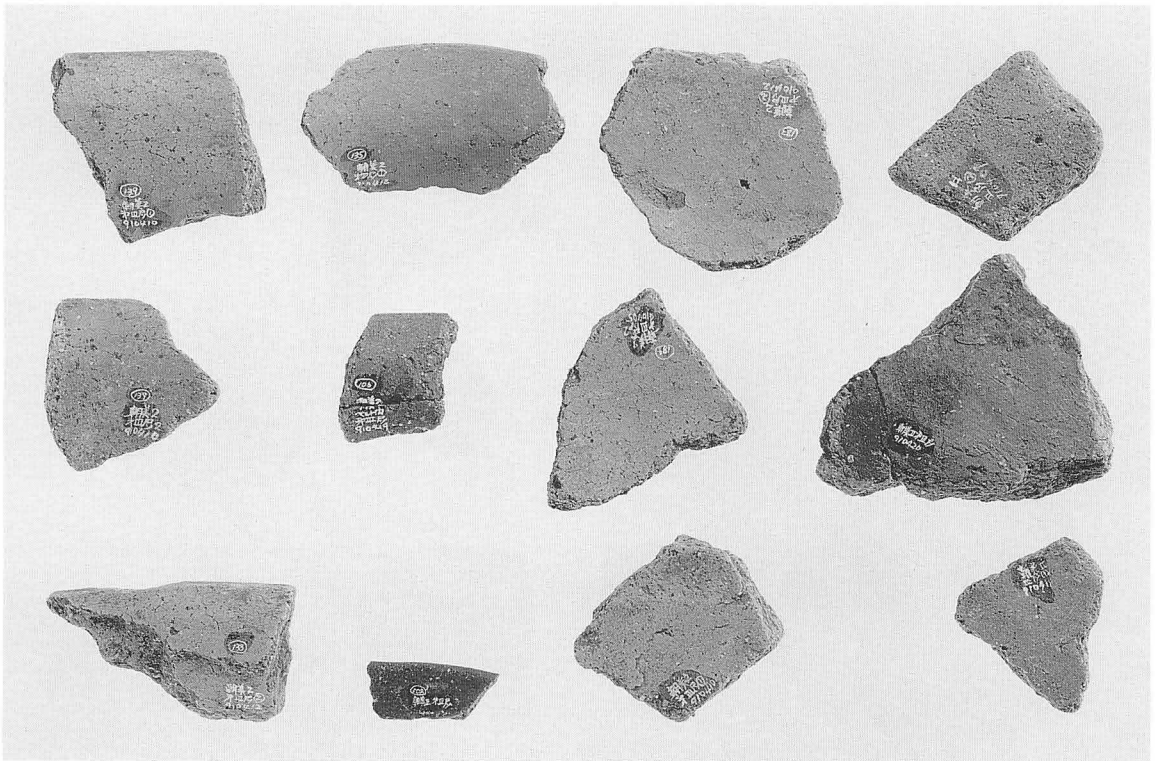
図版十四





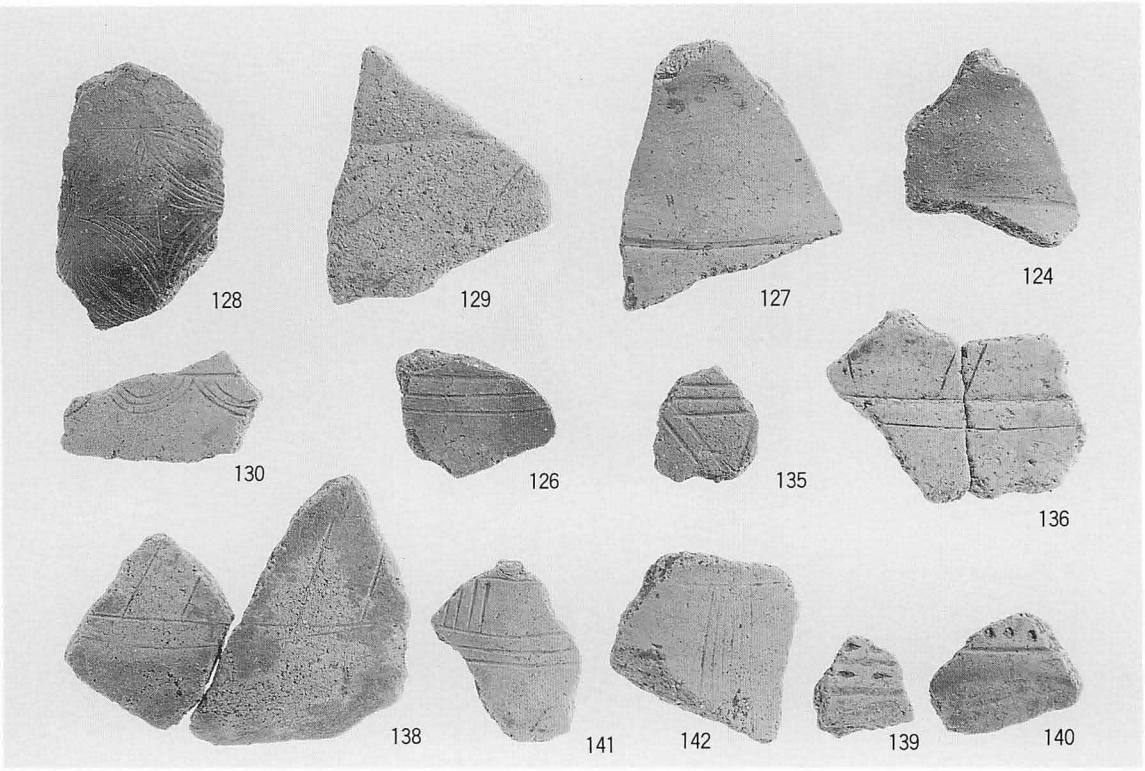
1．第Ⅲ層下層部出土遺物③〔上〕：外面，〔下〕：内面



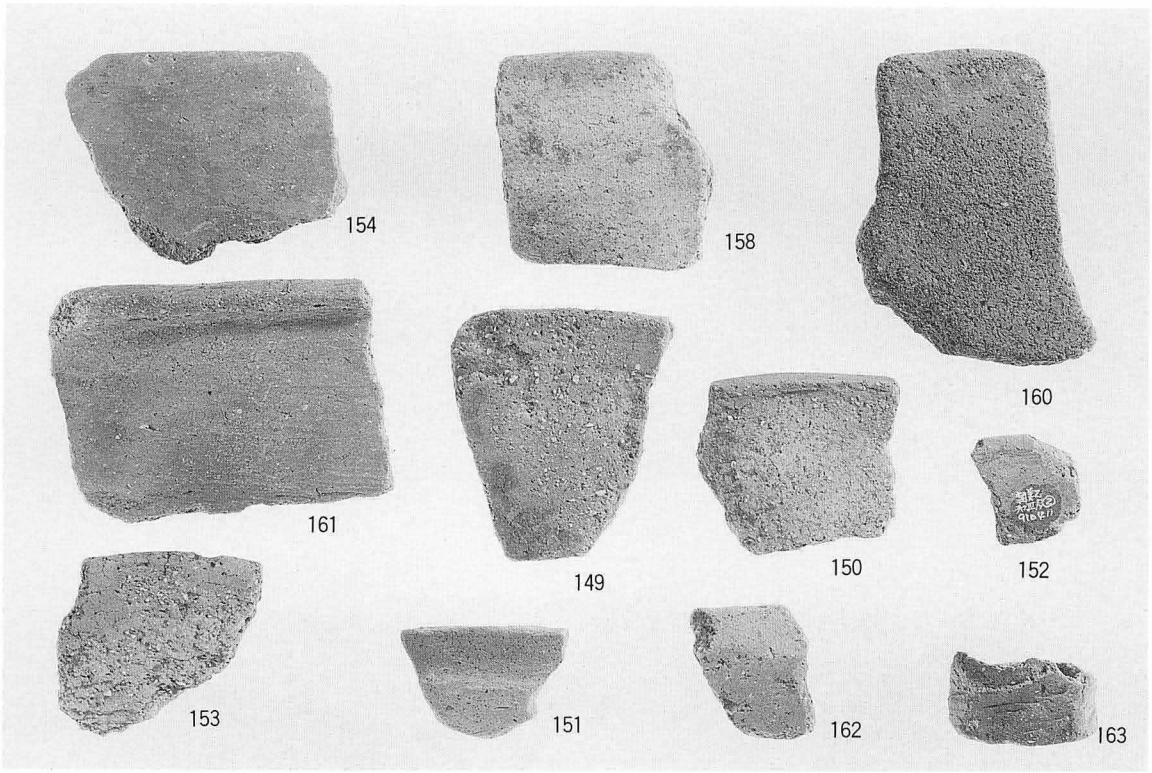


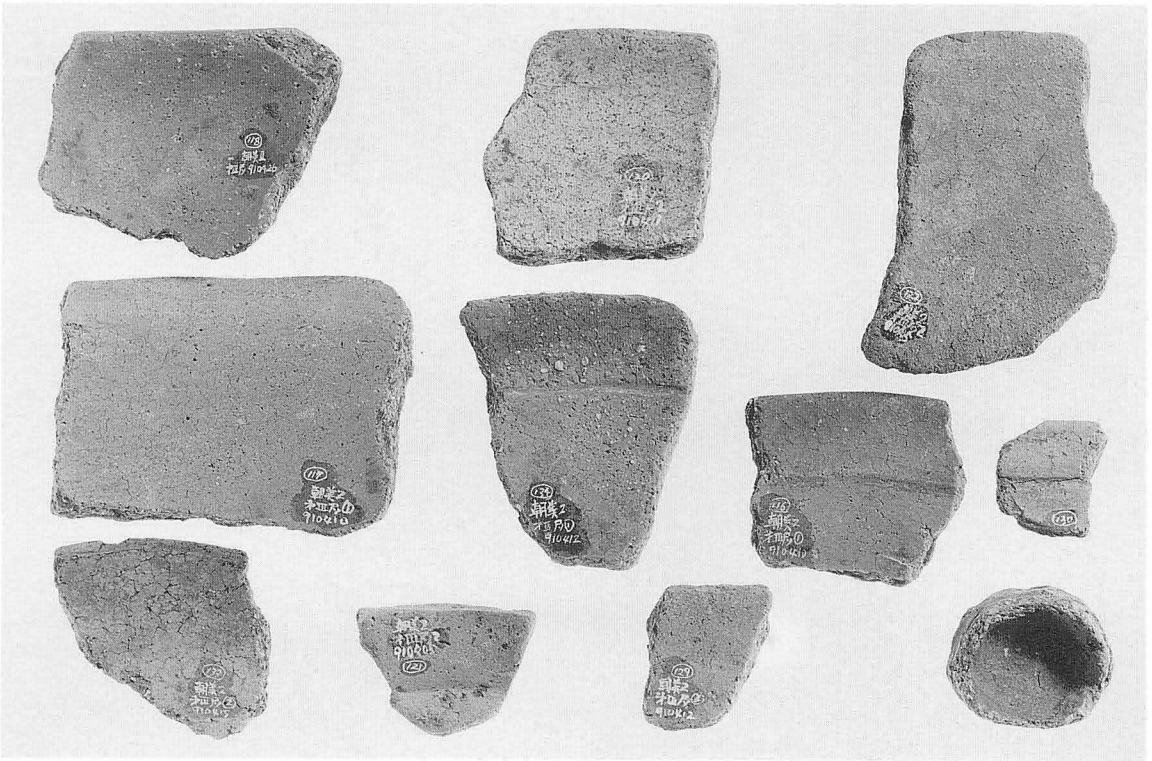
1．第Ⅲ層下層部出土遺物④〔上〕：外面，〔下〕：内面

図版十六



1．第Ⅲ層下層部出土遺物⑤〔上〕：外面，〔下〕：内面

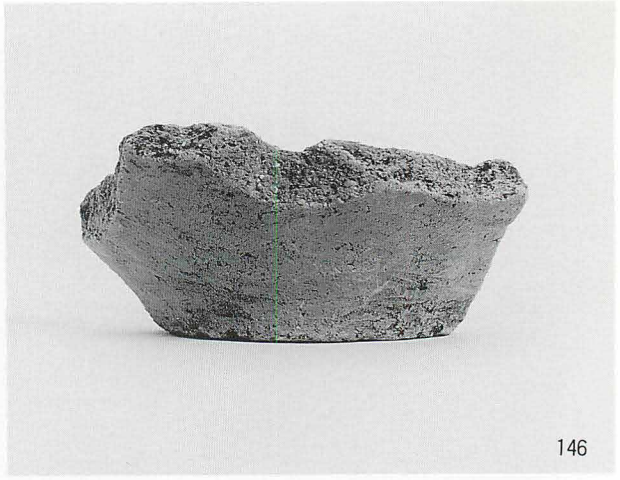




１．第Ⅲ層下層部出土遺物⑥〔上〕：外面，〔下〕：内面

図版十八

92


146

93
144

147

145

1．第Ⅲ層下層部出土遺物⑦

1．辻町遺跡遠景（西より）

2．調査区全景（北より）

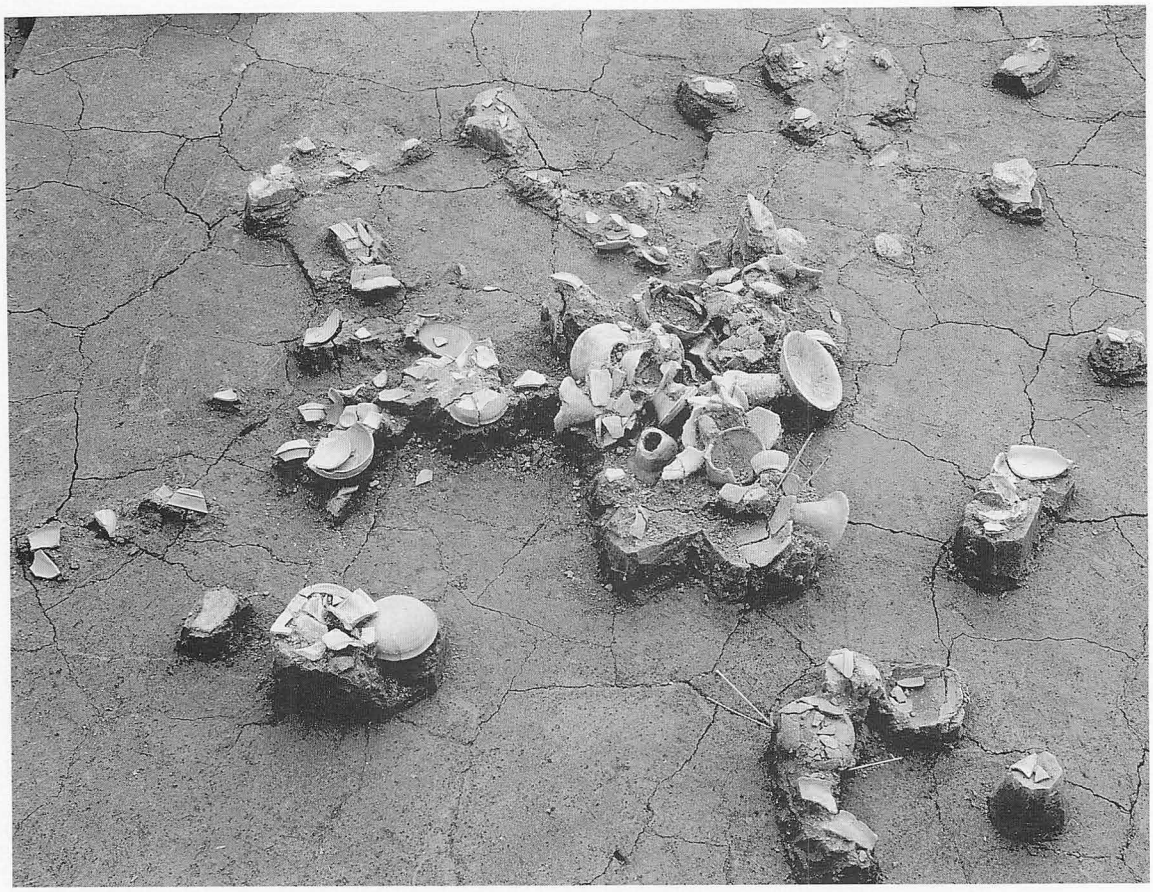
図版二十

1．西壁土層（東より）

2．第Ⅶ層遺構検出状況（北より）

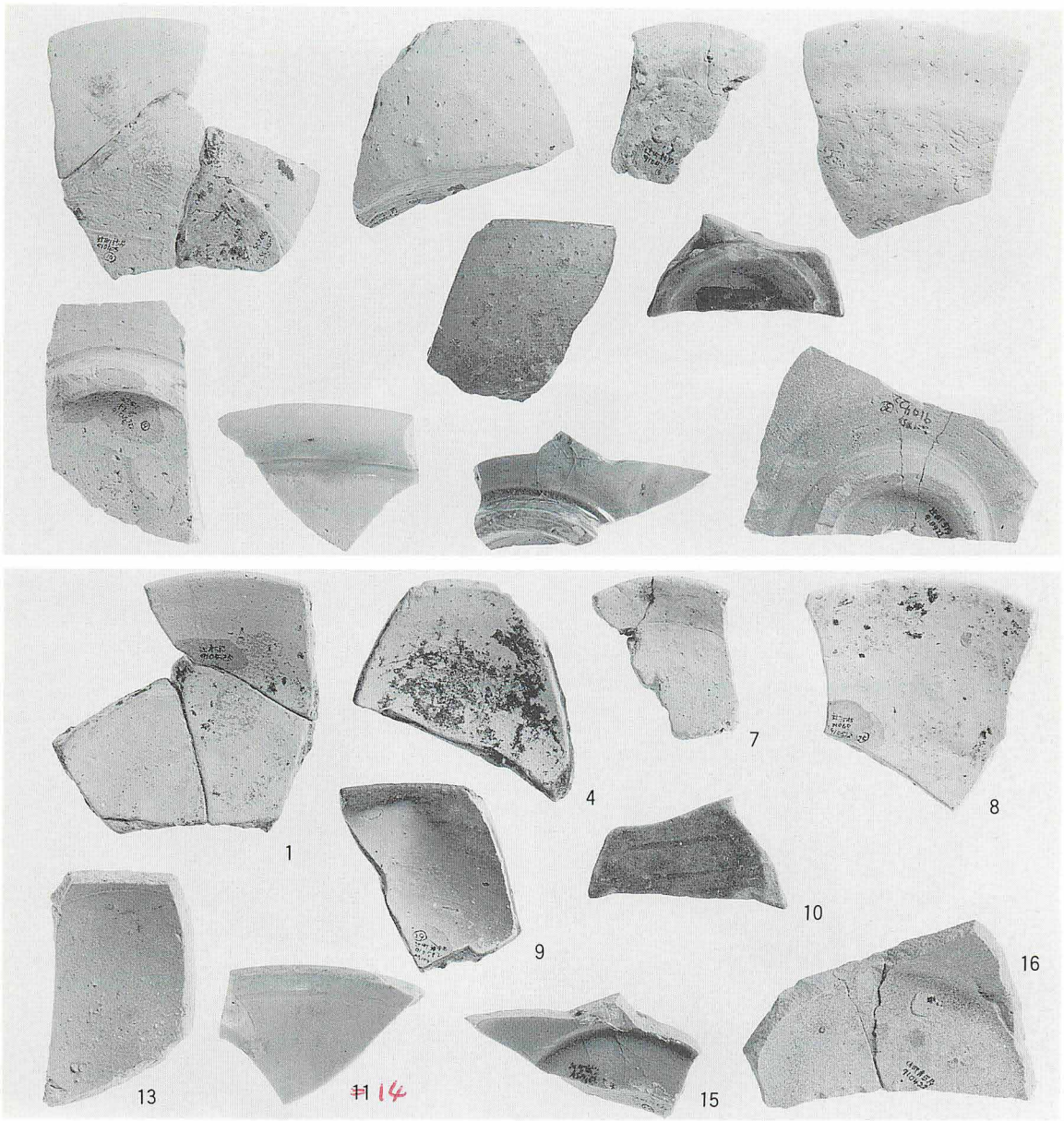
1．第Ⅷ層遺構検出状況（北より）

2．第Ⅷ層中位部遺構検出状況（北より）

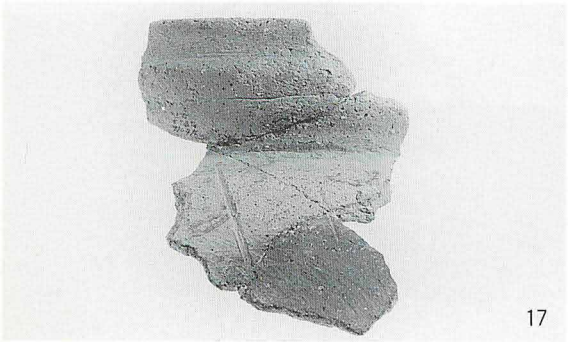


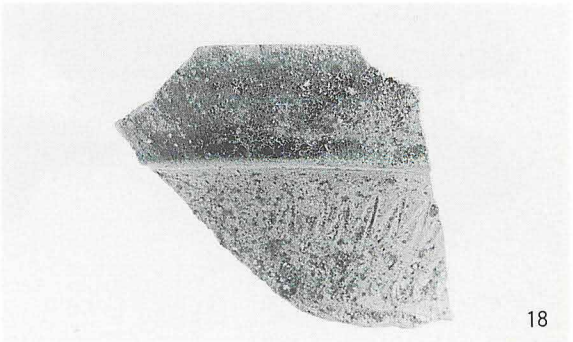
1．SX1 出土状況①（西より）

2．SX1 出土状況②（北より）



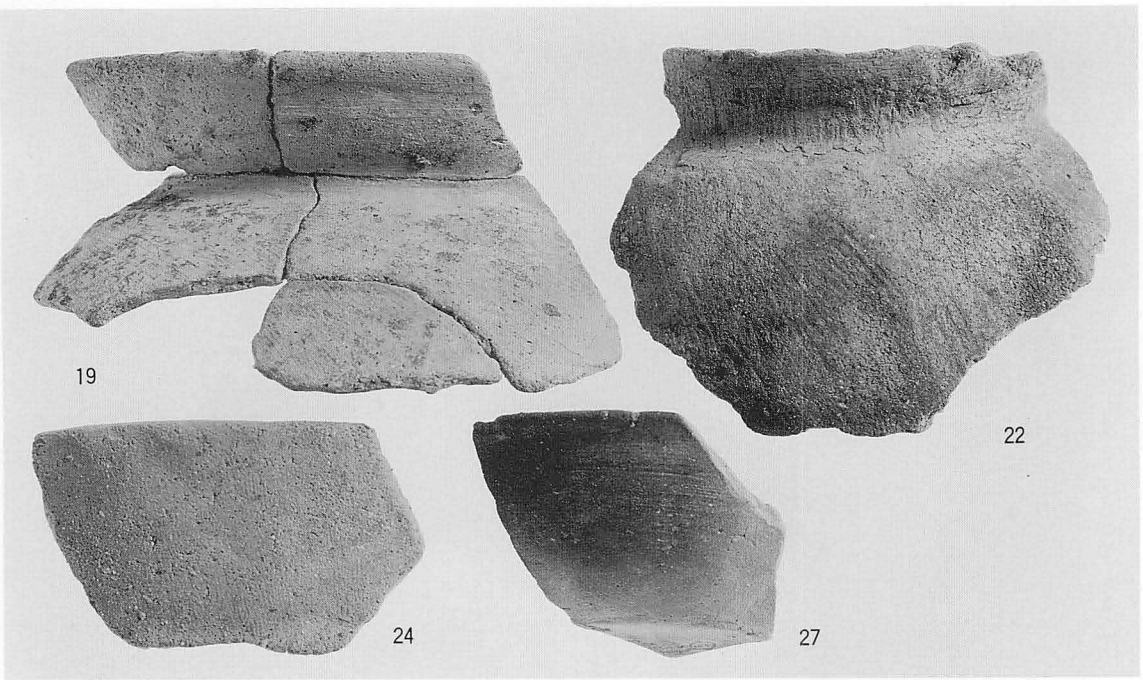
1．第Ⅴ層出土遺物

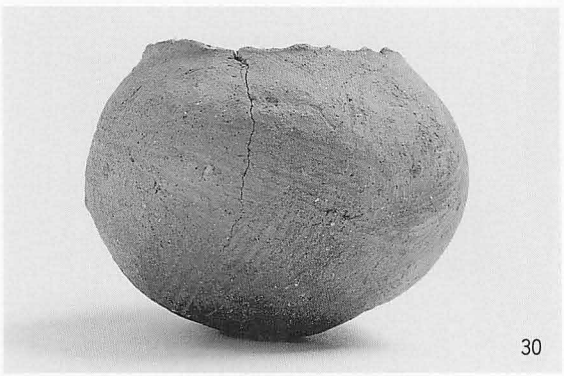


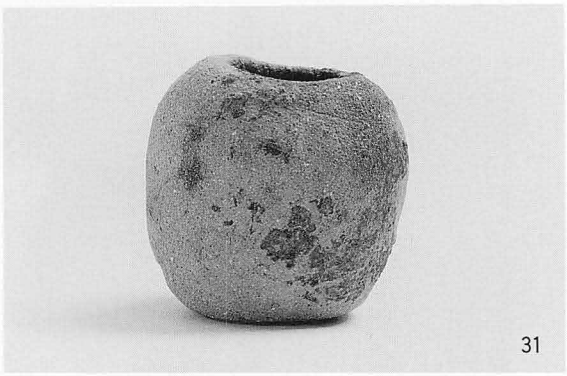


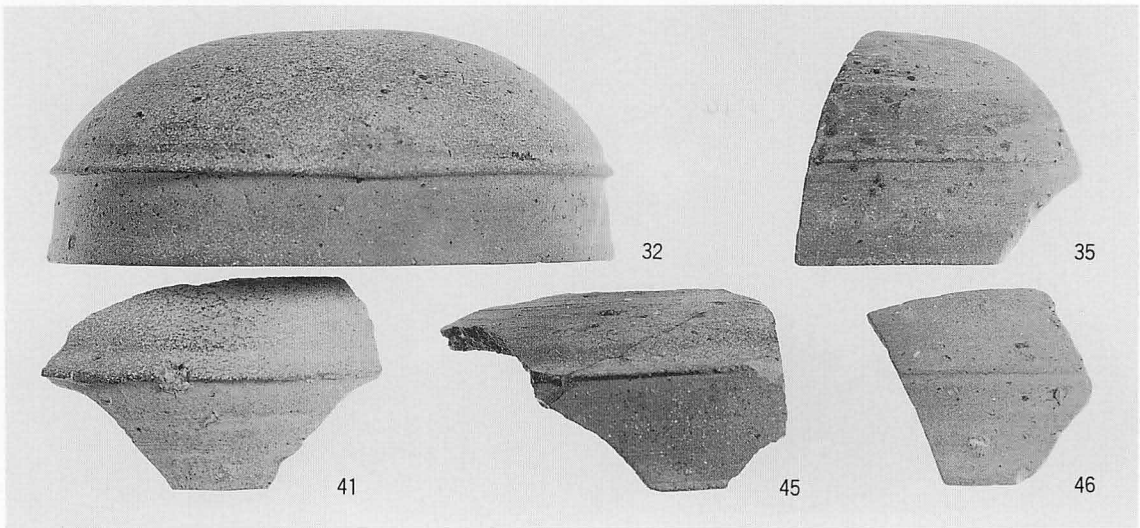
2．第Ⅶ層出土遺物

図版二十四

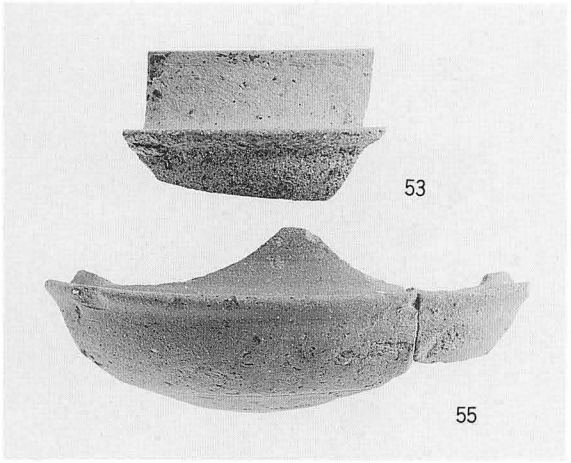


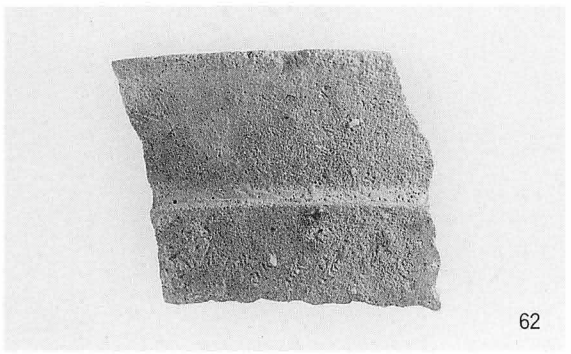


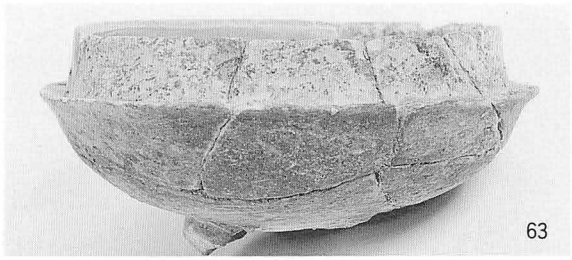


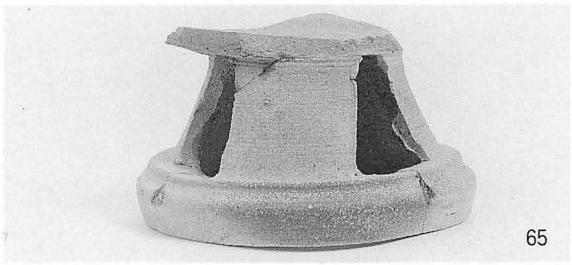


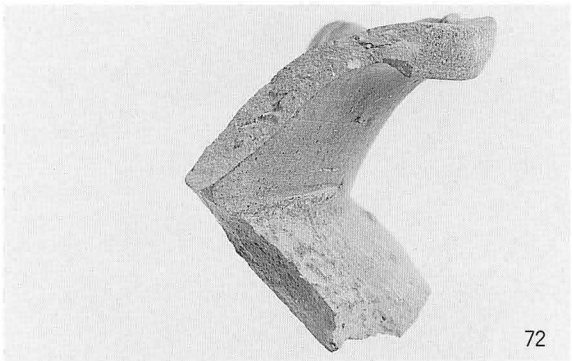
1．第Ⅷ層出土遺物①











1．第Ⅷ層出土遺物②

76

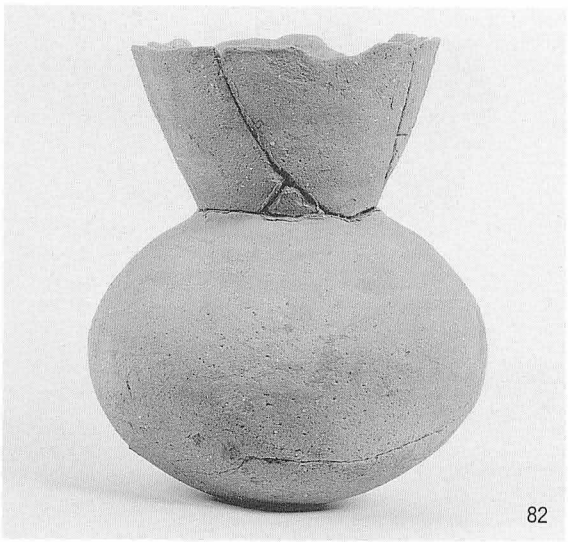
77

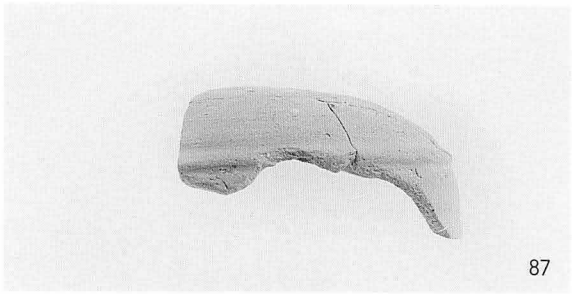
78

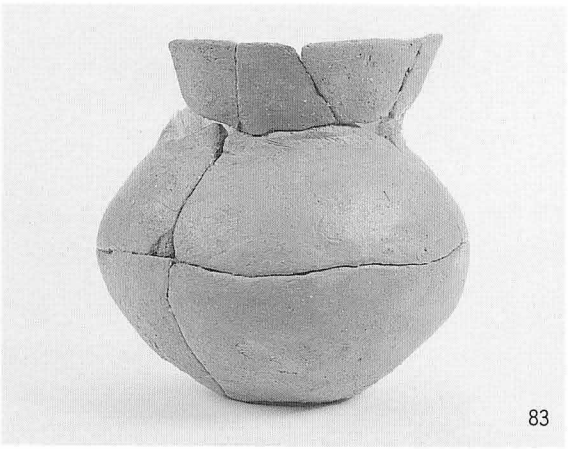
80

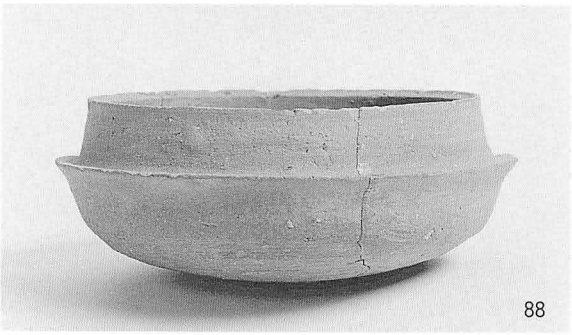
81

1．SX1 出土遺物①

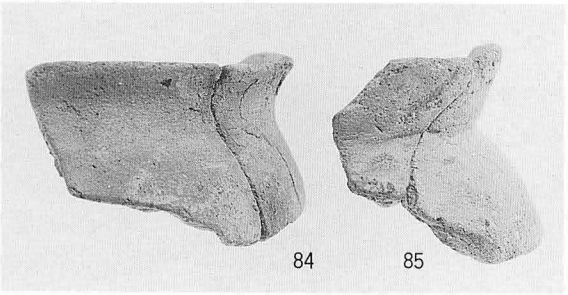

82


87


83

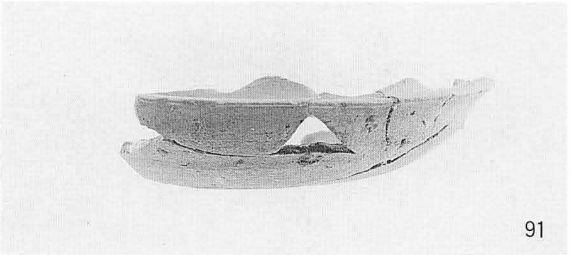

88

89


84 85

90

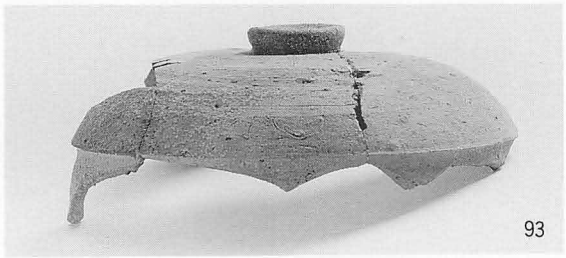
86


91

1．SX1 出土遺物②

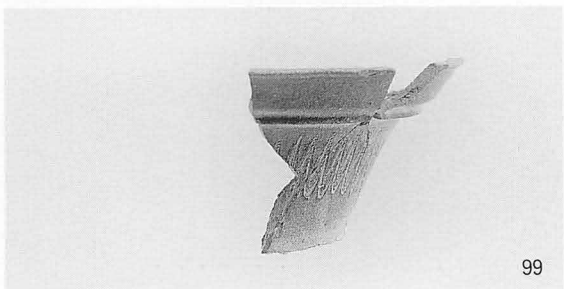
図版二十八

92


93

94

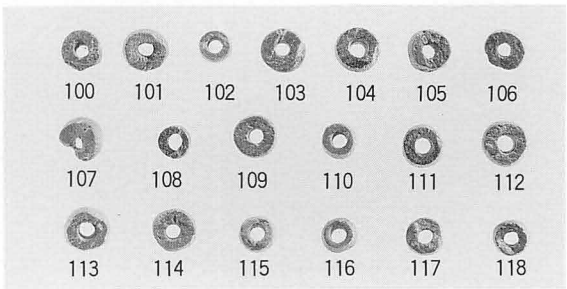
95


99

96

97

98



1．SX1 出土遺物③

松山市文化財調査報告書　第29集

朝美澤遺跡・辻町遺跡

平成４年８月31日　発行

編　集　財団法人 松山市生涯学習振興財団
発　行　埋蔵文化財センター
〒791　松山市南斎院町乙67番地６
ＴＥＬ（0899）２３－６３６３
印　刷　岡田印刷株式会社
〒790 松山市湊町７丁目１－８
ＴＥＬ（0899）４１－９１１１